ISSN 0285-2314

THE JAPANESE JOURNAL OF HISTORY OF PHARMACY

薬史學雜誌

Vol. 21, No. 1. 1986

—目　　次—

学会特集

清水藤太郎博士生誕百周年記念シンポジウム「日本薬学会第106年会（千葉）薬史学部会」
清水先生の人物像と業績……吉井千代田…… 1
漢方と漢薬と清水先生……伊藤　和洋…… 5
調剤学と清水藤太郎先生……堀岡　正義，金枝　正巳…… 9
日本薬局方と清水先生……江本　龍雄……16
くすり博物館と清水藤太郎先生 ……青木　允夫……19

原　著

日本の本草学者は広東人参をどう見ていたか……浅野　正義……21
「金華山道碑」に刻された病気予防食について……那 須　務，吉崎　文彦，久道　周次……28
柴田承桂と長井長義——先覚者たちの薬学振興論をめぐって——……安江　政一……33
『熊府薬物会目録』所載の薬物の研究（第2報）
　藩内客品七十有二種について……浜田　善利……41
『医心方』巻30の基礎的研究　本草学的価値について……真 柳　誠……52
日本薬局方に見られたヒ素含有製剤の変遷……山田　光男，松本　仁人……60

THE JAPANESE SOCIETY OF HISTORY OF PHARMACY
Nihon University, Pharmaceutical Institute,
Kanda-Surugadai, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan

薬史学誌
Japan. J. His. Pharm.

日本薬史学会

THE JAPANESE JOURNAL OF HISTORY
OF PHARMACY, Vol. 21, No. 1 (1986)

CONTENTS

Symposium

Commemorative Symposium of the Centennial Anniversary of Dr. Totaro SHIMIZU's Birthday
〈at the Section of Pharmaco-historia in the 106th Annual Meeting (Chiba)
of the Pharmaceutical Society of Japan〉

Chiyoda YOSHII: Dr. T. SHIMIZU, man and his works 1

Kazuhiro ITOH: Chinese medicine and Dr. SHIMIZU 5

Masayoshi HORIOKA, Masami KANAEDA: Contribution of Prof. Tōtarō SHIMIZU on dispensing pharmacy 9

Tatsuo EMOTO: Japanese Pharmacopoeia and Dr. SHIMIZU 16

Nobuo AOKI: Museum of Pharmaceutical Science and Dr. T. SHIMIZU 19

Originals

Masayoshi ASANO: How did Japanese herbalists think about "Canton Ginseng" ? 21

Tsutomu NASU, Fumihiko YOSHIZAKI, Shuji HISAMICHI: Preventive foods for diseases inscribed in the "Roadside Stone Monument of Kinka-zan" 28

Masaiti YASUE: Shokei SHIBATA and Nagajoshi NAGAI——The opinion of the pioneers of pharmacy on the development of Japan Pharmacy—— 33

Toshiyuki HAMADA: Studies on the crude drugs in "Yūfuyakubutsukai-mokuroku (熊府薬物会目録)" (II) On seventy-two guest drugs in this country 41

Makoto MAYANAGI: A basic research on the vol. 30 of the "Ishinhō" On historical and herbological value 52

Mitsuo YAMADA, Yoshito MATSUMOTO: The transition of arsenic trioxide and its preparations in Japanese Pharmacopoeia (between JP I and JP XI) 60

入会申込み方法

下記あてに葉書または電話で入会申込用紙を請求し，それに記入し，年会費をそえて，再び下記あてに郵送して下さい．

〒101 東京都千代田区神田駿河台 1—8

日本大学理工学部薬学科生薬学教室 滝戸道夫

電話: 03—293—3201 (代)

郵便振替口座: 東京 2—67473, 日本薬史学会

薬　史　学　雑　誌
21(1),　1～4　(1986)

学会特集

清水藤太郎博士生誕百周年記念シンポジウム
「日本薬学会第106年会（千葉）薬史学部会」

Commemorative Symposium of the Centennial Anniversary of Dr. Totaro SHIMIZU's Birthday
〈at the Section of Pharmaco-historia in the 106th Annual Meeting (Chiba) of the Pharmaceutical Society of Japan〉
April 3, 1986

清水先生の人物像と業績

吉　井　千代田*1

Dr. T. SHIMIZU, man and his works

Chiyoda YOSHII*1

清水藤太郎（1886～1976）は，明治19年3月30日，宮城県仙台市南材木町の長尾喜平太の長男として生まれ，幼少の頃から知識欲も向学心も旺盛であった．生家の経済的事情のため進学できず，たまたま雇用先として与えられたのが，仙台医学専門学校の佐野喜代作薬学科長の助手として働くことであった．明治35年（1902）17歳の時であった．佐野教授は，東京帝国大学医学部薬学科出身で有機化学・製薬化学を担当，その助手として講義，実習のすべてを毎年聴講することのほか，他の分析化学，鉱物学，調剤学等にまで，時間の許す限り勉学に努めた．

“私が生涯を通じて，薬学に打ち込むことになった動機は，家庭の事情による全く偶然ともいえる就職からだ”と，若き日を追想するたびに，感慨に堪えないようだった．

もし，佐野先生との出会いがなかったとしたら“偉大な博学的薬学者・清水藤太郎”の存在はなかったかもしれない．

3年後，佐野先生にすすめられて薬剤師検定試験を受け，学説・実地共に合格したが，弱冠19歳であったため，2年後に登録され薬剤師資格を取得するまで，佐野先生が薬局長を兼務している宮城病院（のちの東北大学医学部附属病院）で，調剤技術を身につけることになった．

さらに，明治40年，佐野先生の推薦により，

*1 日本薬史学会

神奈川県庁で，衛生技手として勤務することになった．当時不良薬品の防止強化のために各府県に専門の薬品巡視官が置かれ，飲食物取締りのための増員を要するという時代背景によるものであった．上司の神奈川県衛生技師湯浅武孫氏は，長尾技手の精勤と俊才を認め，自ら媒酌人となり，明治44年(1911)，神奈川県薬剤師会長であった清水栄助氏の長女寿々さんとの養子縁組成り，初めて清水姓を名乗ることになった．

この事がまた，その後の人間形成と多彩な薬学・薬業の領域における幅広く深い業績との密接な関連をもつことになるのであった．清水家の人となった翌年から，養家の店を近代的経営による薬局とすることに力を入れ，アメリカから薬局経営に関する図書，雑誌などを取り寄せるなど，熱意を傾けた．

このように，直接間接，佐野喜代作先生によって，全生涯は運命付けられたといってもよい．

× × ×

独学でありながら，遂に薬学の最高峰を極めた薬学博士清水藤太郎その人の，後世に残した数々の業績は，今後長く伝えられるに違いないが，その遺徳を偲ぶため本年の第 106 回日本薬学会年会の薬史学部会でも，その生誕 100 年を記念して，シンポジウムを開催した．名著『日本薬学史』は，去る24年発刊された A5 判 531 頁に及ぶ大冊であり，わが国の薬学・薬業・薬物の沿革を詳細に記録した文献として多方面から高く評価されている．特に，その内容が学位論文に値するとして推薦され，東京帝国大学医学部教授会で審査の結果，薬学博士号を授与されたことは銘記されるべきであろう．

著者の歴史観は，その後，「日本薬史学会」の創立に当たって，その必要性を強調し提唱したことにつながるものであった．すなわち“歴史は過去の諸現象を論じて反省を促すことによって，将来の問題解決の鍵を与える．歴史を知らずして向上はない．例えば薬物史に幾多の史実から疾病の治療に用いた薬物に関する諸現象を抽出し整理し批判し，それによって民族の発展上どのような役割を演じたかを論ずることを主眼とする”というものであった．

そして，“医薬用薬物資材の変遷発達の跡を記述し，その因果関係を明らかにするとともに，その生産，取引，消費の経路および関連した人々の精神的，物質的活動の沿革について詳述する．それ故に，薬物史は，医学史，博物学史，理化学史に直接関連あるだけでなく，経済史，商業史，交通史，貿易史，食物史，農業史，工業史，風俗史，美術史，言語学史などにも深い関係がある”として，自らもまた幅広い学問の世界に没頭することになった．多年にわたる独学力行に際して，師であり友でもあった貴重な蔵書・文献などは，挙げて「内藤記念くすり博物館」へ寄贈し，博物館図書室の中心をなす「平安堂文庫」として書架を満たしている．

自らの著述活動の範囲も広く，出版・刊行図書数の多いことを知れば，その精力的な向学心の旺盛なことは驚嘆に値しよう．すなわち「薬局方・公定書」関係 28,「薬史学」関係10,「語学・外国語」関係12,「薬剤学（調剤・製剤)」関係10,「和漢薬・漢方・本草」関係19，その他学会誌，雑誌・新聞等に対する寄稿など，執筆活動も極めて盛んであった．

死に先だつ 1 年，去る 50 年 3 月，『和漢薬索引』が刊行された．これは，自営の薬局の実務に関連して，漢方医学と和漢薬の文献調査研究に努め，和漢薬関係の著書は多数あるものの，漢方医学研究の悩みは漢字名であるとして，独自の創案に成る索引表を作って使用してきた．それを「第一部・和漢薬常用名の索引」,「第二部・和漢薬全漢字名の索引」,「第三部・和漢薬カナ書常用名」の三部作とし，内藤記念科学振興財団からの刊行助成金100万円によって刊行されたものであった．

102 に及ぶ中国および日本の古今の本草書および生薬に関する編著書（原典）に掲げられている和漢薬を克明に研究考証し，誤りを正して，それらの薬名を整理配列して作表，求めようとする和漢薬に関する収載事項の所

在頁を検索できるという創意による点が，研究調査面に貢献度高いものとして高く評価されたのであった．

戦後の混乱状態がつづいていた去る24年(1949)，薬剤師の職能の向上を図るために，薬剤師教育は生涯教育であるとして，月刊誌『薬局』の創刊を企画し，自ら編集主幹として当たることを決め，南山堂の河田孫一郎氏に相談し鈴木正二社長の同意を得て，翌25年1月から南山堂の刊行により，調剤・薬局経営などの実際薬学に関し寄与するところが大きかった．この『薬局』は，その後ますます発展し発行部数も増え内容も充実し，薬剤師の職能を高めてきた貢献は，現在なお続いている．

× × ×

清水の生誕年と同じ明治19年（1886）にわが国の第一版日本薬局方が公布され，本年は記念すべき百年目に当たる．往年『日本薬局方五十年史』と，『日本薬局方七十五年史』とが，それぞれ記念出版されているが，共に，ほとんど清水委員の単独執筆編集によるものであった．薬局方については世界的視野で，欧米先進諸国の薬局方をはじめ，およそ薬局方関係の資料をめぐる調査研究に熱意をもって取り組んだ．その事は，日本薬局方の沿革を綴った五十年史ならびに七十五年の内容を精読すれば，うなずかれよう．

第一版日本薬局方の原案作製を，日本政府から依頼されたオランダ人，A. J. C・ゲールツ（GEERTS，オランダでは，ヘールツ）は，草案成ったのち，不幸にして第一版薬局方公布の日を待たず，明治16年（1883）8月30日横浜の地で病死し，外人墓地に永眠している．薬局方学者でもある清水は，ゲールツ先生を日本の薬学，薬局方等に関して貢献度高い恩人として，その遺徳に終生追慕尊敬の念を忘れず，永年にわたって展墓の礼を欠かさなかった．

各国の薬局方を調査する間に，興味をおぼえたのは，同じ薬品のラテン語名であっても，各国で名称表現を異にし，用字，用語法の相違あることに気付いた．その理由は，化学薬品は近代の所産であるためラテン語に相当する語名がなく，各国がそれぞれ命名した結果であるとし，まず古典ラテン語を研究する要を認めた．東京帝大医学部薬学科の生薬学の朝比奈泰彦教授が植物学関係のラテン語に詳しいことから，同教授からラテン語について教えられるところが大きかった．のちに，朝比奈・清水共著の『医薬処方語・羅和—和羅語入門・処方文例』，『植物薬物学名典範』，『医薬ラテン語』等の著書のほか，自著『薬学ラテン語』にまでラテン語に対する好学心を満足させ，その結果後学者のために多くの指導的役割まで果たした．

前述したように，万巻の書を友とし，あるいは師として勉学にいそしむ日が多かったから，愛蔵する図書文献等から成る「平安堂文庫」は，現在，「内藤記念くすり博物館」に寄贈され，同館の図書室に収められている．この博物館は，去る45年，内藤記念科学振興財団（理事長内藤豊次氏）が付帯事業の一つとして，わが国で最初の常設的の薬の博物館を創設することになり，その企画・設立・運営について，内藤理事長は，日本薬史学会の創立以来の常任幹事である清水博士に依頼するところがあった．その当時の事を，博物館の前身である「内藤記念くすり資料館」の施設概要と展示内容を写真と解説でまとめた案内図録の巻頭で，次のような意を記している．

“…欧米先進諸国は，いずれも薬に関する資料館または博物館をもち，自国の薬に関する歴史的経過を明らかにしている．それに反し，わが国では，これに類するものは皆無の状態であるため，過去の薬学・薬業・薬物等の発達の跡を伝える資料や図書を蒐集し，保存し管理し展示し，後日に悔いを残さないように努めることにしたい．そのため，日本薬史学会の清水博士らを中心に協力を求め，いずれ総合的な健康科学博物館として内容の充実を図り，健康福祉の啓発と増進に貢献するようにありたいと考える”．清水博士らは，企画・運営委員として，指導的役割を果たしつつ，博物館の発展に努めた．

「平安堂文庫」の内容は，主として薬学史，医学史，薬制，薬局経営，調剤学，生薬，和漢薬，漢方医学，化学，処方集，新薬，植物，各国薬局方，家庭薬(売薬)，諸学辞典，薬学薬業に関する新聞・雑誌類に及んでいる．

昭和23年10月，朝比奈泰彦博士を団長とする調査団員10名の中の一人として，正倉院御物中の薬物（漢薬），1,200余年前の植物性生薬の桂心，厚朴，大黄などが完全に保存されているのを，親しく観察した．目録の種々薬帳にある60種の薬物のうち40種を確認している．

去る30年12月，朝比奈泰彦・『正倉院薬物』として調査報告が刊行されたが，この中に「正倉院薬物の史的および商品学的考察」（清水藤太郎）の記述が収録されている．そしてまた，「正倉院御物薬種献物表」の中に，“白皮九斤六両並袋”と記されているのが，“白及”の誤りであることを指摘し，その結果書き写すときに誤記されたものとして，公的に書き改められたという経緯については，知る人はほとんどいない．

日本薬史学会は，去る29年（1954）10月25日に結成されて発足したが，その創立趣意に曰く，“薬史研究が，薬学の進歩発展に大きな貢献をするという点については，久しい以前から識者の認めていた所である．しかし，今までの，わが国における薬史研究は全く個人の趣味にまかされており，諸先輩，有識者の貴重な研究成果は徒らにうずもれ，発表される機会も組織もなく，したがって全薬界，ひいては社会の進歩発展に何ら資することのないありさまであった．…我々は，ここに古来の薬学の宝を探り，新たなる発展に資したいと考え，日本薬史学会の設立を願い，多くの方々の協力を得て，日本における薬学の研究，薬業の正しい進歩と発展に寄与せんとするものである”．

清水常任幹事は，創立以来，亡くなるまで20余年間，抜群の史的考察による多くの発表，特別講演，執筆活動を通じて，あらゆる面から，学会の充実と発展に尽くした．

これより先，1952年，オランダにある「国際薬史学アカデミー」から，“薬学の歴史に最も精通している人”として会員に推薦され，万国薬史学アカデミー賞を受けた．さらに1971年，チェコスロバキア国プラハ市で開催された国際薬史学会議に，日本薬史学会を代表して参加し，各国の著名な薬史学者たちとも交歓したことも，この道の第一人者であることを示していると言うことができよう．

わが国における医薬分業は，実に長年月を経ても旧態依然として完全実施が阻まれているが，『薬局』誌上，清水主幹は，しばしば医薬分業論を展開した．“開局薬剤師は，常に接する客（民衆）に対し，薬は薬局で求めるもので，医師から薬を買うのは変則だ，ということを宣伝することに努めるべきだ．政治的解決を期待するよりも，実務を通じて民衆の理解を得ることが最良の分業促進策である”ことが持論であった．

輝かしい業績の全般にわたって詳述することのできないことを遺憾とするが，40余年にわたる教職の座（旧・帝国女子医学薬学専門学校薬学科，現・東邦大学薬学科）を通じて，将来性に恵まれている学生を大事にしなければと，懇切を極めた迫力ある授業ぶり，長年にわたる経験からの薬局経営論，薬局方概論，ラテン語，調剤学等を講じた．

しかも，学歴社会と言われる現代世相に対し，学問はやろうとする意欲と情熱があれば最高のものを身に付けることができるということを自ら示したという点で，別の大きな教訓を与えたに相違ないように思う．

薬　史　学　雑　誌
21(1),　5～8　(1986)

漢方と漢薬と清水先生

伊　藤　和　洋*1

Chinese medicine and Dr. SHIMIZU

Kazuhiro ITOH*1

清水藤太郎先生の漢方は古方派に属している．それは古方派の湯本求真先生に師事し，その学派の伝統を受け継いでいるからである．清水先生が漢方を本格的に始めたのは，その生涯の半ばともいうべき42歳の時からである．昭和３年の夏，先生は石巻から船で宮城県沖の金華山に出かけ，黄金山神社に参詣し，再び石巻に戻るという船旅をしたことがあった．その際，酷く舟酔いして石巻に上陸しても癒らず，全くの病人となって横浜に帰り着くという出来事があった．先生はその頃まで舟や車には乗らないうちから酔うという体質で，顔は常に青いので中学校ではブリュと綽名されていたし，季節の変り目には毎年麻疹が出るという体質でもあったということである．そこで，その前年（昭和２年），『皇漢医学』３巻を刊行して，当時評判かつ有名になっていた古方派の漢方医，湯本求真先生の診療を受けるため東京田端の診療所に往って受診された．その時の処方箋には大黄 7g，芒硝 5g，黄解丸6g １日３回分服とあったので，忠実にこれを調剤して2，３日服用してみると気分は良好となったが，下痢があまり激しく続くので電話で湯本先生に問合せたところ，悪いものだけが出るのだから心配ないという返事であった．それゆえ，数週間，服用を続けたところ，下痢も止まり，病状は全く良好となり，その後は頭痛もなくなり，舟や車にも酔わなくなり，毎年出ていた麻疹なども出なくなり，すっかり体質が改善された．その頃，中学４年になられた令息不二夫氏が風邪気味で，発熱し，吐瀉し，胸やけして，眠れないという症状になった．清水先生は初め，食傷だろうと考えてヒマシ油を飲ませたところ吐いてしまう．口渇が激しく，水を欲しがるので水を与えると，これも吐いてしまう．何を飲ませても吐き出す状態であった．そこで漢方剤の投与を考え，まず下す作用のある小承気湯を投与したが，やはり吐いてしまった．次に吐気止めや嘔吐には半夏が用いられるので，これに生姜を加えた小半夏湯を服用させようと考えて，煎剤器を火にかけながら『皇漢医学』の小半夏湯の条文を見ると「吐して，渇せざる者を治す」とある．不二夫氏の症状には，喉に渇があるので，この「証」に合わないと考え，他項を見ると，渇のある場合は「五苓散，茯苓沢瀉湯，小半夏加茯苓湯を撰用すべし」と明記してある．五苓散の条文を読むと「中風，発熱六，七日，解せずして，煩し（自覚症として苦しく，不快感がある），渇して，水を飲まんと欲し，水入れば則ち吐く，所謂水逆の症状のあるもの五苓散，之を主る」と記されていて，不二夫氏の症状に適中しているので，この方剤を投与することに決め，水逆には散服とあるので，五苓散の処方生薬を薬研でおろして投与したところ，よく服用できるし，胸やけが直り，すやすや眠ってしまい，翌朝，目を醒した時は

*1 日本薬史学会

「奏効神の如し」という文字通り，神業的効果があったということである．これらの貴重な体験で「随証治療」の言葉通り，漢方は「証」に合えばよく効くことを実際に体験したのである．このことが動機となって清水先生は漢方を本格的に研究することになり，日本薬学会が昭和4年1月に薬剤部長会に委嘱して日本準薬局方の編纂に着手したとき，小半夏加茯苓湯を鎮嘔薬として収載したり『皇漢医学』3巻を反復精読すると同時に，この本には索引がなくて不便なので，詳細な索引を作成して実用に供するようにした．この索引は後年（昭和38年）大安書店から『皇漢医学索引』として刊行し，今日では全文の中に組み込まれた書物が出版されている．次いで昭和5年9月から毎月1回，第1日曜に湯本求真先生に直接診療して戴くため，平安堂に出張願い，昭和9年湯本先生が病気のため中止されるまでおおよそ3カ年継続され，自らも学ばれたのである．

昭和11年4月，拓殖大学に漢方医学講習会「偕行学苑」が発足し，同12年4月からは大学の漢方講座に昇格したが，その折清水先生は講師として，大塚敬節，矢数道明先生らと共に戦争のため中止される19年までの8カ年に渉り講座を担当している．

昭和16年には，大塚，木村長久先生らと共著の『漢方診療の実際』を創刊されたが，その時，清水先生は漢方薬物解(各論)，漢方術語解などを担当している．該書はその後，増補改訂を重ねると共に名著として繁用されているし，中国では漢訳され『中医診療要覧』という書名で発行され，部数10数万部に達している．その後，韓国語，フランス語，ドイツ語などにも翻訳され広く欧米において東洋医学が再認識されるきっかけにもなった．

昭和23年9月21日公布の第1版国民医薬品集に初めて4品目の漢方処方が発汗解熱剤，鎮咳剤2号，血圧降下剤2号，黄疸剤の名称で収載されたが，これらは葛根湯，青龍湯，三黄散，茵蔯蒿湯の処方であり，駆虫剤1号として鷓鴣菜湯の処方から大黄を除去したものも収載されている．この第1版は，昭和30年3月15日，第2改正国民医薬品集として公布され，葛根湯，青龍湯，三黄散，小半夏加茯苓湯の4品目が漢方処方名で収載され，これらの品目は昭和36年4月，第7改正日本薬局方第2部に引き継いで収載されている．これら一連の収載には勿論清水先生等の努力があったのである．

清水先生の号，平安堂は自家漢方製剤「上気平安湯」の名に由来する．明治44年4月，25歳で清水家に入籍された時の店名は「紀伊国屋」，「キノクニヤ」，「済世堂」などの名で呼ばれていたが，翌年先生が薬局を経営することになり，新しく店名を付けるに当たり，自家製剤の一つ「上気平安湯」が「ヘーアンドー」の略名で呼ばれていたので，店名を「清水平安堂」とし，平安堂を号としたのである．この年（明治45年7月30日）明治天皇が崩御され大正に改元されている．

漢薬については自家製剤の製造を通じて，その実態をよく知っていられたが，その後多くの体験，業績を積み重ねている．例えば昭和14年7月から上海自然科学研究所の研究嘱託として，上海，南京，蘇州，杭州などで多くの漢方医や関係者に会って調査している．また，昭和16年と17年の両年には満州国の薬局方調査委員として新京（長春）に滞在し，漢薬の標本蒐集，品質，規格，類似品あるいは偽造，の鑑別法に関する調査を行い，満州国薬局方ともいうべき，漢薬415品目を規定した．翌年ガリ版刷りのものが各委員に配付されたが昭和20年，満州国の崩壊により公布されなかった．けれど昭和38年10月，廣川書店で印刷して横浜平安堂薬局刊行版として発行している．昭和32～33年頃，横浜南大桟橋にあった厚生省の輸入医薬品監視横浜分室に勤務することになった演者は，その機会に神奈川県薬剤師会館で毎月2回ほど催されていた清水先生の漢方生薬講座を聴講する好機を得，また草楽会の採集会にたびたび同行したが，清水先生は毎回多くの標本を持参して，これらを示しながら講義をされた．特に印象に残っているのは竜骨など前世紀棲息の哺乳動物などの骨の鑑定法の一つとして，この動

物の骨髄の部分を，御自分の舌でよく吸着させて，その特長を示した姿である．また，阿膠の講義に棒状，板状，粉末状などの形状をした精成ニカワの沢山の種類を持参され，それらを詳細に説明されたことなども忘れられない．

なお，正倉院薬物の調査中「盧舎那仏種々薬」帳に明記される白皮は白及の書き誤りだろうと指摘し，従来の桑白皮の略字説を正したが，その眼光紙背に徹した眼力をみても，単なる生薬学者というよりは，本草学者と言うべきであって，かつての『大和本草』の貝原益軒，『本草綱目啓蒙』の小野蘭山にも匹敵する昭和の本草学者の感を深くしたのである．

漢方と漢薬についての清水先生の著書には次のようなものがある．

1. 昭和9年刊行　漢方薬物学　春陽堂
（この書物は拓殖大学の漢方講座の講義用として刊行されたもので古方で用いる生薬を生薬名，基源，性状，選品，成分，薬効，薬方，用量，貯法を記した参考書である．）
2. 昭和10年刊行　本草辞典　春陽堂
（月刊本草に連載した26回分を纏めたもので，和漢薬の名前をローマ字綴りとし，ＡＢＣ順に簡単に解説した机上の便覧である．昭和52年第一書房より復刻もされている．）
3. 昭和16年刊行　漢方掌典　薬業往来社
4. 昭和30年刊行　正倉院薬物（共著）大阪植物文献刊行会
（「正倉院薬物の史的および商品学的考察」と題して記述担当している．）
5. 昭和32年刊行　漢方大医典（共著）東都書房
6. 昭和38年刊行　皇漢医学索引　大安書房
7. 昭和44年刊行　漢方診療医典（共著）南江堂
8. 昭和50年刊行　和漢薬索引　内藤記念くすり資料館
9. 昭和50年刊行　平安堂記　自費出版
（晩年の89歳の時記述した自叙伝であるが漢方と漢薬についても詳しく記している．）

漢方と漢薬について清水先生が発表した主な月刊雑誌としては，『本草』，『漢方と漢薬』，『薬局』などがある．

月刊『本草』は昭和7年9月より春陽堂から発行されたが，清水先生は毎月昭和本草の名のもとに，横書で連載し，昭和9年12月まで26回にわたって，漢薬について紹介している．この原稿が後，昭和10年に『本草辞典』として出版もされたのである．

月刊『漢方と漢薬』は昭和9年5月，主として清水，大塚敬節両先生の提唱により日本漢方医学会が結成された時，その機関誌として春陽堂から発行されたもので，その編集幹事として湯本求真，大塚敬節，矢数道明，奥田謙蔵，木村長久，安西安周，森田幸門（以上医師），清水藤太郎，栗原広三，木村雄四郎（以上薬剤師），石原保秀（医史学），柳谷素霊（鍼灸），気賀林一（編集）の各氏であった．この月刊誌には毎号大塚，清水先生を初め漢方および漢薬の記事を連載して好評を博したが清水先生は論文105件を発表し，会員を増加し発展させた．しかし日支事変や太平洋戦争の突発により，執筆者各位の応召や用紙の不足により昭和19年遂に休刊の止むなきに至った．しかし，この『漢方と漢薬』誌が今日の漢方復興に寄与した功績は大きいものがある．月刊誌『薬局』は昭和25年1月に創刊されたが，清水先生はその創めから昭和50年までの25年間，主宰者として毎号健筆を振ったことは多くの人々の知るところである．漢方関係の論文として，『長沙正経証彙』（吉益東洞の高弟，田中栄信の著書），『重校薬徴』（尾台榕堂校正），『刪定傷寒論』（中西深斎刪定）などについて，それぞれ数回にわたって詳細な解説をして大いに注目された．

その他『漢方の臨床』などにも度々論文を発表している．

清水先生が植物分類学を初め，採集されるようになったのは明治44年からのことであっ

て，この年横浜植物会に入会している．この植物会は明治42年10月，牧野富太郎先生を教師として発足したもので，毎月１回，採集会や講習会を開いていたが，清水先生は毎回欠かさずに同行しているし，当時牧野先生が主幹した『植物研究雑誌』に清水先生の写真を度々掲載した．明治44年東京にも植物同好会が生まれたので，これにも入会し，採集に同行し，大正時代には時々，朝比奈泰彦先生引率の東大薬学科の学生の採集会にも参加し，朝比奈先生の知遇を得ている．その際，朝比奈先生が地衣のラテン語記載の原文に熟知しているのに驚き，当時植物分類学者の中にもラテン語の文法を知らない人が多かったので，分類学者や薬学者のために，清水先生は昭和６年に朝比奈教授と共著で『植物，薬物，学名典範』を刊行し，また，昭和10年には牧野富太郎先生と共著で『植物学名辞典』を著わしている．以上，清水藤太郎先生が漢方や漢薬について東洋医学会，生薬学会，業界などに及ぼした業績を偲び，その偉業を称える次第である．

薬剤学担当教員の会議における広貫堂見学の際の憩いの一刻

薬　史　学　雑　誌
21(1),　9～15　(1986)

調剤学と清水藤太郎先生

堀岡　正義*1, 金枝　正巳*1

Contribution of Prof. Tōtarō SHIMIZU on dispensing pharmacy

Masayoshi HORIOKA*1 and Masami KANAEDA*1

1. はじめに

清水藤太郎先生は，調剤に関する図書として『調剤学概論』など4書を著作されている．本稿では，これら4書について紹介すると共に，昭和初期の調剤学事情および調剤概念の変遷についてもふれる．

2. 昭和初期の調剤学事情

清水先生は，明治45年（1912）2月に横浜において義父の清水栄助氏から引継ぎ第3代目として平安堂薬局を経営した．経営の傍ら調剤学，薬局方，ラテン語などを研究し，大正14年（1925）に『神奈川薬方』，昭和元年（1926）に『医薬処方語羅和和羅辞典』（朝比奈泰彦共著），昭和7年（1932）に『薬局方概論』を発行した[1]．

一方，昭和4年（1929）には神奈川県薬剤師会会長，帝国女子医学薬学専門学校教授に就任するなど社会的にも広く活躍した[2]．

ところで，明治以来，調剤学に関する著書は少なく勝山忠雄訳補：調剤要術（明治11年・1878・Hermann HAGER 原著），小林九一：調剤術講本（明治25年・1892）があるだけで，後者の『調剤術講本』は昭和初期においても薬学教育の教科書として使用されていた．

昭和4年(1929)，東大の慶松勝左衛門教授は，薬局学の樹立を提唱し，つぎのごとく薬剤師を激励した[3]．

『薬学者，薬剤師は従来，薬学最終の目的は調剤にあり，薬剤師の真の職業は調剤にあり，と調剤の重要性を説きながら，調剤術講本の如き書籍を以て甘んじているか．

調剤を行うに当たって，その技術は勿論必要であるが，その道程に達するまでに薬品の試験鑑定，成分の抽出法，保存法，整形学などを研究し，学理と実験を経るのは当然のことで，この総てを包含する一大学科が調剤学でなければならない．

調剤学の意味を新たにし革命的精神を吹きこむため斬新な命名として大調剤学，薬剤学などが考えられるが薬局学なる名称が最もふさわしい．

薬局学とは薬局において薬剤師が行うべき必須技術の理論および実際を組織的に構成したものであってほしい．』

慶松教授の提言は，当時の薬剤師とくに病院薬局の指導者に大きな感銘を与え，その後調剤に関する図書の出版が相次いだ．その主なものとしては，立入保太郎：ラップ新調剤学（昭和4年・1929），新津徳太郎：調剤術新粋（昭和6年・1931），横田敬三・実際調剤学（昭和7年・1932），杉井善雄・西大路隆憲：薬品配伍禁忌（昭和7年・1932），三吉豊久：薬局学摘要（昭和10年・1935），真保紀一：調剤学（上，下）(昭和13年・1938，14年・1939)，宮前武雄：調剤学要訣（昭和14年・1939）などがある．

*1 九州大学病院薬剤部 *Department of Pharmacy, Kyushu University Hospital.* Maidashi 3-1-1, Higashi-ku, Fukuoka 812.

清水先生も，この慶松提言に大きな刺戟を受け『調剤学概論』を昭和13年（1938）に科学書院より発行した．

一方，日本薬学会は，昭和4年（1929）に創立50年記念事業として『日本準薬局方』の編集発行を行うことを決め薬剤部長会に委嘱した．清水先生は『日本準薬局方』編集の主査委員として活躍した．本書は昭和5年（1930）に発行し，さらに8年（1933）同書改訂版の発行に際しても編集の中心として活躍した．

『薬局学』の編集は，昭和4年（1929）4月に第1回の委員会が開催され原案が作成された．先生は『薬局学』の編集委員にも任命され[4]，原稿のとりまとめに当たられていたが，同書は昭和7年に発行が中止された．中止の理由として，委員の構成メンバーが委員長を始めほとんどの人が両方を兼ねていたために『日本準薬局方』と薬局学原案の内容が類似していたことが考えられる．

『日本準薬局方』第一版

凡　例
一般試験法及試験用器具
第一部　薬　品
第二部　處方及製剤
第三部　消　毒　薬
第四部　繃帯材料
第五部　急性中毒解毒剤
第六部　試　薬
　試験用試薬
　診断用試薬

委員長　磯野　周平
委　員　有賀　孝治・稲生　豊作・大島　春海
　刈米　達夫・今野　運治・清水藤太郎
　杉井　善雄・田口　文太・濱田　吉三
　細井　美水・横田　敬三
主査委員　刈米　達夫・今野　運治・清水藤太郎
　杉井　善夫・濱田　吉三・横田　敬三

「薬局學原案」

第1章　薬局沿革・薬制・薬局設備
第2章　理學的試験法・化學的試験法
　生物學的試験法
第3章　製薬・製剤・調剤
第4章　飲食物・衛生材料・香粧品
第5章　處方・試薬・各種表

委員長　磯野　周平
委　員　緒方　章・高木　誠司・畑　忠三
　杉井　善雄・清水藤太郎・有賀　孝治
　細井　美水・今野　運治・稲生　豊作
　濱田　吉三・秋谷　七郎・横田　敬三
＊ ――― は両書の委員の兼任者．

なお，薬剤部長会では，昭和9年（1934）に『調剤学』の報文誌である『薬剤部長会年報』を刊行した．昭和10年（1935）からは調剤技術統一のための基準作成を手がけ，戦中，戦後の約20年間に亘り検討を重ね，昭和30年（1955）6月に調剤指針を完成している．

3.　清水藤太郎先生の調剤に関する図書

1）『調剤学概論』（昭和13年・1938）科学書院

昭和11年（1936）に脱稿し，2カ年間の推稿を経て昭和13年（1938）11月に発行した．序に「本書は，調剤学の総論にして，主として処方箋，薬剤調製，交付の治療上における意義，当事者の規範を示したものであり，斯の如き概括的記述は方剤各論と相俟って調剤学の一大部門をなし而して時代の慣習と国の法令は常に関連し，事の推理のみにては之を論断することは出来ない」とあり，調剤は実験，実例が大切であり，また関係法規との直接，間接的な関連づけが必要であると説き，随所に実例，法令および注釈を示しており，これが大きな説得力となっている．

本書は，緒論，処方箋，薬局，薬品，配合禁忌概論，薬価計算，調剤規定，調剤学と社会の8章，108頁からなっており，先生の調剤に対するフィロソフィーが全篇に満ちている．とくに調剤規定の章の調剤予備の項は素晴らしいものがある．処方を受けた時の姿勢，患者からの質問に対する応じ方，処方箋内容に疑義あるときの照会方法など調剤に臨む薬剤師の心構えと規範が示されている．

調劑豫備

1. 處方箋ヲ受ケタルトキハ患者ニ一禮シ，處方ヲ一回通読シ，其裏ヲ見，次ニ椅子ヲ進メ豫定ノ所要時間ヲ告ゲ直チニ調劑室ニ入ル，番號札アレバ此際交附シ其番號ヲ處方箋ニ記入シ置ク，患者ノ面前ニテ處方ヲ読ム際，處方ニ疑點，不明ノ個所アリトモ首ヲ傾ケ其他患者ニ些少タリトモ不安ヲ與フルガ如キ行爲ヲシテハナラヌ．

2. 患者ノ質問ニハ丁寧ニ答ヘル，此際薬品ノ名稱，性質，病名，効果等ヲ語ルハ處方医ノ信用ニ係ルコトガアルカラ注意ヲ要スル，又其内容ニツキ批評ヲシテハナラヌ，若シ強テ質問ヲ受ケタルトキハ「其内容ヲ話サナイノガ處方者ヘノ禮デアル」旨ヲ述ベテ之ヲ拒絶スル，醫師ハ治療上薬劑師ノ共同作業者デアルカラ互ニ尊敬スルヲ要スル．

3. 處方箋ハ二回之ヲ精読シ十分會得シタル後調劑ニ着手スル，而シテ初メハ個々ノ薬物ニ注意シ次ニ全體ヲ通覧スル，精読ニ當リ次ノ點ニ注意ヲ要ス．

a．用量ハ適當ナリヤ，普通薬ニテモ過量ナキヤ．

b．極量超過ナキヤ，極量超過ナルトキハ規定ノ注意標！印アリヤ．

c．溶解ニ異常ナキヤ，配合禁忌ナキヤ．

d．毒劇薬ヲ含ムトキハ醫師名アリヤ否ヤ．

此際薬品分量ガ二日分記載ヲ一日分ト誤認スルコトアルカラ注意ヲ要スル．

4. 處方箋ニ疑義アルトキハヨク研究シテ局主又ハ上席者ニ告ゲテ其指揮ヲ仰ギ，ナキトキハ同僚ニ相談シ尚且解決シ得ザルトキハ處方醫ニ照會スル，照會ハ直接口頭電話又ハ書面ニテシ，使又ハ患者ニ依頼スルトキハ密封セル書面デシナケレバナラヌ，文言ハ例文ニテ丁寧ニ書ク，照會文ノ書キ方ニテ自己ノ眞價ヲ曝露スルコトガアル，此際疑義ノ内容ヲ患者ニ語ツテハナラヌ，只少時ノ猶豫ヲ乞フ，患者ノ宅ニ薬劑ノ配達ヲ約シ一旦患者ヲ歸宅セシムルモ一策デアル．

○薬劑師法第九條（前略）但シ處方中疑ハシキ廉アルトキハ其ノ醫師，齒科醫師又ハ獣醫ニ質シ證明ヲ得ルニ非ザレバ調劑ヲナスコトヲ得ズ．

先生は，帝国女子医学薬学専門学校において昭和10年（1935）より調剤学を担当されているが，講義のため作成のプリントが本書の著作につながったものである．

2）『清水調剤学』（昭和17年・1942）科学書院（第２版から南山堂）

『調剤学概論』に調剤各論を追加し，６篇，268 頁にまとめたものである．自序には，調剤に対する著者の考え方がくわしくのべられており「薬学における調剤軽視を戒め警鐘を与えると共に調剤の重要性を説き，新しい調剤学の理論と実際を論述している」とある．

新しく追加された調剤各論は，液体剤，固形剤の２章から構成されており，前者に水剤，注射剤，アンプル剤，点眼剤，浸出剤，乳剤の６剤形，後者に散剤，茶剤，嚢剤，丸剤，錠剤，舐剤，軟膏剤，硬膏剤，坐剤の９剤形があり，各剤形毎に一般的解説，留意事項，処方例，調製法の手順などが詳述され充実した内容のものとなっている．

同年８月20日号の日本薬報で立入保太郎（京都大学病院薬局長）は「謬られ勝ちなる調剤学をどう見るか―清水調剤学を読む―」の随想文を寄せている[5]が，この中で「清水氏は語学の天才で本書の至る処に羅，英，仏，独，和，漢の文献引用がみられる．彼は学者として調剤学を講じ，県薬の会長で薬局を経営し，処方を実際に取扱われているので，薬品を商品として又法的対象物として一々実際問題と照合し責任ある記載を行っており所説に実行力を有している」と賛辞をのべている．

本書は，戦中，戦後の十数年間，全国の薬剤師，薬学生に親しまれた参考書，教科書である．

先生の調剤学講義[6]は，力強い声と身ぶり手ぶりの懇切丁寧さで「処方箋は必ず裏も見る，二度精読してから調剤にかかる」との教訓をいただいたという教え子の想い出があるが，自信に満ちた授業風景が目に浮かぶようである．

本書に「清水」と題されたのは真保紀一氏の『調剤学』上，下があり，この書との混同をさけたものである．

戦前に発行された『調剤学概論』，『清水調剤学』の２書は RAPP, ROSENTHALER,

ESCHENBRENNER などのドイツ学者の著書を参考にしている．

3) 『薬剤学』(昭和27年・1952) 南山堂

『清水調剤学』を全面的に書き改め，製剤学を加え，さらに第6改正日本薬局方（昭和26年・1951）に関する事項を追加し，新しい時代の薬剤学の理論と実際を薬剤学総論，各論，製剤学等4編，15章，465頁にまとめたものである．

戦後の学制改革で薬学教育カリキュラムが再編成され，薬剤学が教科目として制定されたのに対応して著作したものである．当時，薬学界においては，これまでのドイツ方式が一掃されアメリカ方式となり日本薬局方も米国薬局方に準じて編集されていた時代であった．先生は，その頃アメリカで刊行されていた薬剤学関係の新しい図書

Remington's Practice of Pharmacy 10th ed. (1951)

Scoville's The Art of Compounding (1951)

W. J. HUSA: Pharmaceutical Dispensing (1951)

BRIGGS et al.: Pharmaceutical Compounding and Dispensing (1949)

などを逸早く取り寄せ『薬剤学』出版の参考にされているが，このことは，先生の優れた時代感覚と新しい学問導入への意欲を証明するものである．

4) 『薬剤学入門』(昭和30年・1955) 南山堂

本書は，薬剤学の基礎となる物理化学的理論と調剤・製剤の単位操作（粉砕，溶解，分散系，濾過，抽出，滅菌など）を論じると共に，薬剤学に必要な医薬品（分類，命名法，薬用量，貯法）と薬局方（目的，変遷，医薬品の試験と定量）を加え，3篇，254頁にまとめた薬剤学の入門書である．当時は物理薬剤学が薬剤学の主流となってきており，野上寿東大教授が昭和27年（1952）から始めた製剤学の講義プリントも参考にしている．

昭和40年（1965）に中島栄一が『新薬剤学入門』を，昭和44年(1969)に A. N. MARTIN が "Physical Pharmacy" を出版しているが，清水先生の『薬剤学入門』は，これらの図書の先駆的役割を果たしたものといえる．ここにも先生の時代を先取りしていくという慧眼が現われている．

以上，紹介した清水先生著作の四つの調剤用図書には，先生の調剤に対するひたむきな姿勢と情熱が感じられる．また調剤を通して医薬分業実現への提言が示されているのには敬服する．

5) 薬剤学教官会議

戦後，薬学教育に薬剤学が導入され，昭和26年東大に製剤学講座，京大に薬剤学講座が開講し，野上寿，掛見喜一郎の両薬局長が担当した．28年に九大（松村久吉薬局長），30

昭和32年10月29，30日に開催の全国薬大薬剤学教授会議の記念写真
（富山大学薬学部・薬業会館にて）

年に阪大（青木大薬局長）にも薬剤学講座が開設された．

新しく誕生した薬剤学の体系づけのために昭和27年から薬剤学教室を中心とする会合が屢々開かれるようになった（昭27. 11. 6, 7・28. 11. 6, 7・29. 10. 4, 5・31. 9. 20, 21）．これらの会議は東大野上教授を中心に当初は関東中心であったが，漸次全国各地から参加するようになった．

昭和32年の薬剤学教官会議[7]は，金沢大学田辺普，富山大学桜井謙之介両教授の主催のもとに富山市で開催された．会議は10月29, 30の両日行われ会議と共に学外講演会，広貫堂見学などの行事も計画された．教官会議（薬大薬剤学教授会議と改称）において清水藤太郎先生は二つの議案を提案した．

議案5　学生実習時間に校外実習を含めることの可否並びにその時期について

議案6　薬剤学教授技術について（たとえばスライド写真交換促進）

学外講演会において清水先生は「わが国製剤（家庭薬）の発達史」を講演し，聴取者は改めて先生の博識と啓蒙に心酔して大喝采をおくった．

なお，会議に際し，宇奈月温泉で懇親会を行ったが，最長老の清水先生は主賓として上席に坐し「薬大の教授としてこのような席を得たことは初の体験として永く記憶にとどめたい」と挨拶し，大変ご満悦であった．

6）　雑誌『薬局』の発刊

清水先生が関与したことで特筆すべきものに月刊雑誌『薬局 Practical Pharmacy』の発行がある．昭和24年（1949）5月に第1回薬剤師国家試験が実施され，同年9月にはアメリカ使節団の薬事勧告[8]があり，薬学教育と薬剤実務の必要性から，この雑誌の発行を思い立たれたものである．宮崎順一，不破龍登代，福澤寿，野上寿らと編集を担当し，昭和25年（1950）1月に第1号を発刊した．

発刊のことばに「日進月歩の学術界に即応して常に学会と業界の中間をいき薬局運営の指針たると同時に実益と趣味を兼ね以て斯学の発達に貢献せんものとするもの」とあり，調剤と実際薬学の向上，発展を目的に発行したことが示されている．

先生は，編集主幹として編集に従事する一方，毎号に原稿を寄せ本誌の内容充実に努力された．とくに25年（1950）3月から48年（1973）3月までの長期間に亘って執筆の「平安堂閑話」はそれぞれの時代におけるできごとが語られており，そのまま戦後薬学の歴史となっている．調剤，薬事法，薬局方，薬史学，医薬分業，薬局経営，漢方，薬学教育，薬剤師倫理，社会一般などその内容は多岐に亘っており，薬学と社会の動きを的確にとらえ話題を提供している．調剤に関しても，錠剤投与の問題，処方箋と調剤，薬剤学者の不運，茶の湯の作法と調剤の作法，調剤用器具，新製剤の変遷，エアロゾルの応用，軟膏基剤と植物油，小児薬用量，薬の耐性，調剤手数料と健康保険法など数多くの貴重な提言がみられる．

今ひとつは「欧文処方箋解読課題」である．創刊号より10年間継続して出題し解答を掲載した．全国各地より毎号に50～100名の応募があり関心を集めた．

平安堂薬局では，第3代目に当たる先生の時から処方箋調剤を始めており，教授時代に先生の助手を勤め，その後，南山堂において『薬局』誌の編集を担当した愛川治子氏によれば，先生が薬局経営を始められた頃アメリカから多くの参考書をとり寄せられた中に月刊雑誌の“Practical Druggist”（のちの American Professional Pharmacist）があり，この雑誌に処方箋解読課題があって毎号応募されていたので，このことからヒントを得て『薬局』への出題を思い立たれたとのことである[9]．したがって出題の処方は“Practical Druggist”に掲載のものが多く，横浜のヒル・ファーマシーや平安堂薬局で実際に取り扱われたものも一部含まれていると思われる．

7）　医療の社会化と薬価問題

昭和5年（1930）10月に自費出版された小冊子である．医療の社会化は　1. 国民の医療知識の向上，2. 医療の簡易化，3. 薬価の低廉，の3点を経済的に解決することにより達せら

れる，と強調し，そのためには①公定処方の発行，②医師処方の開示，③医師処方薬の商品化，④薬価徴収方法の変更などが必要である，とのべている．

常に医薬分業を唱え，思ったことをズバリという，またいえる立場にあった先生ならばこそ，このような提言ができたのであろう．

8) 清水藤太郎先生調剤訓

これまで紹介した調剤学，薬剤学および雑誌『薬局』の中から，清水先生が調剤に関してわれわれに与えたいくつかの教訓をまとめてみた．

○調剤学を学ぶは智的方面は言語にて可なるも作業は必らず実習に拠らなければならぬ，これ調剤学に於て最も実習を重んずる所以である．

○患者の面前にて処方を読む際，処方に疑点，不明の個所ありとも患者の面前にて首を傾け，其他患者に些少たりとも不安を与うるが如き行為をなすべからず．

○病院薬剤師は，よく病院の目的及び現状を熟知するを要し，薬剤に関するすべての任務，責務を有し，ただ処方箋による調剤だけの用ではない．

○薬学者は，調剤学を調剤術といい，「学」とは認めなかったので，これは後にまでもわが調剤学に影響した．

○歴史研究は往々にして老人の閑日月視する傾きがある．昔の事はむしろ老人より今日の若者に必要である．

○注射の代りに経口投与をする医師は神様である．

○副作用を恐れては有効な医薬品は使えない．要は使用法を誤らないように民衆を指導することだ．

4. 調剤の定義と概念

調剤概念の確立と定義の構築は，調剤を主とする薬剤師の職能確立に不可欠である．調剤の定義としてこれまでによく用いられてきたものに大正6年の大審院の判決がある．

「調剤トハ一定ノ処方ニ従ヒテ一種以上ノ薬品ヲ配合シ若シクハ一種ノ薬品ヲ使用シ特定ノ分量ニ従ヒ特定ノ用法ニ適合スル如ク特定人ノ特定ノ疾病ニ対スル薬剤ヲ調製スルコトヲ謂フモノトス」．

しかし，今から60数年前の判決は調剤に関する裁判の判例にはなりえても，今日の調剤の定義とするには適当でない．当然その時代にふさわしい調剤学的観点からの定義があってしかるべきである．

そこで堀岡は，今日の調剤における薬剤師の役割を考え調剤の定義と新しい概念を提起した[10]．

「調剤とは，医師，歯科医師らの処方により（医師法第22条，歯科医師法第21条），医薬品を使用して特定の患者の特定の疾病に対する薬剤を，特定の使用法に適合するように調製し，患者に交付する業務をいい，薬剤師の職能（薬剤師法第19条）により，患者に投与する薬剤の品質，有効性及び安全性を確保することをいう．

調剤の実施には，処方鑑査，薬剤調製，服薬指導の三つの要素がある．それを支えるものとして医療担当者としてのフィロソフィーと，広範な薬学の学理と技術が必要である」．

ところで，先人達は調剤の定義をつぎのごとく記している．

小林九一：調剤術とは即ち薬学の応用術にして医師の処方せんに拠り適正の薬剤を調製し，之を患者に授与するの技術を云う．

清水藤太郎：調剤術とは医師の処方せんにより薬品を用いて薬剤を調製し，これを患者に交付する業務をいう．

さきの大審院の判決では「調剤の範囲に外見的な行為しか含まれていない」という誤解を与えかねない．

これに対して，小林氏は，患者に授与する技術，清水先生は，患者に交付する業務であると示し，調剤の定義の中に薬剤師の専門性と服薬指導業務を表現している．実に流石というべきである．

5. おわりに

「調剤学と清水藤太郎先生」というテーマで，清水先生の調剤に関する著作を中心に記

した.

「名医」に対応して，学問と技術と仁徳を兼ね備えた薬剤師を名薬剤師と呼ぶならば，それは清水藤太郎先生を措いて他にない.

参考文献および注

1) 根本曽代子：清水藤太郎博士の卓絶せる著作活動，薬局，**28**(9)，31 (1977).
2) 清水藤太郎：私のあゆんだ道，日本薬剤師協会雑誌，**12**(7)，32 (1960).
3) 松蔭学人：薬局学の編成を論ず，日本薬報，1929年4月5日.
4) 薬学雑誌，**49**(4)，414 (1929).
5) 立入保太郎：謬られ勝ちなる調剤学をどう見るか—清水調剤学を読む—，日本薬報，1942年8月20日.
6) 藤太郎追想録，1977年3月1日.
7) 桜井謙之介（元富山大学薬学部教授）氏の資料による.
8) アメリカ薬剤師協会使節団報告書：薬剤部長会年報，**9**，186 (1950)〔日薬誌，**30**(12)，1235 (1978)〕.
9) 愛川治子（元東邦薬科大学助手）氏私信，1986年2月27日.
10) 堀岡正義：調剤の新しい概念，ファルマシア，**17**(11)，1088 (1981).

Summary

Prof. Tōtarō Shimizu has written four books on dispensing pharmacy.

We introduced these books, and investigated the situation of dispensing pharmacy early in the Showa Era and the change of the conception of dispensing pharmacy.

薬　史　学　雑　誌
21(1),　16～18　(1986)

日本薬局方と清水先生

江　本　龍　雄*1

Japanese Pharmacopoeia and Dr. SHIMIZU

Tatsuo EMOTO*1

本年は，はからずも日本薬局方公布100年の記念すべき年に当たります．

日本薬局方について申し述べる上で，欠かせない人につぎの方々がいます．

(1) 明治8～24年（1875～1891）
　長与専斎時代
　　A. J. C. GEERTS（1843～1883）
　　J. F. EIJKMAN（1851～1915）
(2) 明治39～大正9年（1906～1921）
　長井長義時代
　　池口　慶三（1867～1933）
(3) 昭和7～20年（1932～1945）
　慶松勝左衛門時代
　　今野　運治（1891～1946）
　　刈米　達夫（1893～1977）
(4) 昭和21～36年（1946～1961）
　緒方　章時代
　　清水藤太郎（1886～1976）
　　福地言一郎（1911～1967）
　　畑　　忠三（1888～1961）
　　掛見喜一郎（1908～1971）

上記の諸先生は，世間によくあるお座なりの名義貸しではなく，実際に薬局方の草案を作成し，その時代の薬局方の指針を確立し大きな牽引力となって貢献された方ばかりです．

私は，これらの先生方のうち慶松，刈米，今野，緒方，清水，畑，福地，掛見の諸先生に仕え，それぞれのお人柄に直接に接する機会を持つことができました．これは私の人生にとって幸運であり，大きな影響を受けました．特に清水先生には公私にわたりご指導を賜わり，横浜の神奈川県薬剤師会館，馬車道のお宅には幾度も足を運んだものです．

清水先生は明治19年（1886）の生まれで，日本薬局方の制定と同年ということもあってか，特に薬局方には造詣が深い方でした．先生の蔵書には薬局方に関連するものが数多く見受けられ，蘭学時代のオランダ薬局方，その翻訳書をはじめ各国薬局方，日本薬局方および註釈書などの収集があり，このほか薬局方に関する著書も多数あります．

私は5局時代の後半から約20年間，厚生省にて薬局方関係の業務に従事していましたが，在職中の昭和21年頃からお亡くなりになるまで先生との交流がつづきました．

チャールズ・ハーバート・ラウォール（Charles Herbert LA WALL）著の『世界薬学史』の序文の最初には「薬学は，これを業とする人の理念，技量，教養の如何によって，専門の職務に対する誇りと権威を保つことができるか，最低の商人根性に堕するかの何れかである」とありますが清水先生こそ前者実践の最適の見本のような方でした．さる方が清水先生に「薬学に対する懐疑について」質問されたとき，先生は「今迄に一度も感じたことも考えたこともない．その様なことを考えるひまがあれば一つでも多くの知識を充足

*1 日本公定書協会

することにつとめたい.」と申されています. また先生の信条は「ものを主張することはしない. 孫子の“待つあるをたのめ”であり, 話をしても相手が理解しなければ, “ああこの人は理解する資格のない人だ”とあきらめる.」と言っておられます.

明治40年4月9日に薬律の改正があり横浜の神奈川県庁も湯浅武孫技師の下に薬品巡視官, 衛生技術員を増員することになり, 選ばれて先生は神奈川県の技手となりました. その後先生は明治44年に結婚し平安堂を経営されるかたわら勉励し, 昭和4年4月には当時宮内庁にあった細井美水薬学士（田口文太, 衣笠豊氏と同期; 東大明治40年卒）の推挙により大森にあった帝国女子医学薬学専門学校薬学科（塚本赴夫科長）の教授として教鞭をとることになりました. 講義は薬学ラテン語をはじめとし薬学英語, 薬局方, 調剤学, 薬局経営, 漢方, 生薬学, 薬学史など幅広い面にわたったとのことです.

先生が公的に薬局方に関与されたのは, 第二次世界大戦後の混乱の時代でした. 当時, 日本薬局方調査会長であられた慶松先生は, いちはやく日本薬局方の将来に思いをいたし, まず日本薬局方を従来のドイツ, スイス系の思想から脱却し, 英米系に切り換える方針を打ち出し, 自主的に調査を開始したのであります. ついで日本薬局方調査会委員についても今までの官僚主義を改め, 広く民間からも人材を集めて新風をとり入れ民主的運営の途をひらいたのであります. その手始めとして昭和21年6月8日, 酒井威, 福地言一郎氏らと共に清水先生も日本薬局方調査会幹事に任命され, 23年7月には臨時委員となられ, 同年10月の薬事法の新たな公布によって, 日本薬局方調査会が廃止され, 代わって薬事委員会（現中央薬事審議会）が設立され, その時点で先生は同委員会委員となり, 7局の完成した昭和36年まで委員を続けられ, 8局では調査員として関係しておられました.

先生の薬局方関係の著書は昭和7年9月, 日本薬報社より『薬局方概論』を講義用に出版されたのを手始めに, 主なものを示しますとつぎの通りです.

昭和17年(1942) 校訂 第五改正日本薬局方（南山堂）
〃 24年(1949) 注解 第五改正日本薬局方（南山堂）
〃 26年(1951) 注解 第六改正日本薬局方（共著）（南山堂）
〃 26年(1951) 第六改正日本薬局方要覧（南山堂）
〃 31年(1956) 公定医薬品便覧(南山堂)
〃 37年(1962) 日本薬局方ハンドブック（7局）（南山堂）
〃 41年(1966) 初版日本薬局方（廣川書店）
〃 42年(1967) 日本薬局方便覧（共著）（南山堂）
〃 44年(1969) 日本薬局方ハンドブック（7局）（共著）（南山堂）
〃 48年(1973) 日本薬局方ハンドブック（8局）（共著）（南山堂）

その他

(1) 薬名に及ぼした外国語の影響(1), (2), 薬局, **9**(9, 10), 昭33 (1958)
(2) 局方に使われているラテン名の読み方, 薬局, **12**(6), 昭36 (1961)
(3) 日本薬局方史 (1), (2), 薬局, **12** (6, 7), 昭36 (1961)

清水先生が日本薬局方に大きく貢献されたのは6局制定の時であります. 先生は総括部会長として全体を統括され, 特に通則, ラテン名, 製剤総則の制定には心魂を傾けられました. 当時は当用漢字表による漢字の制限に加えて化学用語の統一の問題が浮上し, 用語が混乱をきわめておりました. また草案審議の初期は先生の手持の USPXII (1942) を中心にアメリカ薬局方との手掛かりを求め, まず通則の条文から取り組んだのであります. 食糧も暖房も用紙もない時代でヤミ物資を探して食糧持参の上で箱根, 伊豆などに合宿し早朝から深夜まで原案の作成に取り組みました. 先生はご老齢にもかかわらず率先して精力的に指導に当たられていました.

つぎに昭和30年3月公布の「第二改正国民

医薬品集」（現在日局第二部）中に漢方剤4処方を採り入れたことがあげられます．これは当時相当な抵抗がありましたが先生の熱心な説得によって公定書に漢方剤採用の道を拓いた訳であります．この4処方は9局まで収載されましたが，以後は日本薬局方外の「薬局製剤」の方へ移行し，現在は185処方が公になっています．

昭和11年（1936）4月日本薬局方公布五十年記念祝賀会に当たり，『日本薬局方五十年史』を刊行しましたが，この執筆編集は先生がほとんどを担当されたと聞いています．

また昭和36年11月（1961）の日本薬局方七十五年記念式典に際して出版した『日本薬局方七十五年史』にも起草委員になっておられ，式典には永年薬局方に尽された功績により近藤平三郎，朝比奈泰彦，緒方章，刈米達夫の各氏とともに記念式典委員長から表彰を受け，表彰者を代表して清水先生が記念講演を行いました．

つぎに薬局方に関連しまして，昭和5年（1930）日本薬学会は創立五十年に当たり，記念事業として「日本準薬局方」の制定を企画し，昭和4年1月より編集に着手しました．先生は主査委員として参画し非常に貢献され，昭和5年6月に刊行されました．本書の目的は「日本薬局方に随伴して之を補佐して薬学及び医学の急速な発達に順応し，徒に理論に偏さず実用を本旨とし以て医薬の進歩に資せんとするにあり」と述べており，以前のアメリカの National Formulary 的な役割を持つものでした．引続き薬学会は昭和8年4月に「第二改正日本準薬局方」を刊行しましたが，これに漢方処方246方を採用しております．この漢方の基準処方の制定は清水先生が最も活躍されたところであります．本書は16年2月に「第三改正版」を，19年4月に「第三改正増補版」を刊行しましたが，これを最後に現在は廃刊になっております．

昭和16年（1941）当時，満洲国において編集した『満洲国漢薬典』[*2]には香山満寿雄，岡西為人，木村康一，竹内虎夫，山下泰蔵氏と共に参画され，昭和18年（1943）ガリ版刷にて発行されました．この原本を元にして終戦後の昭和24年に，清水先生の手でこれを刊行されました．

そのほか，大正14年（1925）には神奈川県薬剤師会の会員のために『神奈川薬方』を作成して配布されました．

また，先生は人情にも厚く，日本薬局方の制定に貢献したオランダ人ゲールツを敬慕し業績を研究発表されるとともに横浜山手の外人墓地に眠る彼の墓所を晩年まで手厚く供養され，命日には献花清掃を続けられました．現在は神奈川県薬剤師会の手に受け継がれ，特に昭和58年（1983）8月30日は歿後百年に当たるため盛大な供養が同薬剤師会主催で挙行されました．また昭和49年5月18日，国立衛生試験所創立百年記念式典に当たり，記念事業として谷中天王寺の境内にあったゲールツ顕彰碑（長与専斎らによって明治24年8月30日建立）を用賀の衛生試験所構内に移設し，除幕式が常陸宮臨席の下に清水先生と長与華子嬢（長与専斎の玄孫）によってとり行われました．ゲールツは日本薬局方の生みの親で，初版日本薬局方の草案を作成中，明治16年（1883）8月30日僅か40歳で病にたおれ，妻と6人幼女を残したまま日本薬局方の制定の日を待たずにこの世を去ったのであります．明治初期に来日し，わが国の薬学，理化学の発展に生涯を捧げ大きな功績を残し異国の地に眠るこの偉大な恩人にひそかに，たゆまず捧げた先生の至誠と温情には頭の下がるものがあります．

最後に，先生から署名入りで頂いた名著『植物薬物学名典範』，『本草辞典』の2冊は今もなお私の書架に輝いておることを報告申し上げ終りとします．

*2 昭和13年（1938）以来計画．

薬　史　学　雑　誌
21(1),　19～20　(1986)

くすり博物館と清水藤太郎先生

青　木　允　夫*1

Museum of Pharmaceutical Science and Dr. T. Shimizu

Nobuo Aoki*1

昭和44年内藤記念科学振興財団の内藤豊次理事長（エーザイ会長）は，薬学薬業に関する博物館設立の構想を抱き，日本薬史学会会長の清水藤太郎先生にご相談した．清水先生は大いに賛同され，日本薬史学会の木村雄四郎先生，吉井千代田先生とともに企画委員として博物館の創立にご尽力してくださった．

昭和44年8月19日の第1回の会合以来，毎月の委員会に先生はご出席され，貴重なご意見を述べられた．先生がたの献身的なご努力によって，昭和46年6月12日わが国最初の綜合的な「くすり博物館」が岐阜県羽島郡川島町のエーザイ川島工園の中に誕生した．清水先生は，アメリカ薬史学会代表のハマネーさん(国立歴史技術博物館医薬部門長)，内藤理事長らと共に開館のテープカットをされた．

清水先生は，開館を記念し先生の積年の蔵書である平安堂文庫，約6千冊を当館に寄贈してくださった．

平安堂文庫は主として薬学史，医学史，薬制，薬局経営，調剤学，生薬，和漢薬，漢方医学，化学，処方集，新薬，植物，各国薬局方，家庭薬，語学辞典など多岐にわたっている．業界紙，学術雑誌など創刊号より揃っているものも少なくない（平安堂文庫の主な図書をスライドで紹介した）．

平安堂文庫の中には大変貴重な図書がいくつかあるが，先生は特に次の2冊を挙げておられた．その一つは『日本薬局方』初版のラテン語版である．製本し直したものはあるが，もとのままの完装本は，平安堂文庫以外は知られていないようである．もう1冊はレメリーの『薬物事典』である．1756年のフランス語版である．この本は清水先生の依頼で藤田直市先生がドイツ？で探して手に入れたものです．

明治11年に創刊された『東京薬学新誌』は第7号で廃刊となったが，その雑誌に須田勝三郎先生の手紙が添付されている．昭和9年8月24日付で「(前略) 極めて幼稚のものなれとも，歴史的には極めて面白きものにて今は下山，丹波，丹羽の三元老の遺族の御宅にも多分無かるべく，或は日本薬学会の書庫にも無きかと存候．老生所持のものも老生が死ねば勿ち古新聞と共に紙屑屋に渉り可申候．就ては友人中の好事家に贈度存候処，貴君以外には悦で受ける人は無さそうに存候，依て右東京薬学新誌御贈申上候に付きて保存被下候へば幸甚に候」とある．古書を大事にする先生の面影が偲ばれる．

先生の著述は数多くあるが，昭和50年内藤記念科学振興財団の刊行助成によって刊行さ

*1 内藤記念くすり博物館

れたものに『和漢薬索引』がある．102 に及ぶ古今の本草書，生薬書に出ている薬名を整理し原典の所在頁を示したもので，高く評価されている．

ところで，これと対をなす『洋薬索引』も清水先生によって作成されていた．稿が完成し浜松？の印刷所に出したが，不幸にも空襲で焼失してしまったという．昭和46年のある日，先生はわずかに残されていた下書のノート3冊を私に示され，くすり博物館で，こういうものを作ったらどうかと，お話された．洋薬であるから語原のラテン語，英独仏蘭語など博識の先生ならではの調査ノートで，とても私どもの手に負えるものではなかった．しかし横文字の併記は断念し，『和漢薬索引』と同じような体裁のものを作成し，先生の志を継ぐべく約40冊の原典に当たってカードを作成する作業に入った．先生の生誕百年の今春，その作業も終了し稿が出来上った．一方これをコンピューターに入力する作業に入っている．いずれ『和漢薬索引』と対をなすこの『洋薬索引』を刊行したいと考えている．

清水先生からくすり博物館に寄贈された図書・平安堂文庫のほかに先生が作成された薬史学関係の写真ネガ，スライド類が数百枚もある．

さらに 200 余種の生薬のファイルがある．個々の生薬ごとに，関連の写真，別刷，新聞記事などが収められている．

これら膨大な平安堂文庫の寄贈を受けたが当初先生はお孫さんの良夫さんと共に再三岐阜の当館までお出でになり整理に当たってくださった．ズボンをはきかえ，足袋姿で昼食の時以外は休憩されず御教示いただいた．先生の図書に対する愛着を私たち館員が心に深く植えつけられたものである．

平安堂文庫をご利用される研究者も多く，エーザイ川島工園内にある宿泊施設（木曽川寮）に泊り込みの方も少なくない．一人でも多くの人にご利用いただくことが先生への報恩であると思っている．

付　記

学会終了後，良夫さん運転の車に，先生のご子息不二夫さんと共に千葉から横浜まで同乗させていただいた．約1時間半の道中，先生の想い出話に花を咲かせ，大変有意義な一日であった．

薬　史　学　雑　誌
21(1),　21～27　(1986)

日本の本草学者は広東人参をどう見ていたか

浅　野　正　義*1

How did Japanese herbalists think about "Canton Ginseng"?

Masayoshi ASANO*1

広東人参がわが国に入ってきたのは小野蘭山著『本草綱目啓蒙』[1]によれば「寛延の初め」とあり，寛延は1748年から1751年までであるから1748年か1749年であると想像される．勿論，初めは唐人貿易の一商品として，次いでオランダ人もこれに加わった．従来からの中国原産の薬品と違い1748年頃から新しく輸入されてきたものであるだけに広東人参に対する見解は混乱していた．

内容の充実さで定評のある内藤蕉園の『古方薬品考』人参の項，広東人参の内で，芍薬様と並んで同亜布利加様と図が出ていてアメリカをアフリカと誤記されている等その一例である．

今村鞆氏の『人参史』[2]によれば「1716年ケベックの宣教師 Father LAFITA は英領カナダ・モントリオールの森林中で後にアメリカ人参と命名された植物を発見している．その動機はロンドン王立学会報の人参の記事の写本を1714年に読んでこの植物はカナダの森林中に自生していることを予想し2年間捜し続けて発見したものである」旨出ている．

次いで1718年[3]カナダから中国向けに輸出されていてこれ以後中国に「西洋人参」の名で拡まった模様である．

本草書では中国の呉儀洛の『本草従新』[4]には「西洋人参」という名称で載っていて，「苦寒　微甘味厚気薄（中略）出大西洋佛蘭西」云々と，次いで，逍学敏の『本草綱目拾遺』[5]には同じく西洋人参の名称のもとに「出大西洋佛蘭西，形似遼東糙米参，煎之不香，其気甚薄」云々と出ている．中国書籍の記載の一字一句を金科玉条として疑わない徳川時代の学者はこの両書の記載に禍されて小原峒山の『広東人参弁』が世に出るまでそれの基原産地を正確に知ることができなかった．

以下それらについて述べて見る．わが国に入ってきて急速に医師も実際の治療に使い薬舗でも広く販売してそれらの取扱者は基原等は別として広東人参なるものの実態はよく知っていた模様である．

書物に現われてきたのは『広参品』[6]である．「近世広東ヨリ渡ル参　薬舗広東人参ト稱シ又芍薬手ト稱ス　土ヲ帯ビ乾ス者カ皮色黯黒芍薬根ニ似ル　味甘ニ過テ殊ニ気味無ク劣ル（以下省略）．」皮部外面が淡色の *P. ginseng* C. A. MEYER しか見たことのないわれわれの祖先は奇異に感じたのは当然で，皮部の色が土の色に染って黯黒色であるというのはその当時からアメリカ人参の色彩の特徴をよく表現している．松岡玄達はこれをムカゴ人参としているが，小野蘭山は『本草綱目紀文』[7]でも『本草綱目啓蒙』[8]でもこれを否定している．なお広参品の内で熊谷は広東人参を十全大補湯に加えて使用し実際に効果があり，朝鮮人参より安価であることを述べている．

次に『本草綱目紀文』[7]では「広東人参ト云ウアリ　先年多クワタリタリ　芍薬手ノ人参

*1 日本薬史学会

ト云ウ　近年マタワタリタルニ用フル人アリコレニモ丸キタマ人参又人形手等アリ　味甘キバカリニシテ苦ミナシ　コレハ沙参ノ根ニテ製セシモノ也（中略）近来ワタリタル広東新語ヲミルニ広東ハ越ノ国ニテ熱国雷洲トテ常ニ雷鳴スル処モアリ　人参ハ寒国ニ生スル故朝鮮ヲ上品トス　尤モ越ノ国ニ人参ナシトモアレドモ多クワタルハ偽物ナルコト明ラカ也　今ワタル広東人参ヲミルニ香ノモノ手ノ沙参ニヨク似タリ」と記してある．「香ノモノ手ノ沙参」とは意味不明であるが，沙参に似ているというのは外形だけで沙参は組織に巨大な間隙が多く占め，したがって軽く至って脆いのに反し，朝鮮・アメリカ人参共にその組織は充実し重質である．

次いでその後出した彼の大著『本草綱目啓蒙』[9]には「広東人参ハ寛延ノ初　唐山ヨリ渡ル　舶来ノ芍薬ニ似タリ　故ニ芍薬手ト名ヅク　略シテ勺参トモ云ウ　根形肥大ニシテ横絞多クシテ沙参根ニ似タリ　又人形ナル者円根[10]ナルモノアリ　灰黄色切レバ肉白色或ハ黄色或ハ赤黒色滋潤ナク味微甘或ハ苦或ハ蔥ヲ帯ルモノアリ（中略）広東ニ人参ノ自生ナク広東人参ハ真ノ人参ニ非ルコト知ルベシ」と記し別に西洋人参の項を設け「西洋人参本草従新ニ云フ　西洋人参苦寒微甘　大西洋佛蘭西ニ出ズ　之ヲ煎ジテ香シカラズ　其気甚ダ薄シ（中略）今清商ハ広東人参ヲ指シテ洋参ト云フ　沈敬胆　程赤城[11]モ従新ノ西洋人参ヲ広東人参ト同種　医師薬舗皆西洋人参洋参ト号ス　モト西洋人年年広東ノ地ニ帯シ各処ニ貿易分售スルニ依ルト云ウ時ハ正ニ大西洋佛蘭西ニ出ズノ文ニ合ス　而シテ享和壬戌[12]蛮人将来ノ珍禽類纂ニ載スル北亜墨利加ノ加拿太（地名）人参ノ彩画ヲ見レバソノ根肥大ナラズ多節ノ芦頭モ無クシテ広東人参ニ非ズ又実ノ形ヲ見レバ遼参ニモ非ズ根ト実トハ全ク是土参ノ形状ナリ　又従新ニ西洋人参苦寒微甘ト云ウ　文房肆考ニ西洋人参之ヲ煎ジテ香シカラズ之ヲ啜ウテ苦多ト云ウモノモ皆土参ノ味ニ符シテ広東人参ノ甘ニシテ微苦ナルニ合ワズ」と．野生のアメリカ人参の根の多型性は広東人参を数多く見ていれば，朝鮮人参と違って雑多な形があるのをおのずと理解できないのは蘭山ほどの学者として沙参に似ていると言うのと同様迂濶の誹を免れない．

その後蘭山は最晩年に広東人参について集大成して『広参説』[13]を著わしている．該博な中国の文献を引いて「三七」であることを強調している．ここでは中国の詩文は省略した．最初[14]の１丁には広東人参がよく効くことと中国の商人によって陸続として輸入されていることを述べている．程赤城等の言葉を引き広東人参の名称は中国では通用しない称呼であり「此ノ宗原[15]ハ西洋人年年広東ノ地ニ帯至シ各処ニ貿易分售スルニ係ル」と明白に中国人から言われているにもかかわらず蘭山，大槻盤水（玄沢）等にこの重要な言葉が信用されなかった．その最大な理由の一つは「サキニ清賈病篤ニ及ビ参ヲ官[16]ニ乞ウ者有リ，之ヲ詰ツテ曰ク汝ナンゾ帯来ル所ノ洋参ヲ用イザル，其人密ニ曰ク洋参ハ即チ我地ノ三七ナリ　真参ニ非ズト雖モ貴邦以ツテ参トナシテ用ユ　故ニ多ク帯テ貨物トナスノミ　其事発覚シ官厳禁[17]ヲタモツ」云々と．このことが広東人参は人参に非ずとの考え方に長期間影響を与えるに至った．その後輸入が許可され輸入量がふえるに従い蘭山もその産出量がおびただしいのに疑問を持ち始めている．すなわち「数十年来[18]帯至ルノ広参其員（数）幾巨万　勝[19]ク計ウベカラズ　愚嘗ツテ疑ウ是必ズ其地所蕃殖ノ草根決シテ遠境深谷ノ物ニ非ズ」と．その産出量から考え輸送の困難な深山幽谷にわずかにしか生えている物ではないことに気がついているものの，北アメリカ五大湖の周辺からカナダ国境にかけての厖大な産出量は当時として知るよしもなかった．さらに「清[20]賈は皆閩人也　故ニ其地蕃殖ノ草根ヲ採リ帯ビテ我邦ニ至ル　其名ヲ庾シテ西洋人参或ハ洋参ト言ウ（中略）又寛政[21]丁巳蛮船将来ノ広参偽ツテ亜墨利加参ト称ス」と，前に前いたように『啓蒙』巻之８享和壬戌蛮人将来ノ珍禽類纂所載の北亜墨利加加拿太人参の彩画をすでに見ているので，いくら鎖国下とはいえ産地国北アメリカの名称だけでも分かりつつあったのでもっと詮索

し，この問題が進展して行ってもよいと考えられる．

次に出てくる条はさすがに蘭山らしく，広東人参の不定根の発生について注目している．すなわち「凡ソ[22]人参皆茎下芦アリ其ノ年ヲ経テ最モ深キ者ハ一茎下数根ヲ分綴ス　其芦各長クシテ節無シ　広参ノ若キハ則単根ナリ」と．これは *P. ginseng* は10年近く生長すると地下茎から数箇の不定根を出すのに *P. quinquefolium* のほうは出さないという蘭山の意見である．手許にある数種のアメリカ人参の10年以上を経たものの写真・写生図[23]を調べたところ，不定根を出しているものとそうでないものは半々で判定し難かった．この点実際に自生地に度々採集に行かれた斉藤洋先生に直接質したところ大部分は同様に不定根をつけている由であった．要するに中国・朝鮮産は当時では貴重品で丁寧に掘り取るためであり，北アメリカ，カナダ産は能率的に採るので軟弱な根茎が切れ不定根が着いてないためである．

巻末には「余向ニ広参自ラ是真ニ山[24]漆之詠有リ　世人之ヲ聞キ信従スル者多カラズ　疑嘲スル者殊ニ多シ　故ニ従来ノ見聞スル所ヲ鳩疏シ広参説ヲナシ将ニ世嘲ヲ解セントス」とし「時ニ文化庚[25]午之上元，八十有二叟　蘭山　東部医学後舎ニ於テ書ス」と結んでいる．

この時代すでに実際に使っていた医師や取り扱っていた薬舗の人々が広東人参即アメリカ人参と承知しているのに対しそれを俗説として却けているのは幕府に対する遠慮があったかどうか今後の究明に譲りたいと思う．

同じ時代に大槻盤水が『広参存疑』[26]を書き広東人参について論じている．

さて内容は「寛延ノ初清商舶来スル所ノ一薬品俗ニ呼デ広東人参ト云モノアリ医其名ニ依テ人参ノ用ニ充テ通治ノ薬トス　尤モ能ク血分ニ入リ血虚ノ症殊ニ功アリトイフ或ハ謂フ此物参類ニ非ズ広東三七根也ト　其証ハ往年長崎唐山館ニテ在留ノ清客篤疾ニ罹リ人参ヲ官衛ニ請ヒ奉リシニ官コレニ答フルニ汝等毎船将来スル所ノ広東数斤ヲ貯フベシ何ゾ別ニ此ヲ乞フコトヲナスヤト　彼者等云フ　此レ人参ニ非ズ　我邦産ノ三七根ナリ　貴邦ノ人敢テ此ヲ人参トナスト言ショシ」と，この説を信ずることによって蘭山同様誤った先入観を抱かされ後々に至るまで広東人参を正しく見ることができなかった．

又享保中[27]6年辛丑6月渡来せる清医陳振先の採薬録を引き「此物必ズ広産ニハアラズト云フモノモアリ　コレ皆広東ノ名ニ由テ疑ヲ生ズル諸説ト見ヘタリ　予等固ヨリ其是非ヲ弁ゼズ」と．さらに「時[28]ニ寛政9年丁巳阿蘭陀商舶亜墨利加盎泄(ソセム)索模ト云フモノヲ持渡レリ　此ヲ長崎ノ監薬司等監定スルニ所謂広東人参ナリトキケリ　翌戊午[29]ノ春和蘭人江府ニ来貢ス　茂質輩恭ク官允ヲ蒙リテ甫周桂子等ト同ク彼ノ甲比丹随従ノ医生列部(レッケ)苅ニ就キ本業ノ事ヲ問ヒ談偶偶広東人参ニ及ビ其品ヲ出シ示スニ医生曰ク此物我方呼デ「アメリカーンセソム(アメリカ)トイフ　乃チ佛郎察(フランス)及語厄利亜(インケリア)国人北亜墨利加(アメリカ)洲ノ属越乙阿而古(ユイオルク)トイフ港ヨリ舶来シ多ク諸ヲ広東ニ輸シテ貿易ストナリ　按ニ「アメリカーンセ」ハ亜墨利加地方ノ義　「ソム」ハ西洋人漢産ノ蔎テ称ス　蓋シ蔎ノ唐音「シム」ノ転声ナリ　コレヲ訳シテ亜墨利加蔎ト云フベシ　コレニ因テコレヲ考フレバ彼ヨリ彼ニ致シ此ヨリ此ニ輸シ転転シテ遂ニ我邦ニ伝送スルモノカ　然レドモ未ダ其生草ノ形容ヲ審ニセズ一定[30]シテ以テ参類トナシ難シ　因テ再ビ此ヲ医生ニ問フニ未ダ其形状ト主治及ビ産地方位等ノ如キハ此ヲ弁ゼズト是一遺恨ナリ」と．前述の蘭山のごとく中国の文献にばかりに頼るのと異なり現物をオランダ人医生に質してさらにその生草の形状を追究していることは当時一流の蘭学者の研究態度を示すものである．その生草の形容を審かにしなければ同定できないと慎重でなければならないが地上部の形態を求める余り中国人オランダ人の諸説に振り回され本筋の探究からそれて仙茅の詮索にまで至ってしまったのは残念である．

盤水は彼と同じ時代の曽槃の『人参識』を見ており「曽氏[31]人参識ヲ閲スルニ琉球人ハコレヲ洋参ト称スト　即チ言フ余等唐山ニ入

貢スル来往福州ニ寓スルコト数日福人ノ言フ所ヲ聞クニ広東人コレヲ福地ニ輸シテ以ツテ交易ヲナスナリ　其ノ広人等曰ク西洋ノ買客毎歳船ヲ我香山ニ繋グ常ニ此参ヲ排シテ貿易ヲナスト記セリ」と．これで見ると中国人・オランダ人の長崎貿易以外に別なルートがあり広東人参貿易のまた別な面を窺わせている．

さらに「又[32]和蘭舶来亜墨利加蔓ト名ズクルモノ正シク広東人参ナルトキハ西洋産タルコト疑ナク従新所謂佛郎察ノ買客等広東交易ノ一品ナリト知リ始テ其産地ノ実ヲ得タリト喜ブ　但憾クハ亜墨利加州ニ生ズル所ハ何某ト云ヘル地名ニシテ其草ノ形状並ニ西洋諸医ノ歴試スル所如何ト云フコトヲ弁ゼズ　ココニ於テ遍ク和蘭医籍ヲ捜索スルニ唯支那産ノ一貴薬草人参ナルモノアリト云フコトヲ記シテ其伝説ヲ載スルノミ」

「彼等[33]ハ西洋人参広東人参名異ニシテ其品同物ナリトス　此レ疑フベキコトナリ　蘭山翁亦嘗ツテ疑フ呉氏従新西洋人参苦甘微甘トアリ今舶来ノ広東人参ハ味甘シ因ツテ顧フ唐山所謂洋参ナルモノト広東人参恐クハ別品ナルカ却ツテ加拿達人参ト云フモノ其図説ト相較フレバ従新所謂西洋人参カト云ヘリ　但共ニ未ダ両品其真種ト云フモノヲ見ザレバ此ヲ定メガタシ　右ニイフ如ク再三和蘭人ニ質シ又鑒薬司ニモ問ヒ彼此相比較ストイヘドモ未ダ其実証ヲ得ズ姑ク此ヲ高閣ニ束ネヌ　是歳[34]文化6年己巳ニイタリ既ニ10余年ヲ経タリ又近ゴロ聞ク所ノ諸説ヲ併セテ忽然トシテ頓悟シ此品其ノ未ダ何物タルコトヲ弁ゼザルト云フコトニ決定セリ　此ノ元広東人参ハ即チ「アメリカーンセソム」ナリトイフ説起リシ後吾輩蘭学ニ従事スル其ノ源ヲ求ムルニ由無キニ非ズト思ヒシヨリ務メテ彼ノ西洋説ニ依ツテ其ノ実ヲ考究セント志ヲ発セシコトナリシニ今其レ此物清商ノ手ニ出デ西洋来ノモノニハ非ズ　唯ソノ名ヲ託セルモノナリト発明シタレバ深ク尋索セント欲セシ素志ヲ廃置セリ」と．

盤水は蘭学者たるの気負を一身に感じ蘭書を渉猟したが書物からは所謂西洋人参の記載は見つからず専らカピタン・船医等からの情報を集めたが目的には到達できなかった．その後何回かオランダ医生らに問いただしており新しい知識を得ている．すなわち「又[35]曰クアメリカーンセソムハ即カナダ人参也　亜墨利加洲加拿達国ニ産ス「エーンポンド」96銭ノ法馬　一筐トシ跋大亜肹(パタアピア)亜ニ載来リ夫ヨリ広東ニ致スニ広東人争ツテ此ヲ得ンコトヲ求ム　故ニ何十斤載来ルトモ瞬息ノ間ニ交易シ尽スト　此ノ説ニ由ツテ考フレバ広東人参ハ漢産ノ一品　「アメリカーンセソム」ハ即チカナダ人参ニシテ広東人ノ手ニ渡リテ西洋人参又洋参ト名ズケ貨賈供用スト見ユ　西舶加拿達人参ヲ直チニ本邦ヘ持渡ラネバ真品ハ未ダ嘗ツテ見及バザル也　宜ナリ其品支那広東人争ヒ求メル程ノ物タルコトヲ　真品ハ従新ニ謂ウ所ノ西洋人参ナルベシ　真ノ西洋人参ト云フモノ見マハホシキモノ也　人参何レノ国ト云ヘドモ多分ニハ産スルコトアルマジ　仮令多シトイヘドモ漢地ハ殊ニ貴賤貧富ヲ論ゼズ常ニ服用センコトヲ欲スルモノナレバ価極メテ貴シ且ツ神功モアリ出産モ稀少ナル品ナル故世ニ貴重モスルコトナリ　然レバ広東人参ノ如ク数多クアルベキヨウナシ　漢地ニテ洋参スラ蛮舶ヨリ争求ムルト云フヲ以ツテ知ルベシ　然ルヲ其西洋来ノモノトテ寛延以来我邦マデ唐船ヨリ舶来スル所ノ額数夥シキコトナリ」と．カナダ人参を直接見たいと願っており，また，蘭山と同様広東人参の供給量の莫大なのに疑問をなげかけている．寛延2年より明和元年まで（宝暦寅・卯年を除く）13年間に19,763斤余である由．

さらに「西洋[36]ヨリ広東ニ致シ唐山諸州中薬用ニ供シ　シカレバ亜墨利加洲ニテ幾許万ノ人参ヲ出スヤ　加拿達人参説ノ書ヲ按ズルニ佛郎察国人康熙48[37]年ヨリ50年ノ際漢地ニ在ツテ始メテ韓参生草ノ実ヲ知リ帰国ノ後本土ノ人人ニモ伝ヘシハ80有余年前ナリ　爾後亜墨利加洲中ニ於テ始テ捜シ索テ採収し漸ク本洲ニモ移シ播殖セシハ今ヨリシテ必ス50年ニハ出ズ」と．この頃には盤水の許にも北アメリカでアメリカ人参が発見されたニュースが誤った部分もあるにしろ一応曲りなりにも

入ってきた.『本草従新』の「大西洋佛蘭西ニ出ズ」の記載が脳裡に深く刻まれている盤水は北アメリカで発見された種子をフランスにもたらしそこで播殖して輸出しているように誤解するに至った. そのため年数の計算が合わなくなりこのニュースにも不信を抱き出した.

次に北アメリカに行ったことのあるオランダ人を捜し出し外科医「ユンケル」という者の話で「パナクス」という物は仙茅の1種であると教えられ仙茅の探索にかかり始め栗本丹洲にも仙茅につき手紙で問い合わせるに至った. 仙茅については直接関係がないので以下省略する.

大槻玄沢が上記のごとく各種情報に振り回されている時小原峒山[38]が『広東人参弁』[39]を発表している.

それによれば「広東人参ハ寛延ノ頃始メテ広東ノ地ヨリ日本へ渡ル（中略）享和壬戌[40]春三月蘭人江府ニ着ス「カヒタン」ヲ「ウイルレムワルデナール」ト云ウ　大槻玄沢子広東人参ヲ持ツテ蘭人ニ鑒定ヲ請フ蘭人ウイルレムワルデナール此ヲ見テアメリカセソムト云ウヤコノモノ佛蘭西国[41]ヨリ亜墨利加ニ行テ交易シ漢土ニ持渡リ又交易スルノ品ナリト答フ（中略）原来「ハーテルヤルトークス」ト云ウモノ漢土ニ渡リシトキ唐山ニヲイテ朝鮮人参ノ図ヲ始テ見テ自ラコレヲ写生シ朝鮮ノ度凡ソ北[42]極出地四十度ナルコトヲ考ヱ亜墨利加ニ帰リ其度ヲ推シテ亜墨利加ノ属国加拿タト云ウ地ニ於テ此草ヲ得タリ故ニカナダジンゼングト名ズク功用亦遼東参ニ同ジ　佛蘭西国ヨリ亜墨利加ノエイテロクト云ウ浜ニ来リ交易シ広東へ出シテ又交易スルノ由詳ニ書セリ」（中略）と明白に書いている.

一応これで決着はついているが, 掉尾の本草学者岩崎灌園はその著『本草穿要』[43]広東人参の項において「常正按ズルニ広東ノ説和漢トモニ紛紛トシテ何物タルヲ知ズ　今茲ニ文政戊[44]年春来朝ノ和蘭人医師シイボルトニ逢イテ問フニ広東人参ハアメリカニ産ス羅甸ニテシエムト云ウ　全ク3椏5葉ノ類ニシテ花ノ茎短ク葉ノ下ニアリ真ノ人参ノ花茎ノ長キニ異ナリト云ツテ和蘭ノ書中ニアル図ヲ予ニ示ス　コレヲ見ルニボルトノ説ノ如ク1根1茎3椏5葉ノ類ニシテ花ノ茎短ク葉ノ下ニアリ真ノ人参ノ花茎ノ長キニ異ナリト云ツテ和蘭ノ書中ニアル図ヲ予ニ示ス　コレヲ見ルニボルトノ説ノ如ク1根1茎3椏　葉ハ真ノ人参ト同シ　因ツテ考フレバ芳野直根ノ属ナリ（以下省略）と, シーボルトに教わりようやく *Panax* 属の1種であると納得するに至った.

最後に『草木図説』中の飯沼慾斎の説を紹介して終りとする. すなわち

「パナキス, キュインキュエホリュウム　羅（蘭名省略）按ズルニ林氏云[45], 佛蘭西人之ヲ米里堅ノ加納達ニ採ツテ支那ニ輸シテ大ニ利ヲ得ルモノニシテ（中略）即チ漢人ノ所謂西洋人参ニシテ吾邦人之ヲ広東人参ト称スルモノナリ　根形韓種ト一様ナレドモ　微シテ鬆疏ニシテ韓産並ニ吾邦所栽ノ品ニ比スレバ滋潤差[46]少シ　思フニ産地ノ不同ニヨルカ或ハ乾蓄ノ法不同ニヨルナラン　西舶広東ニ輸スルヲ以ツテ吾邦人ノ広東人参ノ称アル亦宜ナリトス　先師[47]之ヲ別種トシ遂ニ非人参説アルモノハ西書ヲ読マザルノ誤ニ出ルコト言ヲ待タザルコト知ルベシ」と.

謝辞・付記

本稿を書くにあたり資料『広東人参弁』のコピーの借覧を快諾されかつ種々御便宜を賜わった東京大学名誉教授木村陽二郎理学博士, 小原峒山につき資料を御提供下さった徳島市の医学博士福島義一先生, 野生地で採集され生根・乾燥品の写真を多数見せ御教示を賜わった東京大学薬学部斉藤洋博士, 広東人参の記事を古い植物学雑誌・同研究雑誌から貴重な時間を費して捜して下さった東京大学名誉教授原寛博士, 同植物学教室黒沢幸子博士, 大槻盤水宛栗本丹洲の手紙を読んで下さった熊倉一男氏に感謝しここに御礼を申し述べます. 文献2）以外にも今村鞆氏の『人参史』各巻を参考にさせて頂きました. 広参説は白文で筆者我流の書き下し文に改めた. 広参存疑は濁点を欠くところは濁点をつけ原文中欠

けている送り仮名は現代風につけ加え原文中の誤字で意味の通ずるものはそのままにし改めなかった．『広東人参弁』，『人参識』以外の文献は筆者手許の原典を使用した．

参考文献および注

1) 小野蘭山：重訂本草綱目啓蒙，巻之8，9丁表．
2) 今村鞆：人参史，朝鮮総督府専売局版．
3) Charlesf MILLSPAUGH: American Medicinal Plants, p. 70.
4) 呉儀洛：嚴星橋重訂，増注本草従新，広益書局刊，p. 5.
5) 逍学敏輯：本草綱目拾遺，人民衛生出版社刊，p. 63，乾隆30年（1765年）．
6) 松岡玄達鑑定：熊谷慎意増輯，6丁表，宝暦11年刊（1761）．
7)『本草綱目紀文』（蘭山の講義を弟子が筆記したと伝えらる）3巻7丁裏．
8)『本草綱目啓蒙』．文献 1）と同じ．16丁表．
9) 文献 1）と同じ丁数の続き．
10) 円根は球根で著者の誤．
11) 共に長崎に滞在する朝鮮人参貿易商の名．
12) 享和2年1802年．
13) この頃（1810年）小野蘭山は重病の身でありながら得意の中国文献を引用して広東人参が山漆（この文中では三七・田七の文字を使わず敢えて山漆を使う）であることを力説している．脱稿後幾何もなく死去，死後その孫小野職孝がその自筆草稿を模刻出版す．全文72丁．その内数カ所1行の半分とか1/3が脱字空白，後人が補筆．病が篤く死が迫っていたことを感じさせる．
14) 1丁裏．
15) 2丁表．
16) 2丁裏．この場合官は長崎奉行．
17) 宝暦7年（1757）幕府広東人参輸入の禁止を命ずる（上野益三：日本博物学史による）．
18) 10丁裏．
19) 勝計の勝は悉に同じ．
20) 12丁表．
21) 寛政9年（1797）．
22) 14丁裏．
23) American Medicinal Plants. 70図は前年の茎の残基跡と今年の茎の間にごく貧弱な不定根が1本ついている．GATHERCOAL and WIRTH: Pharmacognosy p. 513, 242図．新鮮な根の写真には不定根を3本出している写真が載っているが乾燥品のは不定根はついてない．今村鞆氏の『人参史』には不定根のついているものとないものとでは相半ばしている．
24) 山漆之詠は白井光太郎氏の「蘭山先生ト同時代ノ博物家ニ就テ」明治42年6月20日発行．植物学雑誌第269号 p. 49 に蘭山の真筆写真入りで掲載されている．
25) 1810年．
26)『広参存疑』は岩波の国書総目録には国立国会図書館と東大（田中芳男氏旧蔵の寄贈本）の2本となっているが筆者の許にも1本あり，いずれも写本である．筆者のは「大槻文庫」と「文彦」の角印があり，茂質（盤水）が己巳（文化6年1809年）の冬『広参存疑』の原稿を蘭山の許に持参して翁に訂正を求めて後幾何もなくして翁が死去した旨したためた別な紙が裏表紙に貼ってある．東大本はこれが33丁目の本文に入っており，仙茅についての記載があり，仙茅と広東人参について栗本丹洲に茂質が質問し栗本丹洲のそれに対する返事の写しがついている．手紙の前後を省略し要点は「カントウ人参の拙考等これなく　今に遷延認(シタタ)め申さず候　やはり疑惑中にてご座候只只其土地を踏み自ら目撃いたし申さず候事は聢と致候事には相判り申さず候」と書いてある．この2本は丁数，1丁の行数，1行の字数は同じであるが，東大本はやや誤写がある．国会本はこの二つの手紙の写しは欠けていたと筆者は記憶している．
27) 2丁の表，享保6年1721年．
28) 2丁の裏1797年．
29) 寛政10年　1798年3月　蘭館医師ヘルマン・レッケ Hermann LETZKE 甲比丹ニ随従江戸ニ出府ス．15日宿舎長崎屋ニテ桂川甫周，同甫謙，大槻磐水，土岐寛庵，堀本広益，松延玄之レッケト対談ス（中野操：増補　日本医事大年表，思文閣による）．
30) 一定シテは必ずとか確かにの意．
31) 3丁表　曽槃（占春）著．ここに盤水が引用する記載は他の『人参識』（京大本，東大本）と多少相違点がある．
32) 4丁裏表．
33) 10丁裏．

34) 1809年.
35) 14丁裏.
36) 18丁表.
37) 1709年.
38) 小原春造，1762～1822年（宝暦12～文政5）藩医，徳島県板野郡応神村出身の京都の医師沢玄住の二男として京都に生まれる．名は就正，号は峒山，はじめ俊悦，後春造と改めた．本草学を小野蘭山に学ぶ．1794年（寛政6）藩医にあげらる．『竜骨一家言』，『薬籠本草』の著あり＜福島義一＞（徳島新聞社『徳島県百科事典』による）．
39) 京都大学，富士川游文庫本，写本，全文3丁，1丁20行，1行概ね20字，筆録の日付等の記載なし．木村陽二郎先生御所蔵のコピーを筆者が借覧．
40) 1802年.
41) フランス人がの意か.
42)「支那天文に用いし語　北極星は赤道に於て地平線上にあり1度北進する毎に1度ずつ高まり北極に至れば頭上に来ると定めて緯度を定めたり」『上日万年外大字典』(啓成社).「北極星と地平線間の角距離　中国古代の天文学に於て観測地の位置を示すに用いたもので現在の緯度に等しい．地球の緯度を測る語．北極星は赤道では地平線上にあるので北極出地は0度であるが北進する程北極星は高まり北極に至れば地上を出ること10度で頭上に来る.」諸橋轍次：大漢和辞典，大修館書店.
43)『本草綱目穿要』ともいう．岩崎常正：灌園著，写本，13巻（上野益三：日本博物学史による）筆者所蔵本は1丁22行，1行概ね31字.
44) 文政9年，1826年，灌園はシーボルトに教を受けたことを他にも書いておりそれによると「文政9年3月下旬ヨリ4月10日迄」とある.（「シーボルトハ世人ガ思フ程ナ植物ノ大学者デハナイ」牧野富太郎：植物研究雑誌，**2**(1)，13，大正7年9月.）
45) LINNE.
46) *Panax quinquefolium* の栽培品は *P. ginseng* のそれよりもその差が著しい.
47) 小野蘭山.

Summary

Since the mid-eighteenth century, a new type drug of Ginseng root has been imported from Canton Harbour (China) to Japan, and the drug was usually named "Canton Ginseng." But the drug was originally produced in America and was shipped to Japan by way of Canton. At that time Japanese herbalists had different opinions on Ginseng's origin.

In this paper the author has shown that some herbalists and physicians exactly pointed out the origin of the drug, but that others (incl. famous herbalists; Ranzan Ono and Gentaku Ohtsuki) came up with some erroneous or inconsistent conclusions upon this problem.

薬 史 学 雑 誌
21(1), 28～32 (1986)

「金華山道碑」に刻された病気予防食について

那須 務*1, 吉崎文彦*1, 久道周次*1

Preventive foods for diseases inscribed in the "Roadside Stone Monument of Kinka-zan"

Tsutomu NASU,*1 Fumihiko YOSHIZAKI*1 and Shuji HISAMICHI*1

I. はじめに

近世における三大飢饉(享保・天明・天保)のうち，とくに東北地方では，天明・天保の飢饉の被害が甚大であった．飢饉と後に続く疫病の流行が，当時の人口を大幅に減少させていたことは周知のことである．

旧仙台藩領内においても，享保14年(1729)，天明4年(1784)，天保7～8年(1836～1837)，嘉永5～6年(1852～1853)，および明治2～3年 (1869～1870)[1]などの代表的凶作・飢饉の後には必ず天然痘，疱瘡，コレラ，マシン，朝鮮風邪などの感冒，その他の疫病が流行している．

当時，疾病予防を考慮した食品の知識を民衆一般が直接的に習得する機会があり得たかどうかはわからないが，このたび，宮城県石巻市の菩提山永巌寺境内に現存する，一見病気予防食とは無縁と思われた「金華山道碑」の裏面に，通行人に対してその製法伝授を企図したと推定される刻字を見いだした[2]のでその解読を試みた．

II. 道碑の造立

まず，「金華山道碑」造立の史的経緯についてふれてみる．

当時，金華山から遠隔の地（東北地方では，主として山形，岩手，福島の各県）においてはここの大金寺参拝を目途とする金華山講が組織されていたが，その講集団は「総参講」(講員全員の参拝）と「代参講」(講員中の代表者の参拝）とに分かれ，講員は参拝完了の記念に講の拠出金をもって「金花道碑」と題する道標を，参詣道の途中の「追分」(道路の分岐点）に造立するならわしがあったという．現在の講中数は大小あわせると約 500，多い順に山形県，福島県，宮城県，岩手県，秋田県，北海道，および千葉県となっている．地元宮城県よりも圧倒的に山形県と福島県に信者が多いのは，その昔の神仏混合時代，黄金山神社が真言宗の大金寺という寺であった頃さかんに行った出開帳の影響によるものと思われる[3]．

これらの道碑は，石巻市内においては，門脇字東上野町，湊伊原津，および羽黒町一丁目の各分岐点に現存する．材質はいずれも井内石（中生代の粘板岩）で，幅約 1m，高さ 2.5m 前後である．

今回とりあげたのは羽黒町の碑であるが，地元の伝承によれば，もと泉一丁目の三叉路付近にあったが昭和初年に移築されたものという．このことは，碑の表面下部に刻された方向指示が現在の位置では合致しないことからもうなずける．

この碑は，表面の刻字から，造立地点に程近く居住していたと伝えられる三春屋平吉な

*1 東北薬科大学 *Tohoku College of Pharmacy*. Komatsushima 4-4-1, Sendai 983.

る人物個人の造立によるものであることがわかる．三春屋平吉は，曹洞宗菩提山永巌寺（現宮城県石巻市羽黒町１丁目 1-27）の過去簿，二十二世の代の「安政七庚申歳万延元年と改む」の部に，「月舟智清個士　六月十四日　裏町　三春屋平吉叟　行年六十七歳」とみえること，また，平吉とその妻の墓石の右側面にも，「万延元年庚申六月十四日　三春屋平吉行年六十有七年卒」と，みえることから，寛政六年（1794）に生まれ，万延元年（1860）に没したものと推定される．

本碑表面の刻字はよく知られているところであるが，裏面の碑文については未紹介であり，造立者・三春屋平吉，および撰文者の節翁なる人物の詳細に関する具体的な資料も，永巌寺の過去簿以外現在未発見である．

文面は疑似漢文体で書かれており，文脈も整わず，当時の知識人の筆に成るものとは考えにくい．そのためか，文意を把握しがたいところも多々あるが，金華山信仰とは直接関係のない内容が刻まれているところが珍しいといえよう．

III.　文面の判読

図１に示した文面を判読すると，以下のようになる．各文頭の数字は右から数えた行数を示す，判読できなかった文字は空白の□で置き換えてある．また８行目に添字になっている単語がみえるが，（　）内に記した．

（1）　爰仙台石巻三春屋平吉齢及六十五岑，右翁従素性質朴成長，昔壱人旅僧喫茶得煉餅製[4]

（2）　其後天保七年翁年四拾三岑之時，妻并養之子□友岩城赤湯入湯折尓，不図趣江府，其年諸国霖雨降続

（3）　五穀不熟，江府従素廻米之地也，穀物頗高価，金壱歩ニ玄米四舛也，干時為業両国辺ニ借栖得先處之賣煉餅，

（4）　事念喜製賣し賣甚為市其價尤下直也，翁不惜其製雖教之小昧之者とも栖手狭不能製，乞命雖

（5）　然，故郷難忘国恩経四年□帰国，此餅其味甚美味也，豊饒之時者消腹中，亦

図１「金華山道碑」裏面刻字

豊稔之時者満服

（6）　中，統而無毒千草千木葉此方を以製時者，豊凶とも＝国家衆人之良食也，翁従幼念金華山，伝来之僧者□

（7）　天女之告成らんと奉伝，後世子孫為□此方印茲爾云，

（8）　一疫病除餅　古哥耳芹那つ奈五形（はゝこ）たひらこ（はこべ）佛乃座（さゝぜんそう）春ゝな（かぶ）すゝしろ（大ゐん）是ぞ七種ヲゆで，布袋ニ入能志保り

（9）　細か尓刻ミ，二舛江うる米一丁粉一舛毛ミ満ぜ，糯米五合先ニふかし満せ粉上江置，婦かして搗草餅ニ奈る

（10）　一中風不受餅　桑の葉藤乃者枸杞の者右三品製し搗支，先耳同じ統而毒那き木乃者草餅ト成

(11) 一痘瘦ニ食餅　大根引奈ニしてゆで袋ニ入，能志保り二舛うる米粉一升毛ミまぜ，婦かし搗ハ白餅ニ成，毛ち米をいむ

(12) 一酋飲除餅　豆腐から二升うる米の一丁粉一舛もみ満ぜ，毛ち米一舛先耳ふかし，上江 満ぜ物を置

(13) 婦かし，クチナシ五匁剪じ，あい取水ニして搗ハ粟餅と成　　節翁併書之

IV. 文面の内容

まず，1～7行目までの概略はおよそ次のようであろう．

「かつてひとり旅の僧侶から煉餅の製法を教えられた」，「天保七年に江戸に行き，両国あたりで借家住まいをしながら餅を安価で販売したため非常に繁昌した」，「しかし故郷が恋しくなって，四年後に帰郷した」，「煉餅は，すこぶる美味で，豊凶年ともに良食となる」，「平吉は幼年時から金華山を信仰していた」，「旅の僧の教えを天女のお告げと思い餅の製法を後世子孫に伝えるために，この道碑に刻した」．

さらに，いくつかについて注釈すると，

1行目の「三春屋平吉齢六十五岑」から，本碑造立年は，平吉の晩年（安政五，ないし六年ごろ，1858～1859）と推定される．

2行目の「岩城赤湯」とは，どこであろうか．宮城県で「磐城」とは，名取郡の生出・秋保地方，宮城郡の松島・高城地方，本吉郡一円の地方にあたり，奇石巨石に富む地域の意とされる[5]．しかしながら旧仙台藩領で「赤湯」とは，通常，鳴子赤湯を指し，「赤湯玉造郡大口村にあり疝気寸白蟲を治す」との記録もみえる[6]．さらに，福島県のいわき地方，秋田県のいわき村にも，「赤湯」という地名は見いだせず，これらの事実だけからは「岩城赤湯」の現在地は特定できない．

3行目に，「金壱歩ニ玄米四舛也」とある．仙台藩領内では当時の米価の推移が金一歩につき，天保元年（1929）3月では3斗，同年10月には3斗5升，天保七年（1836）11月では6升，同年12月では5升であり，米価急騰に伴う暴動が発生している[1]．

7行目の「天女の告」とは，金華山の祀る弁財天のおつげのことか．

次に8～13行目までを書きおろすと以下のようになる．

(8) 一疫病除け餅　古歌に芹なづなごぎょう（ははこ）たびらこ（はこべ）ほとけのざ（さぜんそう）すすな（かぶ）すずしろ（大こん）これぞ七種をゆで，布袋に入れよくしぼり

(9) 細かに刻み，二舛へうる米の一丁粉一舛もみまぜ，糯米五合先にふかしまぜ粉上へ置き，ふかして搗くは草餅になる．

(10) 一中風受けざる餅　桑の葉，藤の葉，枸杞の葉右三品製し搗くこと，先に同じすべて毒なき木の葉草餅となる．

(11) 一痘瘦に食する餅　大根引なにしてゆで袋に入れてよくしぼり二舛うる米粉一升もみまぜ，ふかし搗くは白餅になる．もち米をいむ．

(12) 一酋飲除餅　豆腐から二升うる米の一丁粉一舛もみまぜ，もち米一舛先にふかし，上へまぜ物を置き，

(13) ふかし，クチナシ五匁剪じ，あい取水にして搗くは粟餅となる．　節翁これを併書す．

碑文8～9行目にかけて，疫病除餅としての草餅の製法があげられている．通常，草餅とは，「三月の節句に蓬の若芽を摘んでこれを茹でゝ餅と一緒に搗く[7]」ものであるが，ここでは，いわゆる“春の七草”が用いられている．春の七草については，古来からさまざまな説があるが，一般には，ゴギョウとハハコグサ，タビラコとホトケノザ，スズナとカブ，およびスズシロとダイコンを，それぞれ同一視している[8]．碑文8行目で横に小さく書かれている植物名を，本文の植物名の別名とみると，「五形」と「はゝこ」，「たひらこ」と「はこべ」，「佛乃座」と「さぜんそう」，「春ゝ奈」と「かぶ」，および「すすしろ」と「大ゐん」とがそれぞれ同一のものとなる．タビラコとハコベ，ホトケノザとサゼンソウとを同一植物とみなす説は他に見あたらず興味深い．

表 1　死没者数の推移

年	男子	女子	男女子供	無　縁	合計*
1835	26	25	24		75
1836	73	40	78	およそ 200	191
1837	106	99	90	およそ 500	295
1838	12	19	5		36

* 無縁の数は，合計に算入していない．

10行目には，クワの葉，フジの葉，およびクコの葉を用いた中風不受餅の作り方が書かれてある．このような餅の存在は他の地方では聞かれず，クワが使われていることは，中風よけとして的を得ているといえよう．

次に，11行目には，痘瘦のときに食する餅について書かれてある．「大根引奈」（引菜：千六本に引いたもの[9,10]）に，うる米粉を加え白餅としている．通常，「白餅」とは，糯米の上白米を用いて製したものである[11]．ダイコンを加えているところに，この餅の特徴がある．宮城県内では，ダイコンを痘瘡に用いた言い伝えは他に見いだせない．「もち米をいむ（忌む）」とは，いかなる根拠によるものであろうか．

12～13行目には，豆腐，うる米の一丁粉，もち米，およびクチナシを用いて粟餅とし，「酒飲除餅」と命名されたものが記載されている．仙台地方の正月の風習である豆腐餅（豆腐をよく摺って混ぜたもの[11]）に類似している．「あい取」は，「相取」で，普通，捏取（こねとり）という[10]．通常，「粟餅」とは，粟の粉を加えたもの[11]，または糯米を蒸してついた餅[12]，とされる．そこで，ここでいう「粟餅」とは，かわり粟餅，ともいえようか．ここでは，クチナシは，着色料（黄色）として使われている．「酒飲」とは，臼から手ですくって水を飲むこと[13]である．では，「酒飲除餅」とはいかなるものか．「酒飲」は，東洋医学用語に見あたらず，また，当地方言にも「ユーイン」もしくは「ヨーイン」という言葉は見いだせず，現在のところ不明である．

V. むすび

本碑裏面に刻す天保七年（1836）は，わが国災害史上有名な大飢饉のころである．

平吉は，天保三年（1832）に母を失い，次いで天保五年（1834）に息子を，天保七年（1836）には娘を失っており，天保年間に，三春屋の屋号のものの死没者は，12人を数える（永巌寺過去簿）．

また，永巌寺過去簿に記載された死没者の数は，天保六年（1835）から天保九年（1838）では，表1に示すとおりである．これらの死没の原因は，主に飢饉による餓死であろう[14]が，石巻地方で流行した疫癘も関与していたであろう．石巻地方では，天保4～8年（1834～1838）に，痘瘡，疥癬，痢病，および流感などが流行した[15]．疫病の種数の多さからみても他の時期を圧倒している．道碑裏面に疫病よけの餅の作り方を刻したこともうなづけよう．

これらのことから，本碑造立の動機は，死没した縁者への供養と，後世への疫病よけなどの餅のつくり方の伝授であると推測される．さらにその後，石巻地方では，天保10年（1839）にコレラ，天保12年（1841）に痘瘡，嘉永3年（1850）に流感，嘉永4年（1851）に痘瘡，安政5年（1858），安政6年（1859）にコレラ，文久2年（1862）にコレラ，麻疹，慶応3年（1867）に痘瘡，流感がそれぞれ流行している[15]．本碑の果たしたであろう効用は，多大であったと思われる．

病気よけの食物の製法を，他に例のない路傍の「金華山道碑」裏面に刻し，大衆の目前に示したところに，本碑の特異性と重要性がある．明治に至っても飢饉・疫病が本藩各地につづいたことをも考慮すると，本碑の意義高さが理解されよう．

謝　辞

本研究においては碑文の判読および解釈について，元石巻市図書館長，橋本晶氏より御指導を賜った．また富士大学，加藤登之男教授，仙台中央タイピスト学校設置者，佐々木文郎氏，および東北薬科大学，安藤利夫助教授より御助言を頂いた．以上の諸氏に謹んで御礼申しあげます．

引用文献および注

1) 菊地勝之助：重訂宮城県郷土史年表，第4版，宝文堂，仙台，p. 192 (1972).
2) 元市立石巻図書館長，橋本晶氏の御指導を受けた．
3) 奥海登和子：金華山信仰，東北民俗資料集(Ⅲ)，萬葉堂書店，仙台，p. 142 (1975).
4) 脱(法)カ．
5) 菊地勝之助：宮城県地名考，宝文堂，仙台，p. 107 (1970).
6) 保田光則：新撰陸奥風土記，歴史図書社，東京，p. 55 (1980).
7) 大友幸三郎：仙台の年中行事，仙台観光協会，仙台，p. 28 (1940).
8) 宮前武雄：薬局，**2**，43 (1950).
9) 辨天丸孝：石之巻辨　語彙集，郷土社書房，石巻，p. 31 の 1 (1932).
10) 浅野建二：仙台方言辞典，東京堂出版，東京 (1985).
11) 小野やす：藩政時代の食習，宮城県史19巻，財団法人宮城県史刊行会，仙台，p. 211(1956).
12) 新村出編：広辞苑　第2版，岩波書店，東京，p. 79 (1975).
13) 富士大学，加藤登之男教授の御教授による．
14)「如無縁八百餘霊則凶年之餓斃也当其時死亡退項者一百餘軒可」(菩提山永巌寺過去簿).
15) 湯本真佐雄編：石巻市医師会史，石巻市医師会，石巻，p. 96 (1971).

Summary

Some of the roadside stone monuments of Kinka-zan are extant in Tohoku district up to now. Descriptions of preventive foods for diseases were found on the hidden side of one of the monuments which erected in the site of Eiganji temple (Ishinomaki, Miyagi Prefecture).

Decipherment of the descriptions was attempted and the recipes of some of the foods in the Tokugawa Era were revealed. A few another interesting matters were also found and discussed.

薬　史　学　雑　誌
21(1),　33～40　(1986)

柴田承桂と長井長義[*1]
——先覚者たちの薬学振興論をめぐって——

安　江　政　一[*2]

Shokei SHIBATA and Nagajoshi NAGAI[*1]
——The opinion of the pioneers of pharmacy on the development of Japan Pharmacy——

Masaiti YASUE[*2]

1. はじめに

昭和35年（1960）長井長義伝[1]が日本薬学会から発刊され，同55年（1980）薬学会創立百周年を記念して『日本薬学会百年史』[2]が刊行されることになった．薬学会から『百年史』の編集を依嘱された編集委員会の立場としては，薬学会の公式刊行物であり，異議もでていない『長井伝』は，もっとも重要な資料として編集するのが建前であったと思われる．しかし『長井伝』は個人の顕彰記録であって，必ずしも適正とはいい難い部分や若干の誤も含まれていることはすでに指摘した[3]．

『百年史』の初めの部分に薬学の先覚者たちが，薬学の将来発展のためにのべた見解がまとめてある[4]．これによると柴田承桂が先に見解を発表し，その内容が長井長義の薬学会会頭就任演説の主柱的要素になったとかいてある．ところがこの部分では見解の内容には一言半句もふれず，そして長井の就任演説の解説では柴田との関係は伏せておいて，長井独自の見解であるかのような賞賛を送って，『長井伝』と同様な取扱いをしている．そこで今回，雑誌に発表されている論文を詳しく紹介し，その発表の時期と，そのような見解をもつに至った経過を示す関連論文も引用して，わが国近代薬学の創成期において適確な薬学発展の指針を最初に示したのは誰であったかを明らかにしたい．

2. 柴田承桂のヨーロッパ視察報告

柴田は公務によって明治16年7月から翌17年5月まで約10カ月にわたってヨーロッパを視察し，そのときの見聞を『薬学雑誌』に発表した[5]．彼はすでに東京大学の薬学教育に約10年関与したが，それは不振をきわめ，薬業は発展せず，不良洋薬が横行しているときであった．報告は短いものであるが，現在からみるとよく各国の特徴をとらえていて，西欧薬学史の一端を示す好資料であるとともに，彼の薬学論展開のひきがねにもなったと思われるので注目に値する．視察談は旅行の順によっている．

> 「フランスでは教育の方法，薬学校の体系などはすこぶる完備しているが，実業の面をみると深みがない．独立の薬科大学は3校，医科大学と併置のものが3校，合わせて6校ある．大学と専門学校では，開局できる地域に差があっ

*1 日本薬学会第104年会（金沢 1985）において一部発表．
*2 新潟薬科大学

たが，今は廃止された．実地の薬舗は学校の盛大に比べて意外な程不完全のように思われる．薬局の調剤室の傍に菓子，石けんなど陳列して売っているものがあり，学者の業とはみうけ難いものもないわけではない．薬舗数は多く，人口1万人につき薬舗2の比であるという．

ドイツの状況は一見したところ，薬学教育ははなはだ不完全である．大学には生薬学と製薬学の講座があるだけで，正統な薬学者になるためには，薬舗に少くとも3年間実地修業した後，大学に2年間在籍して薬剤師資格試験がうけられることになっている．

薬学者たらんとする者は，中学を卒業して薬舗に入れば2年の後実地演習をとげ，十分の学識を具うるとみとめられれば，大学にあること2年で開業試験をうけることができる．このように大学は開業試験受験のための条件となるだけで，薬学者養成上の欠陥をなしている．それでも国中の薬学の景況は実に旺盛で，いたるところ十分な学識をそなえた薬舗のないところはない．辺鄙な町村でも自宅調剤をする医師はほとんどないようである．

都会の薬舗は清潔完備，目を驚かす程であり，標本なども見事で持ち帰りたいと思わせるものである．薬局数には制限があって，5千戸につき1舗の割合であるが，まだ制限に達してはいない．薬舗の権利は売買され，大きな資本を持つ薬舗は他を買収し，常駐薬剤師は勤務者になっているものがある．

製薬会社は見学させず，シェリング，カールバウム社など拒否したが，ライプチヒのシンメル社は見学させてくれた．精油を大規模な工程で製造している．またドレスデンのゲーヘ社も見学した．この会社は薬局において調剤すべきものをまとめて製剤として薬局に卸している．こういう業務はフランスの中央製薬社でも同様に行っていたが，両者とも同様に盛況であった．

イタリアはドイツに比べると数等劣っている．教育法はドイツに似て，特別の薬学校はなく，通常の大学で教授し，実地は陸軍病院薬局もしくは官府の特許を有する大薬舗において修業する．一般薬舗は薬舗主の学識不足のため，教育を行うに足りない．

市中の薬舗はフランスより不完全である．この国は古来宗教国で，施療大いに行われ，巨大な施療院があって院内薬品の需要は多く，広大な薬局を設けることは他に類をみないが，粗漏に流れる形跡がある．

英国は大陸諸国とは大いに異っている．元来自由制度の国であるから，百般の事物は拘束しないのが常である．ロンドンに英国薬学協会と称する一大私立会社があって，英国の薬学のほとんど全部をこの一社によって支配している．その組織は事務所，博物庫(ミュージューム)，学校，学生試験の4部よりなり，学生試験の一部だけ政府よりの特別の保護をうけるが，その他は全く私立の所有である．政府は薬舗開業試験をあげてこの私社に托している．

目下の会長は化学者アットフィールド氏であるためか，化学は完全であるが，他の科目は見劣りするうらみがある．薬舗は2種あって菓子，石けん，香水など販売するものがあって両者は一目で区別できる．医家はなお自宅調剤を許可されていて，ロンドン市中でも自宅調剤する者は少なくない．

オランダは小国であるが，薬学は大いに進歩し，強大国に勝るところもあって，万事ドイツと大差はない．薬学校の独立しているものはなく，通常の大学に併設され，薬舗に雑貨を売る習慣はない．医家の自宅調剤もほとんどない．

最後に補遺の一つとしてホメオパシーについてのべる．一種奇異な医学で，多くの劇毒薬の少量を用い，大てい医家の自宅調剤である．これはつまるところ昔の遺物で，現在学者は問題にしないが，今なお各国にあって無知な庶民を瞞着して利を射んとするものもないわけではない．薬舗の中にもホメオパシーの薬舗として業を営むものもある．」

3. 柴田承桂の薬学振興論

明治18年3月，柴田は「薬学の盛衰」[6]なる講演を行い，その内容を「薬学の運命如何」[7]と改題して翌月の『薬学雑誌』に発表した．この見解は西欧薬学の発展段階を正しくとらえ，薬学の衰退傾向を見てとった上での対策である点特に注目すべきであろう．柴田の用いた例示は，現在では適切とはいい難いが，概観としてはすぐれたものであった．

「種々な学問が知識世界に分立しているのは，種々な国々が地球上に割拠するようなもので，

昔雄飛して今は振わないもの，今は盛大でも昔は微々たるものもあり，また起原は新しいが一世を動かすものもある．この区分を五大洲の情勢に比較すると文学，法学，神学など古くからある学問はアジア，アフリカにある旧国に相当し，理財学，社会学又は哲学中のある流派は米豪洲の新しい国の如くである．いわゆる万有理学の諸科は欧洲列国の形態に比すべきである．近時万有理学の発展は諸科に卓越し，法文神学は立おくれを示し，理財学，社会学，ある哲学などは万有理学の発展から振起して米豪に植民したような形勢である．

では本会の目的とする薬学はいずれの国に当たるかというに，万有理学の１科であって欧洲の１国に比較すべきは当然である．しかし欧洲列国の間においても盛衰強弱の別ある如く，万有理学各科の間にもまた新旧，進退の差がある．理，化，医，生物諸科の如きはもっとも強盛に赴く英独以下の大国である．星学，数学の如きはイタリー，オーストリアなどの旧国である．これら各科に従事するものが，各々その学を拡張進歩させようと熱中するのは，各国人民が各各その国権を伸張しようとする様と異るところはない．本日この一堂に集会するわれら会員もまた薬学という一邦国の住民であって，この学を拡張しようとする共同の目的をもっている．諸君のうち主に分析上の実験に従事し，或は製薬上の事業に，或は生薬植物学に偏し，又は薬局調剤の業を専にするなど，日常の業は大いに異っているけれども，薬学の境域内にあって広い意味の薬学を進歩させようとする考えは同一である．士農と商工と其の業は分れていても，一国の住民たる以上その国権の拡張を希望するのに異っていない．

いまわれわれがよっている薬学を発展させるには，一国の国民が士農工商各々精励してその集合としての国を強力にするのと同様，各自異る業において成果を収めることが第一である．ではわが薬学なる邦国は目下如何なる状況にあるか，近傍の国々とは如何なる関係にあるのか，その進歩をはるかには如何なる方向においてなすべきか，旧領はいかにして繁昌させるべきか，植民すべき境界外の新洲は如何に占領すべきかなど，幾多の問題を究明しなくてはならない．まずわが薬学目下の形勢は如何．今後の盛衰を予測するとどうであろうか．はなはだ歓喜自負すべき状況ではない．これを欧洲の列強にたとえるならスペイン或はポルトガルの如くである．同国は英仏蘭に先んじていたが，今はかえっておくれをとっている．植民地は独立したり，他領に転じて縮小した．薬学において化学，植物学の如きは実に薬学の境界内に発生して万有理学の中に独立の地位を確保したのに，元祖たる薬学はかえっておくれをとっている．ただ薬局の実業が世に欠くことができないため，その学に従事する人員を維持する状況にすぎない．本邦の如きこの実業のまだ起こっていない地においては，その衰退は故ないことではない．では薬学の将来はどうかと進歩を占うと，これまた意を強うするものはない．学理の進歩は事物を単一の点に帰納する傾向にある．医薬の事もまたこの中にあって，薬学は医学のためにその治療の材料を供給するものであるが，近来の医学の発展は病理を究明して昔のように無数の薬物を暗投するの弊を改め，薬品需要の数を減少するの方向にある．のみならず化学の進歩は動植鉱の成分の発見により草根木皮のうち大半は薬物の域外に脱落した．このように薬学は医学と化学の両方から縮小する小領域に隠退しつつある．

このようにのべたからといって諸君，私をもって薬学をそしる者としないでほしい．私も薬学の一員であって，諸君のあとについて薬学進歩に熱中する一人である．漫然と己を知らない弊を改め，前途の方向を明らかにするため，やむを得ず一言したまでである．では薬学進歩は再び期し得ないであろうか，決してそうではない．以下発展の方略についてのべよう．

薬学の進歩発展をはかるには二つの方向がある．すなわち内強的（インテンシーフ）と外伸的（エキステンシーフ）の方向の二つである．これを国策にたとえるなら前者は国内整備であり，後者は植民地獲得とその経営である．内強的の方法とは，現在の薬学の領域内に属する諸科目を精査することである．薬物の化学的および植物学的検査，製練，調剤諸法の発明改良に至るまで，今日薬学者の努力すべき業務はきわめて多いが，諸君の熟知のことであるから省略して，たゞ一言だけ注意を喚起したい．近時薬学の研究方法が純正の万有理学に近づく傾向を示し，製剤の形状の如き薬学には緊要のことを課題にしなくなりつつあることである．製剤の

形状如何は薬学終局の目的において重大な関係を有するもので，特別優秀な効力ある薬物でも，その製剤の不適正なため用薬の妨げとなるだけでなく，しいて用いると生体を傷害するものもある．肝油の香味不良，粉末キニーネの苦味，サリチル酸ソーダ，鉄剤などのほか刺戟性もしくは化学的作用によって胃腸を害する酸類，金属塩類，溶解性によって内服，皮下注射に適しないもの，分解し易いため不変の製剤を作り難いものなどについて，適当な形状を発見し又は改良するときは用剤の境域を拡大して益するところが大きい．このような研究は社会において華々しく扱われないこともあって薬学者は研究することが少い．さらに薬学者は生体と薬物の関係を研究することがほとんどないことと合せて残念なことである．

そのほか化学的植物学的検査でも，なおなすべき余地はきわめて多い．防腐解熱性の芳香族系化合物，強烈な作用のアルカロイドなど加工したり，容易に製造するための純粋に化学的な研究，外国産薬用植物の栽培，顕微鏡による薬用植物各部の発育変化の精査など純粋植物学的研究のほか，東洋個有の動植鉱よりなる薬物の検明すべきものはきわめて多い．一般植物成分を化学的に検査するのはヨーロッパにおいても目下薬学者の任としているのに，日本植物中成分分析を経たものは数十種にすぎない．重要な薬用植物ロート，ウズ，大黄，人参などはまだ完結していない．このように内強的の部分でも薬学者の力をつくすべきところはすこぶる広大である．先に医学と化学にはさまれて薬品の数は零に近ずくといったのは極端な表現で，数えられる年数の間にあるべきことではない．旧来個有の薬物だけでも拡充してやまなければ，万有理学の間に立ちまじって，一大学科たるの妨げのあろうはずはない．

社会進歩の風潮の中にあって，旧態を守るだけのものは死滅するのが常である．この意味でも薬学は新天地を獲得しなくてはならない．このためには薬の1字に拘泥してはならない．ファルマシーとはギリシャ語の魔法の意からきた名称である．薬学の旗を掲げて万有諸学科の間を探査して，取るべき権利のある境域は遠慮なく旗を立てゝ占領すべきである．とらなければ直ちに他の所有になるであろう．以下外伸的(エキステンシーフ)の方法についてのべる．

薬学の進出すべき権利のある新領域には衛生学，裁判化学，毒物学等がもっとも著しいものである．薬学と医学とは淵源を同じくし，人体の疾病を救う目的で医学はその実をつとめ，薬学はその手段たる薬物を供給する任を負担してきた．近世学術知識の進歩によって，各個人を療するは下手であり，全郷全国の人民をあげて健康を増進し，疾病を予防すべきことを目標とする衛生学が発展してきた．今のところこれは医学の独占である．衛生上の手段たるものは大気，飲料水，住居，食物を始め人民日常の要品であって，なお疾病の際療する薬品のある如く，健康の際にこれを保持するの手段たるものである．故にこれらの物件を精査究明するは実に薬学に適当の業であって，少しも他にゆずる理由のないものである．その他裁判上の分析検明から，毒物薬物の生体上における関係および医療上に供給すべき自然力の性態に至るまで，皆順次薬学の境域にひき入れなくてはならない．

〔「薬物毒物の生体上に於ける関係を知るに生理解剖の学を修めざれば能わずとして，単に化学植物学等に関する薬学を修むるは，惰に非れば即ち愚なり．生理解剖学といえども決して医学の専有するものにあらず，亦純然たる万有理学の別目にして，生体の形態および発象を究むるの学にあらずや，何時にても引て薬学の援兵となすべし.」〕(原文のまま)．故にいわく，薬学者は進んで生体上における薬物の関係をも研究すべきである．以上が薬学を外伸的に進歩させる方法である．

内を修め，外に学ぼうとするには鎖国時代の槍剣銃砲だけでは目的は達せられない．必ず遠洋に乗りだすべき軍艦を備えなくてはならない．薬学に新境地を開拓するにも旧来の理化学動植物学だけでは十分な成果は上げられない．必ず生理解剖の諸科にわたり，あるいは病学の総論をも研究しなくてはならない．これは私一人の漫然たる発言ではなく，往年ロンドンで開かれた万国薬学会議においても薬学の教科中生理学毒物学等を論じたものが少くなかったことをみても，世界の動きがこの方向にあるというべきである.」

以上が柴田の薬学振興論であるが，その発想の由来をのべ，具体的な方法まで示し，現代にも通ずるものを含んでいる．彼はさらにこの論を展開するため，薬学と他科との関係

に論をすすめた．彼は薬学の将来に暗いものを感じながらも，なお自ら先頭にたって薬学のために生涯を捧げたのである．

4. 柴田承桂の「薬学とその補助たる各学科との関係」[8] とその意義

「考察の方法は種々あるが，大別して二つになる．その1は薬学を主位として他学科を客位におくものである．このとき諸科目は薬学修習のための予備または補助となるものであり，その2は諸科を主とし，薬学を客位とするもので，このとき薬学は応用上の一部となるか，その研究の補助となるものである．

先般私は薬学が学問百般の間にあって，どのような位置と状況にあるかをのべたが，その延長上の一部として，薬学と諸学科との関係を説明する．考察すべき範囲は広大であり，諸君熟知のことも多いから，範囲を限定して学薬のうち薬効学とその補助学科のうち，もっとも重要な化学と植物学の2科との関係に限定して説明する．この場合，薬学を主とする第一の方法は薬学を修める者にはよく知られているから省いて，ことさらに薬学を客位におく第二の方法によって考察する．

本題に入る前に一言すべきは，薬効学と植物学の関係である．植物成分の化学が精密化すると，薬効学と植物学の関係は化学との関係に帰するようになる．ケシ科植物の鎮静作用，ナス科植物の瞳孔散大作用との関係は，その中に含まれるアルカロイドに基因することが判明したのがその例である．そこでまず化学と薬効学について考察する．先にのべたように薬学ではなく，化学を主位において薬学の分科たる薬効学を客位において考える．化学においては元素から始めて化合物へと，類似の性質に従って分類する．これに従って薬効を並べてみると，両者は符合しないことがある．例えばカリウム塩が心臓毒であるのに，ナトリウム塩はほとんど無力であるような著しい例もあるが，塩素，臭素，ヨウ素あるいはリン，ヒ素，アンチモンのように，化学においても薬効においても同様になるものが多い．炭素化合物では1価アルコールにおいて炭素が増加するにつれて酩酊作用が増強する．セチルアルコール $C_{16}H_{34}O$ は水にとけないため作用は現われない．メタン系列でも炭素が増加してテルペン体になると，皮膚は刺戟しないが，吸入すると昏睡を来す．ピリジン C_5H_5N にメチル置換を行ってピコリン，ルチジン，コリジン，パルボリンとすゝむにつれて酩酊作用があり，炭素の増加は作用強化になっている．こういうことを化学を主位にして考えると，この性質は化学そのものの解明に利用することも可能であるが，まだ着目する者はない．それは生体の現象は不定，変化し易く，人為的に制御することが困難であり，測定すべき対象もはなはだ少いためであろう．仮にある生体を一定不変の状態に保持して種々の化学的性質に反応せしめ得たなら，きわめて有益な成績が得られよう．このような定準動物は空想上のものにすぎないかも知れないが，定準でなくても，普通の動物上における化学的物質の作用と，その化学的性質との対応のみを考察するだけでも益するところは少くないであろう．今後研究家の成績を引用して化学植物両学科の解説を試みたいが，今日は化学本来の分類に従って順次論じてゆくつもりであったが，緒論に止まった．」

柴田は化学構造と生理作用の関係に着目していたが，以後見解の発表はなかった．

医薬分業の制度下にあった西欧の開局薬剤師は，処方調剤だけでも巨大な利益を手中に収め，安定してゆとりある生活ができた．その結果薬局では少なからず化学を進歩させたが，それは無機有機にわたる厖大な数の純粋な化合物の発見，蓄積に止って，理論と哲学的考察を欠いていた[9]．それは新規化合物の創製はするが，医師の処方をまつという消極的態度に終始して創薬の意欲が生まれなかった．大学に入った化学は自然科学の一部門として華々しく発展しているのに，ドイツ大学の薬学は開局試験の条件になり下っていた．当時のドイツの薬局はその活動分野のうち，化学の教育と研究は大学に，製薬事業は大企業に奪われ，処方調剤1本に縮小されつつあった．しかもその処方調剤さえ大企業による製剤の大量生産が開始され，薬局経営の盛況にはすでにかげりがみえていたのである．手本とするドイツ薬学の停滞とゆきづまりを感じとった柴田はこの打開のために，動物実験の導入による薬の創製と衛生学への進出を提

唱した．卓越した先見であった．

5. 長井長義の欧洲薬学史[10]

明治18年（1885）3月の薬学会例会で，柴田の演説に続いて長井は「各国薬学の沿革」について講演した．長井は薬学を発展させるには，その進む方向を知るのが第一の問題で，既往の事績を考察し，その変遷を知ることが必要であるとのべた．これは薬学に限るのではなく，一般の通則であって，歴史という．以後毎月の例会で薬学史についてのべ，薬学なるものの性質を明らかにするが，今回は端緒であるとした．しかしその後，長井の薬学史についての発表はなかった．柴田が薬学の現状を分析してその発展策を提案したのに対し，長井は薬学史を探究して薬学振興論を展開するはずであったが，不発に終ったのは惜しまれる．この長井の演説の要点は次のようである．

「薬学には薬効学，製薬学，薬舗の三業種がある．製薬学とは薬品を可及的に人体に入るに適当な形状に作りだす学問として説明し，ドイツの大学における製薬学の内容を現在の製剤学として説明している．そして草根木皮の成分研究が医薬分業の端緒になったとのべている．昔は医薬兼業で神農の「赭鞭々草木嘗百草」をもちだし，漢方では薬礼あるを知って診察料の何たるかを知らず，現代の医学教育をうけた日本の洋医は，常に漢方の杜撰を罵りながら，一方で漢方の伝統たる医薬兼業を恥ともしないと，わが国の医薬兼業を非難している．そして薬学を進歩させる方法として製薬学のほか，生薬の有効成分を単離して用いることおよび純化学的に薬品を合成することの3方法をあげている．

また西欧の医薬分業は自然に成立したとのべるなど，薬学史に関する見識は高く評価することはできない[11]．この長井の発表は薬学史の緒言であって本論を欠いているが，薬学の本質を知るためにはその歴史を探究すべきことを指摘している点が注目される．なお西欧薬学史については須田勝三郎の紹介があった[12]．しかし当時の科学史は学説史と天才の生涯をのべるに止って，物事の本質に迫るに至ってはいなかったから，利用できるような既成の薬学史はまだ存在していなかったといえる．

6. 長井長義の薬学会会頭就任演説[13]

「私は会員諸君のごすいせんによって会頭になりました．会頭であるからには会の盛衰に責任があります．私は会の隆盛をはかり，会の目的を達成する道を明らかにしなければなりません．わが国の薬学は世界の薬学に対して後進ですから，他の発明，新説を紹介して広く会員に伝えて利用しうるようにしてきました．このあり方に誤はありませんが，私の考えでは，わが国の薬学もこのあたりで独立して，自分自身の新研究を開発して，世界薬学の進歩に相当寄与して，十分な自信をもつようにつとめるべきものと考えます．前の場合は他の努力によって得たところを坐して利用することですから，世界の薬学に対して独立を主張し得ず，黙従するほかありません．後の場合はむつかしいことですが，世界薬学に伍して遜色ないばかりか，長い間欧洲からうけた恩義に対して報いることも考えるべきでありましょう．

それではどうすればよいのでしょうか．その方法についてはすでに雑誌に3項目にまとめて発表してあります[14]．次の通りです．

(1)薬品を可及的人体に入り易い形態に変ずること．

(2)未だ有効成分の明らかでない本邦産の草根木皮を分析してその成分を検明すること．

(3)化学合成を以て従来製し得なかった薬品を造出し，或は未知の新薬を創製すること．

これらのうち，今何をなすべきかを考えると，わが国にはまだ研究されていない薬草が多いのですから，その成分を解明することは薬学研究の成果をあげるのにもっとも早く，また成果も大きいのです．これは今日，直ちになすべきことで，しなければ外国人の手によって成績をあげられてしまうことは必至です．私は諸君と共にわが国生薬の成分分析に従事すれば，世界薬学の進歩に幾分か寄与し，わが国薬学の存在も世に知られるようになりましょう．私の意見に御賛成になって，共に薬学会の目的を達成するようにお願いします．」

この演説は「会頭長井長義君就任の演説」と題して記録されている．題名からわかるように，この文章は長井の執筆によるものではなく，学会の事務員が速記を要約したものであろう．内容の主柱的事項は『百年史』がいうように，柴田の薬学論中の内強的方法に含まれている．長井が口頭でのべた挨拶であるから，各種の意見を適宜織りまぜて演述したものと思われる．それを『百年史』では柴田，長井の論述要旨を並べてのべるとき，両者が重なる内容ではないようにした上で，長井の論だけに賞賛の辞をつけている．『長井伝』に準ずるためであろうが，これでは個人顕彰のための欠陥を学会史にもちこんだことになる．

しかし長井の論には『百年史』が見すごした注目すべき点がある．長井は早急な植物化学的研究を勧誘した．それは結果が早く，大きな成果が上がるとのべた．このとき長井はすでにエフェドリンを単離し，ペオノールの炭素骨格はレズアセトフェノンとの見当をつけていた．これらの研究はホフマンの芥子油，チーマンのコニフェリン研究に匹敵するものであった．ペオノールは長井の友人ウィルも抽出したが[15]，長井研究中として追究しなかった．放置すれば西欧人にとられてしまうことは現実に始っていたのである．長井は薬学の将来については柴田と反対に，楽観的であり，早くて目立つ成果は植物化学であげられると指摘した．わずか30数年の後，朝比奈泰彦はアネモニンの構造決定，全合成という，世界の天然物化学界の先頭に立つ輝く成果をあげたのである[16]．長井が身につけた経験を通して結論づけた演説のしめくくりは，短期間で実現するという見事な先見であった．長井のためこの点を見落してはならない．

7. むすび

『日本薬学会百年史』では，長井の会頭就任演説を『長井伝』に準じて長井独創の見解であるかのように称えているが，これはドイツの大学における製薬学の内容の紹介であった．それにはそれなりの意義があり，時宜に適していたが，長井より早く柴田も具体例をいくつもあげて解説していたのはそのためである．また口頭で行う就任の挨拶などはいつの世でも，世論を適宜まとめてのべるのが常であるから，特に文書にして公表主張するのでない限り，史的資料とするには慎重な取扱いが必要である．生薬成分研究の重要性，緊急性についても，柴田より早く桐蔭学人なる筆名で「化学的に有効性を証明することの急務」が指摘されていた[17]．こういうよびかけは，納得のゆく根拠を示し，深い考察の上にたって論述したものを重視すべきであろう．この意味で薬学振興論の発展を論ずるとすれば，柴田の論文こそ第一にとりあげるべきものである．

参考文献および注

1) 金尾清造：長井長義伝，日本薬学会，東京(1960)(以下『長井伝』と略記する)．
2) 日本薬学会編：日本薬学会百年史，日本薬学会，東京(1980)，非売品(以下『百年史』と略記する)．
3) 安江政一：薬史学雑誌，**19**，73 (1984)．
4) 『百年史』，(前出)，pp. 55～57．
5) 柴田承桂：薬誌，明治18年，273，339 (1885)．
6) 日本薬学会編：日本薬学会沿革史，日本薬学会，東京，p. 22 (1911)(本書は単行本としてではなく，明治43～44年，『薬学雑誌』の付録として7回に分けて印刷された．以下『沿革史』と略記する)．
7) 柴田承桂：薬誌，明治18年，128 (1885)．
8) 柴田承桂：薬誌，明治18年，231 (1885)．
9) 安江政一：化学史研究，54 (1984)．
10) 長井長義：薬誌，明治18年，139 (1885)．
11) 「安江政一：西欧における医薬分業成立の背景」として分業成立に関する一説を提出した．薬史学雑誌，**12**，7 (1977)．
12) 須田勝三郎：薬誌，明治17年，1～9 (1884)．
13) 薬誌，明治20年，127 (1887)．
14) 注10)「欧洲薬学史」の中にのべてある．
15) W. Will: Ber., **19**, 1176 (1886)．
16) 朝比奈泰彦，藤田穆：薬誌，大正9年，125 (1920)．朝比奈らは刺激性有毒成分プロトアネモニンを発見して合成した．本品は自然に重合して二量体のアネモニンになるのであっ

て，合成に成功はしたが，四員環の合成的証明ではなかった．この合成的およびX線結晶解析による立体配置の決定は I. K. Stamos, G. A. Howie, P. E. Manni, W. J. Haws, S. R. Bryn, J. M. Cassady: J. Org. Chem., **42**, 1703 (1977) によって行われた．この文献は名古屋市立大学薬学部榊原仁作教授によった．厚く御礼申しあげる．

17) 桐蔭学人：薬誌，明治17年，125 (1884).

Summary

Shokei Shibata and Nagajoshi Nagai are the pioneers of Japan Pharmacy. Shibata was the first to publish this proposal for the development of Japan pharmacy. Prior to this report, he had visited Western Europe, namely Germany, France, Great Britain, Italy and the Netherlands for inspecting their states of pharmacy. This visit allowed him to have somewhat pessimistic opinion for the future of pharmacy. In order to overcome this outlook, he devoted to find the methodology for the bright future.

On the other hand, Nagai stated that studying the history of the subject was essential requirement for detecting its real meaning. However he did not learn the history of pharmacy, he also proposed to study the chemical constituents of Japanese and Chinese drugs which brought the great success in Taisho Era within a short period. This glorious success guided the Japanese pharmacists into studying the chemistry as a most important area in pharmacy and neglecting its philosophical and methodological considerations. Finally they have forgotten the presence of the meaningful opinions by Shibata.

薬史学雑誌
21(1), 41～51 (1986)

『熊府薬物会目録』所載の薬物の研究（第2報）[*1]
藩内客品七十有二種について

浜田善利[*2]

Studies on the crude drugs in "Yūfuyakubutsukai-mokuroku (熊府薬物会目録)" (II)[*1]
On seventy-two guest drugs in this country

Toshiyuki HAMADA[*2]

藩内客品七十有二種は，次の出品物から成っている．

1. 矢部医士　赤星見淳　6種
2. 矢部医人　柴田宗硯　11種
3. 再春館司貨　太田久伯　2種
4. 野村孫左衛門　6種
5. 熊府医人　甲佐元登　3種
6. 本藩烏銃隊二十名長　高橋弥十郎　11種
7. 本藩典薬　町野玄寿嗣子町野玄璋　7種
8. 熊野壺井医人　宗梅醇　3種
9. 菊池医人　桑満元俊　2種
10. 熊府薬肆　本田善之丞　10種
11. 熊府古町医人　有佐祐安　3種
12. 馬見原医　飯星元達　2種
13. 失名

I. 各品目の検討

1. 矢部医士　赤星見淳出品

一水玉　右一品米田太夫[1]

村井椿寿の意見

杶按乃氷精[2] ノ水ヲ包ムモノ大サ消梅子[3] ノ如シ内ニ七分許ノ水アリ明瑩愛スヘシ重サ和秤ノ三分アリ上ニ小鼻アリ蛮人ノ説ニ此物ヲ蔵セハ海上或ハ軍中ニテ渇シタルトキコレヲ以水ヲ取ルノ法アリト謹テ高評ヲ乞フ

戸田旭山の意見

斉按玉ト水精ト相似タリト云トモ同類異種不可混然レトモ高評ヲ考ルニ別是一種ノ白玉欤真可謂異宝矣往年老夫薬物会ノ時貯水水精ヲ具スルアリ其長五寸許囲五寸許中ニ水六七分アリ転倒ニ隨テ水亦下流希有ノモノナリ又昨年ノ会ニ白石英ノ長五六寸周囲五六寸中貯水ハ九分是亦希物ナリ

山田生の意見

山田生曰疑ラクハ昔年紅毛人所将来ノメカフト呼為モノナラン子嘗聞ク其物至テ円小ナル硝子ノ上ニ紐アリ中ニ薬水ヲ貯フ紅毛人謂フコレヲ以テ眼眶ヲ摩レハ能ク目ヲ明ニスト云

水玉は水精（水晶）の別名[4a)]である．水晶の貯水品については，木内石亭が「もと水晶五色あり．また紫あり，金砂あり，貯水あり．（中略）青黄金砂および貯水のものまれなり．赤色のもの別して得がたし．石英もまたこれに同じ．近江，南部，石見等に紫色あるいは

*1 前報　薬史学雑誌，**20**，108 (1985)

*2 熊本大学薬学部 *Faculty of Pharmaceutical Sciences, Kumamoto University*. 5-1 Ōe-honmachi, Kumamoto 862.

貯水のものを出だす.[5a)]」と述べている.

水玉はまた玻璃の別名[4b)]でもあり，玻璃はガラスのことである．李時珍は水精の集解に「薬焼成者，有気眼，謂之硝子」[4a)]として，やはりガラスのことにもふれている.

したがって本品は山口生の見解が正しいようである.

一石ノアブラ　矢部白小野村産

白小野村は，上益城郡矢部町白小野で，ここは中央構造線の内帯にあたり，石灰岩地帯である.

本品は石膏である．小野蘭山は「又濃州石州肥後ニハ白色ナル者アリ皆薬舗ニ出ズ」[6a)]といい，木内石亭は「肥後芦北郡湯の浦[7)]近山より近世石膏を出す，最上品なりと.」[5b)]という.

一地漫　同寺川村産　郷語カニクソ

寺川村は，上益城郡矢部町寺川である.

地漫は，李時珍が石脳油（石油）に附して「溝澗流水，及引水灌田之次，多有之．形状如油，又如泥，色如黄金，甚腥烈.」[4c)]といい，小野蘭山は「地漫　田ソブ　ヂシブ　カナケ　カナヤケ　ミヅサビ芸州　ケズ雲州　クウズノクソ肥前　山ニ近キ田溝ノ水面ギラツキテ油ノ如キモノアルヲ云其状鉄ノサビノ如シ」[6b)]と述べている．また貝原益軒は「田沢ニアリ水面ニウカブ色黄ニシテ鉄ノサビノコトク又油ノゴトシ．カナクサシ是土中ノ油ナリイツクニモ田中ニサビ色ノモノ水面ニウカブ俗ニカナケト云是土油ナリ」[8a)]として，これには water, which contains oxide of iron と註されている．すなわち鉄銹を含んだ水である.

一エノキナバ　同犬飼村城趾産

犬飼村は，矢部町犬飼である.

ナバは熊本の方言でキノコのことである．本品はエノキについたキノコの意味で，種としてはヤナギマツタケ *Agrocybe cylindrica* (DC. ex Fr.) Maire（オキナタケ科 Bolbitiaceae）が考えられる．その理由は，本種はエノキの生の樹幹に発生し，また県内で本種をエノキナバと俗称している例があるからである．エノキタケ *Flammulina velutipes* (Fr.) Sing.（シメジ科 Tricholomataceae）は，エノキが枯死した後に発生するから，キノコを採るときはその樹がエノキかどうか不明のことがある．したがって本品はヤナギマツタケの可能性が大きいが，あるいはエノキタケかもわからない.

一直根人参　同

桃按コレ和州芳野山産ト異ナル事ナシ

小野蘭山は和人参の中で「クマモトニンジン肥後」の名をあげ，形について「直根ノ者ハ形状韓産ニ似テ鬚少ク味微甘」[6c)]と述べ，平賀源内は「和参直根ノモノアリ．茎葉朝鮮種ニ相似タリトイヘドモ，形状自然ト下品ナリ．実南天燭ノゴトクニシテ不扁，或ハ円ク，或ハ三稜ナルモノアリ．根直根ナレドモ味苦シテ不堪用．大和吉野産，下品.」[9a)]としている．また山崎灌園は直根の図をあげ「土参　芳野にんじん」として「今は芳野にては採つくし紀州境にて作るよしなり茎葉竹節にんじんと同じただ直根なり」[10a)]と説明している．本品はトチバニンジン *Panax japonicus* C. A. Meyer（ウコギ科 Araliaceae）である.

一零陵香　同　郷語ジャカウソウ

零陵香は，モロコシソウ *Lysimachia sikokiana* Miq.（サクラソウ科 Primulaceae）あるいはカミメボウキ *Ocimum sancitum* L.，メボウキ *O. basilcum* L.（シソ科 Labiatae）である[11a)]．モロコシソウは矢部にも産するが，カミメボウキとメボウキは分布していない．小野蘭山は「山海経ノ薫草ヲジャカウサウニ充ル古説ハ穏ナラズ」[6d)]といい，ジャコウソウ *Chelonopsis moschata* Miq. およびタニジャコウソウ *C. longipes* Makino（シソ科 Labiatae）は熊本にも産するが稀であり，郷語のジャカウソウがこれらのものかどうか不明である．山崎灌園は薫草零陵香にシナガワハギ *Melilotus indicus* All.[10b)]（マメ科 Leguminosae）とモロコシソウおよびミヤマタゴボウ *Lysimachia acroadenia* Maxim.[10c)]をあげている．ミヤマタゴボウは矢部ではモロコシソウより多い．したがって本品はミヤマタゴボウと思われる.

2. 矢部医人 柴田宗碩出品

一鉄朱 矢部山産

代赭石である．李時珍は代赭石の釈名[4d]に鉄朱をあげている．

一温石 同

蛇紋石である．小野蘭山は「予州三角寺ノ路辺ニ多クアル石ヲ方言ヌメリヲンジャクト呼フ柔ニシテ浅緑色或ハ五色雑ル筑後阿州ニモ多シ共ニ方言温石ト呼フ是冷滑石ノ一種ナリ」[6e]とし，また木内石亭は「諸国より出す．色かたち一ならず．火をもって焼き，病ある所をおしあたたむる石なり」[5c]とする．

一鑛石 日向州高知穂山産

松岡玄達は，鑛は「アラカ子」[12a]，鑛石は「カナイシ」[12b]とする．いわゆる鉱石であろう．

一ツチスミ 矢部山産

鉱物と思われるが不明．あるいは次項と同じ取扱いとすれば，植物の可能性もある．

一キノワタ 同

朽木ノ中ヨリ出山人血トメトス

本品は朽木の中に生えることから腹菌類のタヌキノチャブクロ *Lycoperdon pyriforme* PERS. と思われる．たたくと頂端の小孔から褐色の胞子を吹き出し，熊本ではそれを傷口につけて血止めに用いたことがある．

一ハカマソウ 同

草本と思われるが不明．『本草綱目啓蒙』，『本草図譜』，『草木図説』などにこの名は出ていない．

一石長生 同

江戸時代には主としてハコネシダ[10d] *Adiantum monochlamys* EAT.（イノモトソウ科 Pteridaceae）であった．本種は県内にはやや稀に分布する．

一カラカサソウ 同

草本と思われるが，ハカマソウと同様に不明である．

一藜蘆 同

本品は主品にも出品されており，ナガバシュロソウ *Veratrum maackii* REGEL. var. *maackii*（ユリ科 Liliaceae）である．

一菴蕳 同

本品はイヌヨモギ[10e] *Artemisia keiskeana* MIQ.（キク科 Compositae）である．

一カヂ 同 山椒葉様

本品はカジノキ[10f] *Broussonetia papyrifera* (L.) VENT.（クワ科 Moraceae）で，葉が深裂したものであろう．

3. 再春館司貨 太田久伯出品

一鍾乳石 球磨産

球磨郡は中央構造線の外帯にあたり，大小の鍾乳洞がある．

一鱗蛇皮 華渡

本品は枕紋錦蛇 *Elaphe dione* (PALLAS)，シュウダ王錦蛇 *E. carinata* (GUENTHER)，サキシマスジオ黒眉錦蛇 *E. taeniurus* COPE（ヘビ科 Colubridae）[13a]などのぬけがらであろう．

4. 野村孫左衛門出品

一石貝 葦北産

本品は巻貝の化石である．『肥後国誌』の葦北郡田浦手永に「石貝 空貝ト云里俗ビナ石ト云田浦御番所遠見の近辺里俗タテ岩ト云又高尾鉢窪山ニアリ海辺ニアルハ黒山丘ニアルハ白色也奇品也」[14]とあり，木内石亭は「肥後国芦北郡砗窪山に至品の貝石種々あり．ここにてうつせ貝という．むかし源の俊頼朝臣この貝石を弄びてよめるうたに 芦北の野坂のうらのうつせ貝 いもせならひていくよへぬらん」[5d]と述べている．

1986年2月20日，芦北郡田浦町大崎の御番所鼻の海岸を調査して，*Tulotomoides japonicus* (NAGAO)（タニシ科 Viviparidae）および *Pila fukamiensis* IWASAKI（リンゴガイ科 Pilidae）の2種の化石[15]を採集した．これは破砕された不完全品であるが，江戸時代にはここで完全な形の化石が得られたものと思われる．採集した化石2種およびこれを産する野坂の浦の御番所鼻の海岸を Plate 1 に示す．

一タダイコン

斉按タヽイコンハ即是和名田大根ナルヘシ然則漢名水蘿蔔也．

松岡玄達は「水蘿蔔 即チ沙蘿蔔キシロ大根波多野大根是也森口大根モ此類也」[12c]とい

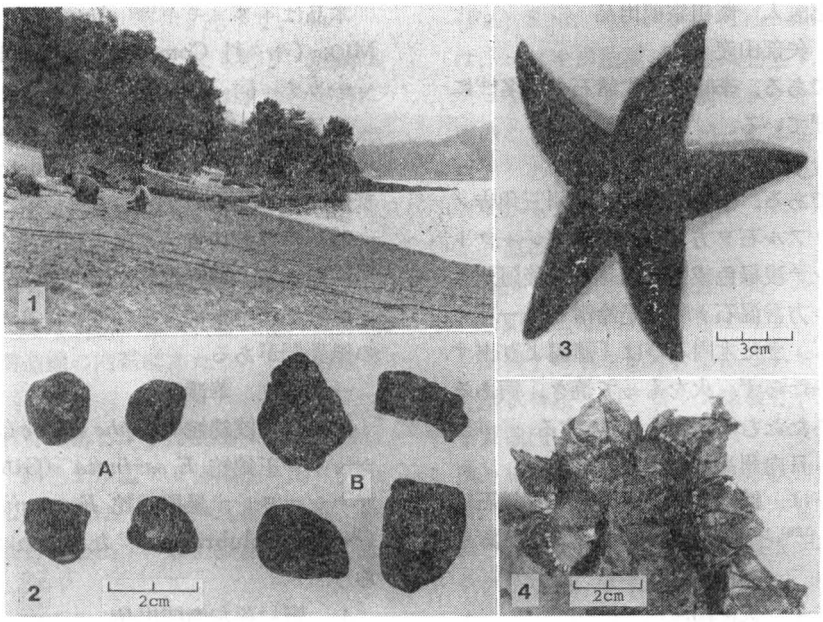


Plate 1 Some Samples of the Drugs Produced in Kumamoto and the Locality of Ishi-gai

1: locality of Ishi-gai; 2: Ishi-gai, A: *Pila fukamiensis*, B: *Tulotumoides japonicus*; 3: *Asterias amurensis*; 4: *Mitella mitella*.

う．すなわちダイコンの類である．

一木瓜

本品はボケ*Chaenomeles speciosa*(SWEET) NAKAI（バラ科 Rosaceae）の果実であろう．岩崎灌園は木瓜は「からぼけ」[10g]としている．

一無名石三種

コレタヽ常石出処形状ノ異ナルノミ

これはふつうの石であろう．

5. 熊府医人 伊佐元登出品

一砒石 華渡

砒素化合物．

一硫黄 阿蘇山産

阿蘇中央火口丘から採取した硫黄であろう．

一山査子 家園

サンザシ *Crataegus cuneata* SIEB. et ZUCC.（バラ科 Rosaceae）の果実．

6. 本藩烏銃隊二十名長 高橋弥十郎出品

一赤石脂 佐渡州産上品

杣按コレ桃花石ナルモノ剛滑光沢真ニ桃花華渡トイヘトモ亦及フ事ナシ

一代赭石 華渡中品中古渡ノモノ

一石墨二品 一和州春日山産 一江州鎌県郡産

杣按ニ江州ノモノハ疑ハ黒石脂ナラン

一焼石 信州浅間山産

松岡玄達は，滑石の説明に「近来肥後ヨリ出ル焼山石(ヤケヤマイシ)是モ亦此ノ種類ナリ」[12d]というが，浅間山は火山であるから，この焼石は熔岩の類であろう．木内石亭が記す焼石[5e]とは違うようである．

一熬海鼠 薩州産ト云モト琉球ヨリ来ル

杣按コレ腹ヲサキ熬スルモノ本邦ノ物ニ比スレハ大サ三倍形色モ亦異ナリ

斉按熬海鼠ハ熬海参ノ事ナラン乎和名イリコ

本品はナマコ類の乾燥品で，琉球産で大形ということから，種としてはタマナマコ *Stichopus variegatus* (SEMPER)，バイカナマコ *Thelenota ananas* (TAEGER)（マナマコ科 Stichopodidae）などであろう．

一小章魚 薩州産

杣按大サ蜘蛛ノ如シ小章魚ト呼ヒナスヘシ

斉按章魚小者呼為塗蟢又作土蟢見典籍便覧

本品はマメダコ *Octopus berenice* GRAY（マダコ科 Octopodidae）のような小形のタコの乾燥品であろう．本種は鹿児島県の阿久根などに産する[16]．

一紅麴　漢産

本品は粳米にアカコウジ *Monascus purpureus* VENT. を繁殖させたもの[17]である．

一藕粉　浙江省杭州府産

本品はハス *Nelumbo nucifera* GAERTN.（スイレン科 Nymphaeaceae）の根茎の蓮根から製したデンプン[18a]である．

一海盤車　肥後産

大阪屋四郎兵衛は，「キキョウガイ，又一種クモヒトデト云アリ」[19a]という．また現在中国で海盤車とよぶものは，ヒトデ　多棘海盤車 *Asterias amurensis* LÜTKEN（アステリアス科 Asteriidae）である．本種は全体を乾燥したものを薬用とする．ヒトデは熊本では岩礁地帯の海岸に棲息している．天草産のヒトデ（生品）を Plate 1 に示す．

一古磚　太宰府都府楼古瓦

一龍歯

杣按コノ物京師ノ商人富屋某カ持シ来ル所ノ備前小豆島海中ヨリ得タルモノト異ナラス唯小ナルノミ松岡先生以テ竜ノ牙歯トスコレ石ナルヘシ

斉嘗聞世自海中出ル枯骨ノ類ヲ以テ松岡先生ノ鑑賞ヲ乞フモノアル事ナシ皆奸商ノ俗ヲ瞞スルモノ也

平賀源内は「小豆嶋産，其ノ形象歯ニ似タリ．大サ六七寸，骨ニ着タルモノアリ」[9b]とする．古代の哺乳動物の歯の化石である．

7.　本藩典薬　町野玄寿嗣子町野玄璋出品

一蛤蚧　華渡

本品はオオヤモリ　蛤蚧 *Gekko gecko* L.（ヤモリ科 Gekkonidae）の内臓を除いた乾燥品[13b]である．

一ヒリュ　紅毛産

貝原益軒は魚胆[8b,c]とし，大阪屋四郎兵衛は和蘭の製薬[19b]，遠藤元理は「比里利（ビリリ）　合剤ノ薬ヲ竹ノ筒ニ押込タル者也味甚苦シ諸虫腹痛ニ良ト云」[20]とするが，清水藤太郎は「ビリリ，ピリリ，Bilis（ポ）牛胆」[21a]としている．

一紅麴　華渡

前出の紅麴に同じ．

一金星石　上郷山中産

上郷（カミゴウ）は下益城郡豊野村上郷である．

小野蘭山は，金星石は「灰色ノ石ニシテ金色ノ細点アリテヘゲヤスシ」[6f]といい，木内石亭は「和産もっとも多し．金星石という物，形状光彩および堅軟ひとしからず．（中略）遠江国掛川，肥後国益城郡そのほか処々にこれを出す」[5f]と述べている．これは黒雲母を多く含む石である．

一銀星石　同上

コレ雲母ノ下品ナラン

小野蘭山は，金星石に附して「ソノ銀色ノ細点アルモノヲ銀星石ト云」[6f]といい，木内石亭は「また銀星石ありて一品ならず」[5f]という．これは絹雲母を多く含む石である．

一燕窩菜　華渡

燕窩菜は燕窩[18b]のことで，ショクヨウアナツバメ *Collocalia fuciphaga*（アマツバメ科 Apodidae）の巣[22]である．大阪屋四郎兵衛は燕窩エンス[19c]としてこの実体を正しく述べ，松岡玄達は燕窩菜エンス[12e]として出典をあげている．エンスは燕巣である．

一見腫消　八代産

斉按見腫消二種アリ一ハ本綱ニ所出桑葉紫背ノ者一ハ薬性纂要ニ所出方茎柳葉ノ者而今此ニ所具ノ者其形状ヲ記セス不審　嘗聞田村氏ハルダマ一名スイゼンサウヲ以テ本綱ノ見腫消ニアツト老拙未知其的當乎否

ハルダマ一名スイゼンサウは，スイゼンジナ *Gynura bicolor* DC.（キク科 Compositae）[23]である．平賀源内が形状を記している[9c]が，花は白色ではなく，小野蘭山が記す[6g]ように黄色である．スイゼンジナは八代に限らず県内では今でも植えられている．

8.　熊野壺井[24]医人　宗梅醇出品

一蛇喘草　家園

杣按ニコレ必半夏ノ一種ナラン三葉亭ニ

Table 1 Mineral Drugs

No.*	Name	Locality	Origin
1	水 玉	—	水晶？
〃	石ノアブラ	矢部白小野村	石 膏
〃	地 漿	同 寺川村	鉄の酸化物
2	鉄 朱	矢部山	代赭石
〃	温 石	同	滑 石
〃	鉱 石	日向州高知穂山	鉱 石
〃	ツチスミ	矢部山	不 明
3	鍾乳石	球 磨	鍾乳石
4	無名石三種	—	ふつうの石？
5	砒 石	華 渡	砒素化合物
〃	硫 黄	阿蘇山	硫 黄
〃	赤石脂	佐渡州	赤石脂
〃	代赭石	華 渡	代赭石
〃	石墨二品	和州春日山 江州鎌縣郡	石 墨
〃	焼 石	信州浅間山	熔 岩
〃	古 磚	太宰府都府楼	古 瓦
7	金星石	上郷山中	黒雲母を含む石
〃	銀星石	同	絹雲母を含む石
10	スランカステイン	紅毛渡	蛇 石
〃	カナノウル	同	血 石
〃	古 瓦	—	古 瓦
11	魚 石	壱 岐	花紋石
〃	水 精	—	水 晶
12	琥 珀	華 産	琥 珀

* 出品者別の番号.

一尺以来花モ亦半夏ト異ナラス

椿寿の説明から，本品はオオハンゲ *Pinellia tripartita* (BLUME) SCHOTT（サトイモ科 Araceae）であろう．本種は熊本市近郊の山に自生する．

一丹参 菊池姫井村産

藤井生云丹参ニ非ス山津根ナリ

菊池姫井村は，菊池郡旭志村姫井である．山津根は山豆根で，ミヤマトベラ *Euchresta japonica* HOOK. fil.（マメ科 Leguminosae）であろう．主品三十種中に矢部山産が出品されている．

一百部 華種

杶按蔓草長五六尺葉常ノモノニ比スレバ尖長

斉按即是鄭樵カ通志ニ所載薯蕷葉ノ者欤此物葉上九道ノ縦文アリ又唐種ト称スル者ハ葉蔓皆短小葉上縦文五道ノミ

又按鄭氏通志ノ百部ヲ時珍未見ヲ以テ妄ニ非トス可謂固陋矣

本品はビャクブ *Stemona japonica* (BLUME) MIQ.（ビャクブ科 Stemonaceae）であろう．葉が尖長で葉脈9本という点はタマビャクブ *S. tuberosa* LOUR. に近いが，本種が江戸時代に日本に入っていたかどうか疑わしい．

9. 菊池医人 桑満元俊出品

一木香 家園

本品はオオグルマ *Inula helenium* L.（キク科 Compositae）[10h]である．

一トラノヲ 竜田山産

竜田山は熊本市の立田山である．トラノヲと呼ぶ植物は多いが，本品は産地から考えて，小野蘭山がいう虎掌[6h]，マムシグサ *Arisaema japonicum* BLUME（サトイモ科 Araceae）であろう．虎掌は別の出品[25]がある．

Table 2 Plant Drugs

No.*	Name	Locality	Origin
1	エノキナバ	矢部犬飼村	ヤナギマツタケ，エノキタケ
〃	直根人参	同	トチバニンジン
〃	零陵香	同	ミヤマタゴボウ？
2	キノワタ	矢部山	タヌキノチャブクロ
〃	ハカマソウ	同	不　明
〃	石長生	同	ハコネシダ
〃	カラカサソウ	同	不　明
〃	藜　蘆	同	ナガバシュロソウ
〃	菴　蕳	同	イヌヨモギ
〃	カ　ジ	同	カジノキ
4	タダイコン	—	ダイコン
〃	木　瓜	—	ボ　ケ
5	山査子	家園（熊府）	サンザシ
6	紅　麴	漢　産	粳米の発酵したもの
〃	藕　粉	浙江省杭州府	ハ　ス
7	紅　麴	華　産	粳米の発酵したもの
〃	見腫消	八　代	スイゼンジナ
8	蛇喲草	家園（熊野壺井）	オオハンゲ
〃	丹　参	菊池姫井村	ミヤマトベラ
〃	百　部	華　種	ビャクブ
9	木　香	家園（菊池）	オオグルマ
〃	トラノヲ	竜田山	マムシグサ
10	白　朮	華　種	オケラ
〃	山茱萸	家園（熊府）	サンシュユ
〃	眼　茄	紅毛渡	緬　茄
〃	赤旃檀	—	伽羅の類
12	薫　陸	華　産	クンロクコウ
13	虎　掌	—	マムシグサの類

* 出品者別の番号.

10.　熊府薬肆　本田善之丞出品

一白朮　華種

山崎灌園がいう漢種の白朮[10i]と同じで，オケラ *Atractylodes japonica* KOIDZ.（キク科 Compositae）である.

一山茱萸　家園

サンシュユ *Cornus officinalis* SIEB. et ZUCC.（ミズキ科 Cornaceae）.

一スランカステン　紅毛産

斉按スランカステイン漢名吸毒石見袁棟書隠叢説

本品は slangesteen 蛇頂石[21b]で，松岡玄達は「石也或人云フ蛇頂石也ト白黒ノ二色アリ能ク腫物ノ膿ヲ吸也塩漉石ナリ」[12f]，大阪屋四郎兵衛は「スランガステイン　吸毒石」[19d]としている．本品は蛇石ともいい龍骨と同じものである[5g].

一眼茄　同上

斉按眼茄ハ和名也其能ヲ以テ名ツクルノミ漢名ハ緬茄児見遵生八牋

又按此書嘗テ商舶載来者異本多シ而レトモ其説大同小異或ハ彼ニ在ルモノハ此ニナシ此ニアル説ハ彼ニナシ或ハ亦各部ノ説皆同キ者モ有之終真假ヲ弁スル事ヲ得ス学者宜知所選也

貝原益軒は緬茄として「是近年異邦ヨリワタル眼茄也目ヲヌグフモノ也高濂珍異薬ニハ緬茄児ト云用以抹眼眶去火毒又能解百毒形如大栗上有罩帽トイヘリ為末水ニ和シ牙疼ニヌレハ有効」[8d]といい，大阪屋四郎兵衛は，眼

Table 3 Animal Drugs

No.*	Name	Locality	Origin
3	鱗蛇皮	華　渡	シュウダなど
4	石　貝	葦　北	巻　貝
6	熬海鼠	琉　球	タマナマコなど
〃	小章魚	薩　州	マメダコ？
〃	海盤車	肥後産	ヒトデ
〃	龍　歯	—	古代の哺乳動物
7	蛤　蚧	華　産	オオヤモリ
〃	ヒリ入	紅毛産	ウシの胆
〃	燕窩菜	華　渡	ショクヨウアナツバメの巣
10	馬糞石	—	ウマの胃腸内結石
〃	万歳亀	イギリイス産	外国産のカメ
〃	鮓　荅	—	動物の胃腸内結石
11	石　蜘	肥後産？	カメノテ

* 出品者別の番号.

茄，綿茄，本名緬茄として「此物蠻産ナリ形一トクチ茄子ノ如ク中ニ種二ツアリテ外皮硬シ木実ナルヤ草実ナルヤ不詳白キモノ形長キモノ四角ノモノアリ中華ニモナキモノナリ緬甸ト云処ヨリ出ルユエ緬茄子ト云眼療ニ用ユルユエニ眼茄ト云」[19e]と述べている．本品は緬茄 *Pahudia xyrocarpa* KURZ（マメ科 Leguminosae）の種子[26]である．

一カナノウル　同上

本品は cananoor 血石[21c]で，松岡玄達は「カナノフル　金瘡出血ニ妙ナリ」[12g]といい，平賀源内は「カナノヲル　和産ナシ．カナノヲルハ南蛮語ナリ．紅毛ニテハ，ブルートステイント云．ブルートハ血ナリ．ステインハ石ナリ．其ノ色赤シテ血ノゴトクナルヲ以テ名ク．或ハ曰ク．此ノ物能ク血ヲ留ム，故ニ此ノ名アリ．吐血・衄血等是ヲ掌中ニ握テ治スルコト神ノコトシ」[9d]と述べ，大阪屋四郎兵衛は「カナノウル　血石蛮名『ブルウドステイン』ト云バチ手ヲ上トス俗ニコレヲ古渡ト云又新渡ハ形代赭石ニ似テ紫黒色ナリ『カナノウル』ハ代赭石ノルイナリ」[19d]としている．

一赤舫檀

大阪屋四郎兵衛は「本邦ニテ赤梅檀ト云モノ奇南香ノ類ナリ水色紫黒色ニシテ炷テ桂ノ香アリ此木ヲ見分ルニ伝アリ」[19f]といい，奇南香は伽羅[19g]のことである．

一馬糞石　本名未考

杣按此物病馬糞中ニ交リ出ツ大サ鶏子ノ如シコレヲワレハ重畳シテ数年ニナルモノニ似タリソノ内ニ小キナリモノアリコレ馬大豆ヲ食フトキソノヨク熟セサルモノアレハ遂ニコノ病ヲ生スト云今コレヲ験ミルニマコトニ然リ謹テ高評ヲ乞

斉按此物白龍砂ノ看ヲナスヘカラス即是鮓荅ノ類ニシテ猶牛之生黄乎其所出ノ上下ニ拘泥スル事勿カランカ

馬糞石は馬宝[27]といい，馬の胃腸にできる結石である．

一万歳亀　イギリイスノ産

杣按コレ即万歳亀ノ甲ナリ黒文黄理画カ如ク刻ムカ如シ大サ常亀ニ比スレハ異ナラスタ入甲高深ナルノミ万歳亀ノ名コレヲ考ヘス

斉按千歳亀ノ名謂ハアレトモ万歳亀ノ説未及見

イギリス産の亀の甲.

一鮓荅

杣按鮓荅ハコレ馬腹中ニアルモノ大サ朱栾ノ如シ

斉按馬腹中ノ塊謂之墨此物ハ諸獣皆有之故時珍曰鮓荅走獣及牛馬諸畜肝胆ノ間ニ生スト又按此物偽似或ハ有之不可不弁其真者

Table 4 Mineral, Plant and Animal Drugs Arranged by Locality

Locality	Mineral drugs		Plant drugs		Animal drugs		Total	
	Number	Ratio(%)	Number	Ratio(%)	Number	Ratio(%)	Number	Ratio(%)
Higo, natural	9	34	13	41	3	23	24	33
Higo, cultivated	0	0	4	12	0	0	4	6
Japan	7*1	26	0	0	2	15.5	9	12
China	3	11	6	19	3	23	12	17
Europe	2	7	1	3	2	15.5	5	7
Others	6*2	22	8*3	28	3	23	18	25
Total	27	100	32	100	13	100	72	100

*1 Includes 2 Sekiboku(石墨), *2 includes 3 Mumeiseki (無名石) and *3 includes 5 Kosho(虎掌).

光滑カニテ削之ハ細膩如麪偽者削之レハ砂砂トシテ粗也又其似テ非ナルモノハ井泉石ナリ生田野其形色正円偏邪大小不均亦層々重畳スル事並鮓荅ト無異但削之ニ最モ堅キノミ

鮓荅は馬糞石と同じものである[28].

一古瓦　出処ヲ失ス

　杣按古瓦ハ鬼面ノ紋アリ疑ラクハ国分寺ノ瓦ナラン

11.　熊府古町医人　有住祐安出品

一魚石　壱岐産

　杣按コノ物石ニ非ス泥土ノ魚形アルモノ然レトモ花紋石ノ類ナリ

主品三十種中の木葉石の項参照.

一石蜘　郷語カメノテイシ

本品はカメノテ *Mitella mitella*(L.)(ミョウガガイ科 Scalpellidae) である. 現在中国では石蜘の肉を薬用[13d]とする. 郷語とあるから熊本の産であろう. カメノテは県内の岩礁地帯の海岸に棲息する. 天草産のカメノテ(生品) を Plate 1 に示す.

一水精　不記出処

水精は水晶である.

12.　馬見原医　飯星元達出品

一琥珀　華渡

一薫陸　同上

本品はクンロクコウ *Pistacia khinjuk* STOCKS (ウルシ科 Anacardiaceae)[11b] の樹脂である.

13.　失名

一虎掌　五種

本品はマムシグサの類 *Arisaema* sp. (サトイモ科 Araceae) であるが, 内容は不明である.

II.　結果および考察

72種の各品目を鉱物, 植物, 動物にまとめて, それぞれを Table 1～3 に示す.

また鉱・植・動物の各品目の産地別の内訳を Table 4 に示す.

藩内13人による出品物72種の内訳は, 鉱物39%, 植物44%, 動物17%であった. 藩内産は鉱物36%, 植物53%, 動物17%で, 植物は半分以上が藩内産で占められているのに対し, 動物はわずかに17%である. これよりみると植物は藩内でよく採集, 栽培されていたことがうかがわれる.

さらに外国産の薬物については, 中国産の諸品の他に, 紅毛産として西洋の薬物が肥後にももたらされ, しかもそれらが熊本在住の典薬, 薬肆といった薬種をあつかう人々から出品されていることは, 時代の趨勢と新知識をとりこむ進取の心意気が, 薬剤師の先輩たちにみられてたいへん興味深いものがある.

謝　辞

本研究にあたり, 石貝の同定の労をおとりいただいた熊本大学理学部教授岩崎泰顕博士, およびヒトデ, カメノテの生品を恵与された同臨海実験所所長弘田禮一郎博士に深謝する.

参考文献および注

1) 本品は米田太夫の所有と思われる.
2) 氷精は水精の誤りか.
3) 消梅は『本草綱目』巻29梅の集解に「実円鬆脆，多液無滓，惟可生噉，不入煎造」，『本草図譜』巻58に「つらゆきばい」として「実円く大に熟すれば微紅色生にて食すれば甘美塩蔵すれば味劣る」とあり，大きめの梅の実である.
4) a) 李時珍：本草綱目，人民衛生出版社，北京，校点本第1冊，p. 506; b) 同上，p. 505; c) 同上，p. 571; d) 同上，p. 586 (1975).
5) a) 木内石亭：雲根志，今井功訳注解説，築地書館，東京，p. 181; b) 同上，p. 394; c) 同上，p. 64; d) 同上，p. 426; e) 同上，p. 421; f) 同上，p. 191; g) 同上，p. 80 (1969).
6) a) 小野蘭山：本草綱目啓蒙，杉本つとむ編，早稲田大学出版部，東京，p. 57; b) 同上，p. 63; c) 同上，p. 92; d) 同上，p. 153; e) 同上，p. 58; f) 同上，p. 71; g) 同上，p. 224; h) 同上，p. 240 (1974).
7) 芦北郡芦北町湯浦.
8) a) 貝原益軒：大和本草，白井光太郎考註，有明書房，東京，第1冊，p. 78; b) 同上，第2冊，p. 127; c) 同上，第2冊，p. 332; d) 同上，第2冊，p. 55 (1975).
9) a) 平賀源内：物類品隲，杉本つとむ解説，八坂書房，東京，p. 37; b) 同上，p. 85; c) 同上，p. 51; d) 同上，p. 32 (1972).
10) a) 山崎灌園：本草図譜，本草図譜刊行会，東京，巻1，8オ; b) 同上，巻8，11ウ; c) 同上，巻8，12ウ; d) 同上，巻32，14ウ; e) 同上，巻10，10ウ; f) 同上，巻84，4ウ; g) 同上，巻60，7オ; h) 同上，巻6，14ウ; i) 同上，巻1，24ウ (1916).
11) a) 難波恒雄：原色和漢薬図鑑，保育社，大阪，下，p. 60; b) 同上，p. 208 (1980).
12) a) 松岡玄達：用薬須知，難波恒雄編，漢方文献刊行会，大阪，p. 408; b) 同上，p. 409; c) 同上，p. 228; d) 同上，p. 154; e) 同上，p. 181; f) 同上，p. 436; g) 同上，p. 748 (1972).
13) a) ≪中国薬用動物志≫協作組：中国薬用動物志，天津科学技術出版社，天津，第1冊，p. 191; b) 同上，第2冊，p. 308; c) 同上，第1冊，p. 118 (1979); d) 同上，第2冊，p. 65 (1983).
14) 後藤是山：肥後国誌，復刻版，青潮社，熊本，下巻，p. 392 (1984).
15) Y. Iwasaki: Kumamoto Jour. Sci., Geol. **12** (1), 31 (1980).
16) 岡田要，内田清之助，内田享：新日本動物図鑑，北隆館，東京，中，p. 323 (1965).
17) 赤松金芳：新訂和漢薬，医歯薬出版，東京，p. 638 (1970).
18) a) 趙学敏：本草綱目拾遺，人民衛生出版社，北京，p. 284; b) 同上，p. 377 (1983).
19) a) 大阪屋四郎兵衛：増補手板発蒙，難波恒雄編，大阪漢方医学研究所，大阪，p. 60; b) 同上，p. 67; c) 同上，p. 56; d) 同上，p. 65; e) 同上，p. 59; f) 同上，p. 54; g) 同上，p. 4 (1980).
20) 遠藤元理：本草弁疑，難波恒雄編，漢方文献刊行会，大阪，p. 312 (1971).
21) a) 清水藤太郎：和漢薬索引，内藤記念くすり資料館，東京，第3部，p. 66; b) 同上，p. 41; c) 同上，p. 19 (1975).
22) 岡田要，末広恭雄，古川晴男，宮地伝三郎，山階芳麿：朝日-ラルース週刊世界動物百科，朝日新聞社，東京，**90**：7 (1972).
23) 牧野富太郎：牧野新日本植物図鑑，北隆館，東京，p. 660 (1981).
24) 熊野壺井は熊府壺井の誤記であろうか．現在の熊本市壺井である.
25) 13失名の項を参照.
26) 江蘇新医学院：中薬大辞典，上海人民出版社，上海，下冊，p. 2426 (1977).
27) 中国医学科学院薬物研究所：中薬志，人民衛生出版社，北京，第4冊，p. 14 (1961).
28) 馬糞石を参照．ここに重出しているのはその形状が異なっていたからであろうか.

Summary

"Yūfuyakubutsukai-mokuroku (熊府薬物会目録)" had seventy-two guest drugs offered by doctors and pharmacists in Higo country. As the results of this study, there were twenty-seven mineral, thirty-two plant and thirteen animal drugs. As the natural and cultivated products in

Higo, the mineral, plant and animal drugs were recorded nine, seventeen and three items respectively. There were also twelve drugs from China and five drugs from Europe. The very interesting samples from Europe were "slangesteen" and "canacoor."

薬　史　学　雑　誌
21(1),　52～59　(1986)

『医心方』巻30の基礎的研究[*1]
本草学的価値について

真　柳　　誠[*2]

A basic research on the vol. 30 of the "Ishinhō"[*1]
On historical and herbological value

Makoto MAYANAGI[*2]

『医心方』[1] 全30巻は針博士[2]・丹波康頼が永観2[3]（984）年に撰進と伝えられる，現存する日本最古の医書である．かつその最大の特色と価値は，岡西[4]・吉田[5]・長沢[6]・新村[7]・馬[8]・小曽戸[9]らが報告するごとく，既散書を含む六朝・隋・唐を中心とする医薬文献などより多量の逸文が出典を明記のうえ引用されていること．およびそれらのすべてが，後世の改変を受ける以前の旧態で引用・保持されていることにある[10]．それゆえ，『神農本草経』[11,12]・『本草経集注』[13,14]・『新修本草』[15,16]・『食療本草』[17,18]および『小品方』[19]・『素女経』，『玉房秘決』，『玉房指要』，『洞玄子』[20]など唐以前の医薬書を重輯・校訂する格好の資料として，本書はこれまでいく度も利用されてきた．

しかし『医心方』に限らず，所引文や断片的記述を研究資料とするにはその信頼性に対する基礎考察が不可欠である．当然ながら，このためには引用上の特徴や編述姿勢がまず把握されねばならない．あいにく現伝『医心方』には編者自身の序や跋がなく，その間の事情が不明瞭である．したがって，中国医薬書の抄出・羅列にすぎないと単純に評論されることが多く，この方面には従来見るべき考察がなかった[21]．

さて『医心方』の巻30は，それ自体が一種の食物本草とも呼ぶべきやや独立した体裁となっている．前述のごとく，当巻にも『神農（食）経』[22]・『本草拾遺』[23]をはじめとする既散医薬書の逸文が多量に保存され，唐以前の本草・食経書をうかがう上で資料価値がきわめて高い．さらに所引文の約半数量は書誌学的問題の少ない『新修本草』[24]や『証類本草』[25]中に対応文があり，それらについては信頼度の高い比較考察が可能である．

よって本報は，まず『医心方』巻30の構成・収載品・引文の取捨，の3方面より検討を加える．その結果，編者・丹波康頼の編纂姿勢と引用特徴，および日本の本草書としての価値を考察する．ひいては巻30のみならず，『医心方』所引文全体の信頼性をはかる一視座の提出を目的とするものである．

1.　構　　成

『医心方』巻30は，安政版[26]によれば「札記」を除き全51葉．全体は「目次」，「総論」[27]，「五穀部第一（24品）」，「五菓部第二（41品）」，「五肉[28]部第三（45品）」[29]，「五菜部第四（52品）」からなり，4類・計162品の食物薬が収載されている．そこで，まず丹波康頼が食物薬を五穀・五菓・五肉・五菜の4類に編成し

*1 医心方研究発表会（1985年10月，京都）にて発表．
*2 北里研究所附属東洋医学総合研究所医史学研究室 *Department of History of Medicine, Oriental Medicine Research Center of the Kitasato Institute.* 5-9-1, Shirokane, Minato-ku, Tokyo 108.

表 1　巻30所載薬第1引用書出現回数

	五穀部	五菓部	五肉部	五菜部	総　数
(新修) 本草	21	29	18	35	103
崔禹 (食経)	1	2	20	11	34
七巻 (食) 経		8	5	2	15
孟詵 (食経)	1		1	2	4
養生要集	1			1	2
(本草) 拾遺		1		1	2
馬琬 (食経)		1			1
膳夫経			1		1
小　計	24	41	45	52	162

たゆえんを考察してみる.

『医心方』以前に成立の医薬書中，食物薬をこのように類編・収載することを現在に知られ，丹波康頼が参考とした可能性を想定できるものに以下の例があげられよう.

(a) 陶弘景編『本草経集注』[30] 7巻 (492～500)[31]：巻6に虫獣，巻7に果・菜・米食の計4類を収める[32].

(b) 孫思邈著『千金方』[33] 30巻 (655～659)[34]：巻22[35]に果実・菜部・米食部・鳥獣部の計4類を収める.

(c) 『新修本草』[36] 20巻 (659)：巻15に獣禽部，巻16に虫魚部，巻17に菓部，巻18に菜部，巻19に米等部の計5類を収める.

上掲3書中，『本草経集注』と『新修本草』は各類をさらに上・中・下の三品に分類するが，『千金方』巻22および『医心方』巻30はこの三品分類を採用していない．かつ後2書は総論を冒頭に置く点，4類に食物薬を編成する点も共通している．すなわち『医心方』巻30の構成は，『千金方』のそれを参考にした可能性が推測されよう．これは，『医心方』にこのような巻を設けることが，『医心方』巻1「服薬節度第三」の冒頭に『千金方』より引用された,「夫為医者，当須洞視病源，知其所犯，以食治之．食療不愈，然後命薬」をうけたものであろうことから傍証できる.

しかし丹波康頼は，『千金方』巻22の構成・類編名などをそのまま模倣しているわけではない．『医心方』巻30の総論を注目すると，そこには『太素経』より「五穀為養，五菓為助，五畜為益，五菜為埤」[37]と，巻30構成篇名と順次のひな型を示す文が引用されている．したがって丹波康頼は，巻30編纂の発想を『千金方』によりながらも，具体的類編と順次は『太素』の記載[38]に依拠したものと考えられる．ちなみに，『太素』が「五畜」とするのに，『医心方』の類編で「五肉」と改めるのは，鳥・魚・貝なども含ませる目的に相違ない．この構成に，康頼が独自の観点を示そうとする意識を見ることができよう.

2. 収　載　品

『医心方』巻30に収載される食物薬162品は，『千金方』巻22所載の約170品とほぼ同数である．しかし個々の品目には相当数の出入がある．これは『千金方』巻22所載品の大多数が『本草経集注』より採録されている[39]のに対し，『医心方』巻30所載品は「本草」[40]ばかりでなく，多くの食療本草類から採録されている[41]ことによる.

そこで，巻30所載162品の各条で，第1に引用する書毎の回数を表1に作成してみた．この表より大体の傾向として，主食たる五穀では大多数が『(新修) 本草』を第1に引くが，他の3類，とりわけ五肉部では『(新修) 本草』以外の記述を第1に引用するものが多いことを了解できる．次にこの五肉部を例にとり，さらに検討を加えてみた.

すなわち，『本草経集注』品で『千金方』巻22に引録されるが，『医必方』巻30五肉部に見えないものを(a)．『医心方』巻30五肉

部所載品であるが，『千金方』，『新修本草』両書に未収のものを（b）として列挙すると以下のようになる．

（a） 人乳，馬乳，羊乳，驢乳，醍醐，熊，馬，狗，虎，豹，狸，獺など．

（b） 雲雀（ヒバリ），鳩，鵙（イカルガ），鯛，鯖，鰺，鮭，鱒，王余魚（カレイ），海月（クラゲ），海蛸（タコ）など．

一見して理解されるように，（a）は主に畜獣，（b）は野鳥・海産魚類という特徴がきわめて明瞭である．つまり丹波康頼は（a）の動物性食物薬をあえて『千金方』，『新修本草』より採らず，逆に両書未収の（b）を諸家の食経書などから捜し出して収録しているのである．この（a），（b）の相違に，当時の日中間の産物・習慣・副食品の違いに対する康頼の配慮を如実に見ることができる．

ちなみに，『医心方』巻30所載品で「本草云」の引文を持つもののうち，橡実・酪・鯽魚・竜葵・蘆茨（茨菰根）などは『新修本草』新附品である．かつそれらの「本草云」の文章は皆『新修本草』の大字文と一致する．したがって，少なくともそれらについては『新修本草』を引用していることが明らかである．そこで巻30所載品の配列順次を見ると，全体としては『新修本草』や『本草経集注』に従っている．ところが，同類品を前後に集める結果，処々は両書の類編や三品配順が無視されている[42]．『千金方』巻22所載の『本草経集注』品の配順にも同様の傾向を見れるが，『医心方』巻30ほどではない．むろん，『医心方』の約66年前に成立[43]の『本草和名』が，ほぼ完全に『新修本草』の配順を踏襲している[44]のとは相当の違いである．この配順に，丹波康頼の合理性と独自性をうかがうことができよう．

次に各食物薬条末に小字で付記される和名を注目すると，酪と酥[45]を除くすべてに和名が同定[46]されている．『本草和名』や，それに追加・訂正したと思われる本書の巻1諸薬和名第10は『新修本草』の全品を引録するため，後者ですら約5分の1[47]に和名が記されない．つまり『医心方』巻30は，日本に産出し，すでに広く使用されて和名のあるものを選択・収載していることが推測できる．さらに，和名の前に小字で「今案」と述べる文が30品に見られるが，そのうち25品に「今案，損害物」と明記されている．これは明らかに丹波康頼の字句であるから，康頼が人体に害を与えると判断するに足る使用経験がすでに蓄積されていたことになる．

以上の検討より，『医心方』巻30所載品は日本の実情に合わせ，日本に産出して一定の使用経験があり，かつ中国の書物に記載のある品を選択し，それらを康頼の観点から配置している，と考察される．

3. 引用文の取捨

『医心方』巻30所載計162品の各条文は，前述の「今案」文と和名を除き，すべて引用文で構成されている．おのおのは引用書数や引用文の長短により必ずしも一定しないが，全体傾向として薬名以下は基本的に（a）気味，（b）毒の有無，（c）主治・効能，（d）服用・調理法，（e）久服や多服時の副作用，の内容からなっている．（a）～（c）は『本草経集注』，『新修本草』の大字文に必ず記される内容である．また所引文から見るかぎり，諸家の食経には（d），（e）の記載が多い．諸書より漫然と引用・羅列して，（a）から（e）の内容が満たされることはむろんありえない．したがって，ここに丹波康頼が正統本草と諸家食経双方の内容を包括させんとした目的意識を読みとることができよう．

次に個々の引用文に検討を加えてみる．まず巻30所引書毎の引用字数・回数を集計し，それを表2にまとめてみた「崔禹」に次いで引用数の多い「本草」は，前述したように『新修本草』あるいは『新修本草』，『本草経集注』両書の大字文を引用したものである．ところで，両書の大字文はもともと均しく朱と墨で『神農本経』と『名医別録』の字句が区別されていたはずである[48]．両者を区別せずに「本草」と記すことは，康頼の使用したものが『新修本草』，『本草経集注』のいずれにせよ，「本経」文・「別録」文ともに墨書さ

表 2　巻30所引書別引用字数*1

本草	2,523(104)*2	楊上善注	90 (1)	要録	9 (1)
陶（弘）景注	1,168 (64)	太素経	42 (2)	広雅	9 (1)
蘇敬注	811 (40)	郭璞	31 (1)	陶	5 (1)
崔禹	3,355(124)	説文	23 (1)	氾勝之書	4 (1)
拾遺	1,242 (46)	捜神記	21 (1)	雑要訣	4 (1)
孟詵	1,162 (71)	道人	29 (1)	万畢方	2 (1)
七巻（食）経	793 (60)	列仙伝	22 (1)	書名云，人名云，又云	2,123
養生要集（鈔，録）	525 (34)	食科	20 (1)	薬物和名	828
脣玄子張	242 (11)	古人	19 (1)	薬物名（条頭）	623
朱思簡（食経）	195 (8)	礼記	15 (2)	加筆細字注*3	389
馬琬（食経）	141 (13)	通玄経	15 (1)	本文補足字	200
神農経	111 (10)	博物志	12 (1)	本文訂正字	134
千金方	110 (8)	字林	11 (1)	今案注釈字	126
膳夫経	102 (11)	盧宗食経	11 (1)	今案損害物	115
兼名苑	68 (7)	埤蒼	14 (1)	類編項目字	97
食経	60 (4)	蘇敬脚気論	10 (1)		
広志	56 (2)	薬性論	10 (1)		

*1 明らかに上掲書中の所引と判断された「丹経」「詩」「玉」「爾雅注」「鄭玄」「呉録地志」「呂氏春秋」「伝」などは，その書名と云の字数も含め上書各書の字数中に計上した．
*2 括弧内の数字は「又云」を含む引用回数を示す．
*3 加筆細字注は主に音，校異，注釈などを示す罫外・欄外の小字であるが，仮名文字のルビは除外した．
以上の総計から，巻30の字数は17,736となる．

れていた可能性を示唆している．『本草和名』[49]も両者を区別しないこと，仁和寺本系『新修本草』[50]がすべて墨書されていることもその示唆を証左しよう．なおかつ，この「本草云」以下の文字は，現行『証類本草』白・黒大字より仁和寺本系『新修本草』の大字とはるかに良く合致する．以上を勘案するならば，丹波康頼の引く「本草」は仁和寺本と同系にある『新修本草』の可能性が高いと推測できる．

また「陶景注云」，「陶景云」，「蘇敬注云」，「蘇敬云」などとわずかに異なる字句を付す引用文がある．それらすべてを『新修本草』，『証類本草』と照合したところ，2例[51]を除きいずれも陶弘景と蘇敬の注釈文の引用であった．したがって，『医心方』，巻30に「本草」，「陶景注」，「蘇敬注」などと記される引文は，均しく『新修本草』からの所引と見なしてよいと考えられる．

上述の検討にもとづき，表2より引用字数の多い順に書名をあげると，『新修本草』，「崔禹」，「拾遺」，「孟詵」等々ということになる．とすると，丹波康頼は巻30の編纂にあたり，およそこの順に各書の記載を重視している，と見て大きな問題はないだろう．幸いなことに筆頭の『新修本草』は，半数の巻[52]が『証類本草』に転録の形でしか伝わらないにしても，現在その全文を知ることが可能である．そこで，現伝『新修本草』と巻30所引文を照合したところ，以下の明瞭な傾向が認められた．

(1) 『新修本草』大字文後半の産地・採取時期は一切引用されていない．

(2) 大字文中の薬物別名はほとんど引用されない．

(3) 気味と毒の有無は必ず採録される．

(4) 久服による延年軽身に類する記述は，多くが採録される．

(5) 久服・多服による副作用は，多くは採録される．

(6) 類似品との鑑別注釈文の多くは採録される．

さて，上掲の傾向は次のように理解することができる．

(1) については先に考察したように，巻30所載品すべてに日本産品が同定・開発されており，あえて風土の異なる中国の採取時期や産地を引用する必要のないことは当然である．ましてや，その地名は後漢頃のものと陶弘景が記す[53]だけに，当時の日本に実用的意味のないことはなおさらであろう．

(2) は，『医心方』前に成立の『本草和名』が，『新修本草』中の全別名をすでに網羅しているためと考えられる[54]．

(3) の「味」の記載については，品質や類似品との鑑別の目的と，『素問』など「内経系医書」に記録される「五味説」を利用した薬効の抽象的簡称目的の2通りが考えられる．ところで先に述べた巻30の総論冒頭に引かれる『太素』の文は，本来は五味の抽象的作用論説の一部分である．しかし総論には所引文の前後にある五味論説が一切引用されないばかりか，所引文に対する楊上善注も「五味」の2字を一々除去して引用している．丹波康頼のこの際立った姿勢は，同じく『千金方』22巻の総論に『太素』と極似した五味論説が大量に記述されているのと全く対照的である．したがって (6) の傾向も考慮すると，康頼は各々の味を実践的鑑別目的で採録[55]していると理解される．

(3) の「気」と毒の有無，そして (4)，(5) の引用傾向は，いずれも巻30所載品が薬物であると同時に食物でもあり，そもそも久服し，時には多服もするからである．一般に『神農本経』，『名医別録』に記される「久服延年軽身」の類は神仙流の邪説と退けられることが多い．しかし少なくとも当時の食養生において，これは究極の目的であり，きわめて現実的課題であった．(4) の傾向はこの意味でしごく当然であり，かつそれは『医心方』巻27に養生の内容が編纂されていることに呼応している．同様に，(5) の傾向は『医心方』巻29に食禁の内容が編纂されていることと軌を同じくしている．

(6) の傾向は，『千金方』巻22が食物薬の実践的応用上の記述に終始するのに対し，康頼が陶弘景や蘇敬らと同じく，応用面以外に正条品の同定・鑑別という基礎的側面にも留意していたことを物語るものである．それは先に指摘したごとく，巻30を単なる食物本草ではなく，正統本草の内容をも踏まえたものにせんとする康頼の意識を体現したものと理解できよう．

以上6点の傾向に加え，陶弘景・蘇敬の注文や字数の多い大字文は程度の差はあれ，ほぼすべてが処々省略のうえ引用されている．また少数ながら，記載の前後を変えた引用例[56]も見られる．それらのある部分は，あるいは現伝『新修本草』，『証類本草』と，康頼が使用した底本との相違に由来する可能性も全くは否定しえない．しかし他条との比較より，多くは康頼の観点を反映した節略・改変と考えられる．

以上の検討より，丹波康頼は当時の日本に適した実用的内容を持ち，また正統本草の長所をも具有した食物本草として巻30を編纂していると考察された．したがって『新修本草』からの引用は，一定の基準で条文が取捨され，時には前後を入れ換える操作なども行われている．当然このような取捨・改変は，他の所引文中にも存在するであろうことは想像に難くない．

4. 結　　論

『医心方』巻30に対し，構成・収載品・引文の取捨の3方面より検討を加えた結果，下記の結論と示唆が得られた．

(1) 『医心方』巻30はごく一部を除き，すべて中国書籍[57]の引用文で構成されている．しかしながら，その収載品は日本に産出して使用経験のあるものが選択されている．

(2) 丹波康頼の編纂姿勢は，三品分類や正統本草の薬物類編に必ずしも拘泥せず，「五味」説と薬味を関連させる観念主義も排するなど，構成・収載品・引文の取捨ともにきわめて実践的意図に立脚している．そこには中国という権威を借りながらも，単なる引用・模倣にとどまらず，自己の見識を反映させたより完璧な食物本草を編纂せんとする康頼の強固な意志をもうかがうことができる．

(3) 巻30所引の「本草」は『新修本草』大字文である．それらは陶弘景注・蘇敬注からの引用も含め，(1),(2) の理由による康頼の取捨と一部の改変が施されたものである．したがって『医心方』所引の様々な逸文は，おのおのの旧態を保ちつつも一定の節略・改変が存在することが示唆される．

以上の結論と示唆は，今日『医心方』のみが持つ計り知れない価値をいくばくなりとも損うものではない．巻30に限定しても，現存する日本の本草書として初めて自国に適した独自性を体系化した点で，日本の本草学・薬史学上に特筆されるべき価値を持つのは明白であろう．今後『医心方』に対する基礎的研究が更に進められれば，薬史学・医史学・書誌学などの各分野で，かけがえのない本書の資料価値が一層発揮されるものと考える．

謝　辞

本研究費用は，北里研究所附属東洋医学総合研究所の矢数寄金によった．当研究所所長・矢数道明博士のご好意に心より感謝申し上げる．また本研究にあたり，種々の御高配をいただいた当研究所副所長・大塚恭男博士，基礎資料収集に援助と助言を与えられた当研究所医史学研究室室長・小曽戸洋博士に深謝する．

参考文献および注

1) 万延元 (1860) 年初刊の江戸医学模刻半井本 (「安政版」と略称) を底本に使用．その影印版に『日本古典全集』所収本 (1935年初刊・1978年覆刊)，人民衛生出版社本(北京，1955年刊)，日本古医学資料センター本 (1973年刊)，新文豊出版公司本 (台北，1976年刊) がある．また国立公文書館内閣文庫蔵の江戸写本 (「内閣文庫本」と略称) も参照した．
2) 安政版の刻医心方序に，撰進時の位を「従五位下行針博士兼丹波介丹波宿称康頼」と記す．
3) 安政4 (1857) 年に森立之が影刻した延慶本『医心方』の奥書 (注1) 所掲の人民衛生出版社本に影印収録) に，「康頼，永観二年十一月廿八日撰此書，進公家」とある．
4) 岡西為人・佐土丁：外台秘要，医心方，証類本草等所引用之古医書，東方医学雑誌，**15**，543，(1937)．
5) 吉田幸一：医心方引用書名索引，書誌学，**12**，120 (1939)；同**13**，19，50 (1940)．
6) 長沢元夫・後藤志郎：引用書解説，影印安政版所付，日本古医学資料センター，東京，p. 18 (1973)．
7) 新村拓：日本医療社会史の研究，法政大学出版局，東京，p. 286 (1985)．
8) 馬継興：『医心方』中的古医学文献初探，日本医史学雑誌，**31**，326 (1985)．
9) 小曽戸洋：『医心方』引用文献名索引(1)，日本医史学雑誌，**32**，89 (1986)．
10) 小曽戸洋：漢方古典文献解説9・医心方，現代東洋医学，**5**(4)，77 (1984)．
11) 森立之重輯：神農本草経，文祥堂書店再印，東京 (1933)．
12) 尚志鈞校点：神農本草経校点，皖南医学院科研処，蕪湖 (1981)．
13) 小嶋尚真・森立之・森約之重輯：本草経集注，南大阪印刷センター影印，大阪 (1972)．
14) 尚志鈞輯校：本草経集注，蕪湖医学専科学校油印，蕪湖 (1963)．
15) 岡西為人重輯：重輯新修本草，学術図書刊行会，川西市 (1978)．
16) 尚志鈞輯校：唐・新修本草，安徽科学技術出版社，合肥 (1981)．
17) 中尾万三：校合食療本草遺文，上海自然科学研究所彙報，**1**(3)，(1930)．
18) 謝海洲・馬継興・翁維健・鄭金生輯校：食療本草，人民衛生出版社，北京 (1984)．
19) 高文柱輯校：小品方輯校，天津科学技術出版社，天津 (1983)．
20) 葉徳輝編輯：双梅景闇叢書所収，公論社影印，東京 (1982)．
21) この空白を埋めるべく，平馬氏らの基礎研究が行われている．平馬直樹・小曽戸洋：『医心方』に引く『諸病源候論』の条文検討―その取捨選択方針初探．日本医史学雑誌，**31**，255 (1985)．
22) 真柳誠：『医心方』所引の『神農経』『神農食経』について，日本医史学雑誌，**31**，258 (1985)．
23) 開元27 (739) 年，陳蔵器撰．宋・銭易の『南部新書』に「開元二十七年，明州人陳蔵器，撰本草拾遺」とある．宋・唐慎微の『証類本

草』に「陳蔵器云」「陳蔵器余」として引用されている．

24) 底本には仁和寺蔵国宝古巻子本（巻17・19，武田長兵衛影印，1936），江戸写仁和寺本（巻15，武田長兵衛影印，1936），森立之旧蔵写仁和寺本（巻18，上海古籍出版社影印，1981），小嶋宝素復原本（巻16，台北故宮博物院蔵）を用いる．

25) 底本には柯逢時校刻『経史証類大観本草』(廣川書店影印，東京，1970）と，金・晦明軒翻刻『重修政和経史証類備用本草』(人民衛生出版社影印，北京，1957年初刊）を併用する．

26) 上掲注 1) 所引文献．

27) 底本は「総論」を，次の「五穀第一」の冒頭に置く．

28) 底本は「肉」を異体字の「宍」に作る．

29) 大田典礼（巻第30解説，影印安政版所付，日本古医学資料センター，東京，p. 222～226，1973）はこれを46品と数える．だが，これは当巻に記載のない「雲丹」を霊贏子の和名「宇仁（ウニ）」につられて記入し，これを加えて計上したことによる誤算．

30) 藤原佐世編『日本国見在書目録』(893年頃）の医方家に「神農本草七，陶隠居撰」と記されることによる．

31) 岡西為人：本草概説，創元社，大阪，p. 47 (1977)．

32) 上掲文献 13) の編成による．

33) 上掲注 30) 所引文献に「千金方卅一（ママ），孫思邈撰」と記されることによる．

34) 大塚恭男：「千金要方」について，漢方の臨床，**18**，303 (1971)．

35) 南宋刊未経宋改本『新雕孫真人千金方』(静嘉堂文庫蔵）の巻編成による．通行する宋改本『千金方』はこれを巻26に置くが，宋改を受けているゆえにこれを採用しない．

36) 上掲注 30) 所引文献に「新修本草廿巻，孔玄均（ママ）撰」と記されることによる．

37)『素問』蔵気法時論篇第22は，この「埤」を「充」に作る．

38) この記載は現伝『太素』(『東洋医学善本叢書』所収影印仁和子本，東洋医学研究会，大阪，1981）の巻2調食に見える．

39) 渡辺幸三：孫思邈千金要方食治篇の文献学的研究，日本東洋医学会誌，**5**(3)，21 (1955)．

40) 後に考察しているが，「本草云」と引かれる文は，『新修本草』からのものと推定される．

41) 前掲文献 7)，298；同文献 8)，334

42) たとえば，五菓部の最初に『本草経集注』，『新修本草』が（草）木部上品とする橘・柚を引用したり，両書の三品による配順を無視して同類物を前後に集め，乾棗(上)→生棗(上)→李(下)→杏実(下)→桃実(下)→梅実(中)→栗子(上)→柿(中)→梨子(下)の順に配置する例が見られる．

43)『日本紀略』延喜18 (918) 年8月の条に，「右衛門医師深根輔仁，撰掌中要方」とあり，『和名類聚抄』の源順序に「大医博士深江輔仁，奉勅撰集新鈔倭名本草」とあるので，おそらく現伝『本草和名』も『掌中要方』と近い年に勅撰されたものと推測されている．

44) 多紀元簡：刻本草和名序．寛政8 (1796) 年刊・『本草和名』(『日本古典全集』影印収録）前付 (1926)．

45)『政事要略』によると，文武4 (700) 年に全国に酥の製造・献上を命じている．したがって，飛鳥・奈良時代より宮廷で酥を用いたことは疑いない．ならば『医心方』や『本草和名』に酪や酥の和名を記さないのは，当時それらを外来語としてそのまま「ラク」，「ソ」と呼んでいたものと考えられる．

46) 黄粱米も条文中に和名を記されないが，巻30巻頭の目次や巻1諸薬和名第10には「キナルキア（ママ）（支奈留支美・キナルキミ）」と記されている．

47)『新修本草』薬全850品中，161品に和名が記されない．

48) 劉翰・馬志：開宝重定序．証類本草所収，上掲注25) 所引文献．

49) 影写紅葉山文庫本，森立之旧蔵，台北・故宮博物院現蔵．通行の多紀刊本は所改が著しい．

50) 上掲注 24) 所引文献．

51) 安政版・内閣文庫本ともに，杏実条に引く「陶（景）注云」文が現伝『新修本草』，『証類本草』では大字（「本経」）文であること．また柿条に引く「陶云」が，現伝『新修本草』，『証類本草』中の陶弘景注文その他などに発見されないこと．

52) 巻1・2・3・6・7・8・9・10・11・16の10巻以外は仁和寺本系の伝写本が現存する．また敦煌からは，巻1断簡の李盛鐸旧蔵文書，巻10断簡のペリオ3714文書，巻17・18・19節略

断簡のスタイン4534文書などが出土している．

53) 「其本経生出郡県，乃後漢時制」（陶弘景序．敦煌出土『本草経集注』残巻，竜谷大学蔵．京都国立博物館編：医学に関する古美術聚英影印収録，便利堂再版，京都，図版40，1973）と言う．また上掲注 25）所引文献の滑石条・陶隠居注にも，「本経所注郡県，必是後漢時也」と強調する．

54) 『本草和名』は『新修本草』以外にも，『医心方』とかなり共通の文献より別名を引用している．

55) 『本草経集注』以後，「本経」と「別録」の気・味が相違する場合，両者は「味甘・苦，平・温」のように併記されている．しかし巻30はこのような場合，多くはいずれか一方ずつを選択して引用している．これも同様の理由によると考えられる．

56) たとえば『新修本草』巻17は，「李核人，味甘苦平無毒，主…．実，味苦，除固熱調中」と記されているが，『医心方』巻30第13葉オモテは「李，本草云，味苦平無毒，主固熱調中」と，李の種仁の気味と果実の主治を混記している．また『医心方』巻30第47葉ウラの楡皮条でも，『新修本草』巻12に楡の実の主治として記される「療小児頭瘡疕」が，楡皮の主治中に混入されている．さらに『医心方』巻30第46葉ウラの牛蒡条に，「本草云，悪実，一名牛蒡，一名鼠黏草」と引く別名は『証類本草』巻9悪実条の大字文にはなく，蘇敬注文の引く『別録』文中に見え，かつ『医心方』は悪実の気味とその根茎の主治を牛蒡条中に一括して記している．巻30第21葉オモテの烏芋条は，「本草云，味苦，微寒，無毒，甘．主～」と記すが，『新修本草』巻17・烏芋条は「味苦甘，微寒，無毒．主～」と味が一括して記されている，などの例が指摘されうる．

57) 上掲文献8)に指摘されるように，巻30以外の巻には数例ではあるが朝鮮半島の医方書からの引用が見える．

Summary

The Ishinhō (医心方) written by Yasuyori Tanba (丹波康頼) in 984 is the oldest extant medical work in Japan. One of the most important contributions of this work might consist in the systematic compilation of materials selected from vast foregoing medical documents. Many of the original sources utilized by Tanba at that time have been since long lost, and people can imagine the original form of each of these lost sources through cited paragraphs in the Ishinhō.

The vol. 30 of this book deals with materia medica, and near the half of the content is cited from the Xīn-xīu-běn-cǎo (新修本草). Fortunately, we have in Japan an old manuscript, if not perfect, of the Xīn-xīu-běn-cǎo (Ninnaji-MS, 仁和寺本). The present author will therefore try to make a comparative analysis between the Ishinhō and the Ninnaji-MS of the Xīn-xīu-běn-cǎo. From this study following suggestions could be made:

(1) All of herbal diets seen in the vol. 30 of the Ishinhō had been produced and utilized in Japan before Yasuyori Tanba.

(2) The attitude of the author of the Ishinhō might have been primarily based on practical use of materials, and not necessarily on the traditional Chinese ideas of drug classification.

(3) All citations from the Xīn-xīu-běn-cǎo might have been made by the strong personality of Yasuyori Tanba who has laid stress on practicability. The selection and alteration of primary sources might have occurred in this context.

薬 史 学 雑 誌
21(1), 60～65 (1986)

日本薬局方に見られたヒ素含有製剤の変遷

山田 光男*1, 松本 仁人*2

The transition of arsenic trioxide and its preparations in Japanese Pharmacopoeia (between JP I and JP XI)

Mitsuo YAMADA*1 and Yoshito MATSUMOTO*2

I. はじめに (Introduction)

筆者（山田）は，さきに日本薬局方（以下JP）の JP I から JP X まで，継続して収載された医薬品の中から，それぞれの代表的なものとして，

合成医薬品	サリチル酸[1]
アヘンアルカロイド	塩酸モルヒネ[2]
強心配糖体	ジギタリス[3]
植物性生薬	カンゾウ・ケイシ[4]

をとりあげて，これらおよびその製剤の変遷について検索し，また JP I から JP X までの医薬品鑑別試験法の変遷[5~8]についても検索し報告した．

本年4月 JP XI が新たに公布されたので，今回は JP I から JP XI まで継続収載された品目中から鉱物性医薬品としてヒ素をとりあげ，JP I から JP XI までのヒ素含有製剤の変遷について検索したので報告する．

II. JP I 公布以前 (Until JP I was published)

ヒ素が医薬品として用いられた歴史は極めて古い．

B. C. 77～78 頃に Dioscorides が編纂した薬物誌に Arsenikon(雄黄)および Sandrache (鶏冠石) が掲げられ[9]，薬効として腐敗作用，収斂作用，火傷痂皮化作用などを利用して組織異常増殖による隆起を抑制する薬物とした．JP X 解説書[10]によれば15世紀に Celsus は亜ヒ酸をがんの腐蝕薬として使用し，16世紀には梅毒，17世紀に回帰熱，19世紀にはがんの内服治療剤として亜ヒ酸が用いられたとある．『神農本草経』の中品の部に雄黄，雌黄が掲げられ[11]，『本草綱目』金石部には雄黄，雌黄についての詳細な記載が掲げられている[12]．

赤松[13]は『本草経集注』，『新修本草』4，『千金翼方』2，『医心方』1，『證類本草』4などに雄黄，雌黄が収載されたとし，小泉[14]は雄黄，雌黄，鶏冠石についての詳細および文武天皇2年（698）に雌黄が下野から献上された（『続日本紀』）ことを述べている．

現在わが国では正倉院薬物として雄黄が保存されているが，雄黄は中国において古くから神仙薬として用いられる一方で，彫刻用として命像や愛玩品の製作材料にも用いられたと言われることから見て，正倉院に現存する雄黄はその形状から美術品として伝世したものではないかとされている[15]．

このようにヒ素は非常に古くから医薬品として用いられてきた．

*1 日本薬史学会 *The Japanese Society of History of Pharmacy.*
*2 東日本学園大学歯学部 *Higashi Nihon Gakuen University School of Dentistry.* Tobetsu, Hokkaido 061-02.

III. JP I から JP XI までに見られたヒ素製剤の変遷 (Transition of arsenic preparations between JP I and JP XI)

明治13年（1880）に A. J. C. GEERTS が編纂した日本薬局方蘭文草案には，ヒ素およびその製剤として，

亜ヒ酸　Acidum Ansenicosum

複方亜ヒ酸カリ溶液（ホレルス氏水）

Solutio Arsenitis Kalici composita

の2品目が掲げられた[16]．

明治19年（1886），世界で第21番目の公定薬局方として JP I が発布され，本年4月 JP 百周年に JP XI が公布された．参考までに JP および国民医薬品集の公布年を表1に示す．

表1　JP の公布年

JP	公布年	JP	公布年
I	明治19年(1886)	国II	昭和30年(1955)
II	〃 24 (1891)	VII	〃 36 (1961)
III	〃 39 (1906)	VIII	〃 46 (1971)
IV	大正9 (1920)	IX	〃 51 (1976)
V	昭和7 (1932)	X	〃 56 (1981)
国I	〃 23 (1948)	XI	〃 61 (1986)
VI	〃 26 (1951)	国は国民医薬品集	

本稿において国内事項は日本年号を先に掲げ，海外事項については西暦を先に掲げた．

JP I に収載されたヒ素含有製剤は次の5品目であった．（JP I 収載名）

1) 亜砒酸　Acidum arsenosum
2) 亜砒酸加留液　Liquor Kalii Arsenitis
液
法列児氏水　Liquor Fowleri
3) 砒石解毒剤　Antidotum Arseni
4) 沃度化砒素　Arseni Iodidum
5) 沃度化砒素汞液　Liquor Arseni et Hydrargyri Iodidi
度納般氏液　Liquor Donovani

次の収載品目として JP IV に，

6) 亜砒酸丸　Pilulae Acidi arsenicosi

が収載された．つづいて JP V にヒ素化合物3品目が化学療法剤として収載された．

7) アルゼノベンゾール Arsenobenzolum
8) アルゼノベンゾールナトリウム Arsenobenzol-Sodicum
9) アセタルゾール　Acetarsolum

第2次大戦後，初めての公定書であった国民医薬品集（国I）には次の4品目のヒ素含有製剤が収載された．（国I収載名）

10) アセタルゾール膣錠
11) 亜砒酸パスタ（歯科用）

表2　ヒ素製剤の変遷

No.	品名	JP											
		I	II	III	IV	V	国I	VI	国II	VII	VIII	IX	X	XI
1	三酸化ヒ素	○	○	○	○	○		○		○	○	○	○	○
2	亜ヒ酸カリウム液	○	○	○	○	○		○		〔○〕	〔○〕			
3	亜ヒ酸解毒剤	○	○	○	○	○	○							
4	ヨード・ヒ素	○		○										
5	ヨード・ヒ素汞液	○		○										
6	亜ヒ酸丸				○	○		○		〔○〕	〔○〕			
7	アルゼノベンゾール					○	○							
8	アルゼノベンゾールナトリウム					○		○						
9	アセタルゾール					○		○						
10	アセタルゾール膣錠						○							
11	亜ヒ酸パスタ						○		○	〔○〕	〔○〕	〔○〕	〔○〕	〔○〕
12	ヒ鉄丸						○		○					
13	亜ヒ酸ナトリウム注射液						○							

〔○〕は第2部収載．

12) 砒鉄丸

13) 亜砒酸ナトリウム注射液

国Iにはラテン名の記載はなかった．JP Iから JP XI までの100年間に，三酸化ヒ素（亜ヒ酸）を含む上述13品目のヒ素含有製剤が JP に収載され，あるいは削除されて現在に至っている．この変遷を表2に示す．

IV. 各ヒ素製剤の変遷 (Transition of each arsenic preparation)

表2に示すように，JP XI に収載されているヒ素含有製剤は，JP Iから継続している亜ヒ酸および国Iから掲げられた歯科用の亜ヒ酸パスタの2品目に過ぎない．JP に収載された後，医薬学・医薬品の進歩によって JP から削除されたヒ素含有製剤を含めて，それぞれの変遷について述べる．

1) 三酸化ヒ素 Arseni Trioxidum

As_2O_3

名称
- 亜砒酸 JP I～VI
- Acidum arsenosum
- 三酸化ヒ素 JP VII～XI

JP 注解[17]によれば，亜ヒ酸の応用として次のように述べている（原文）．

内用ニハ各種ノ痼疾殊ニ悪性麻拉里亜，慢性皮膚病等ニ変質薬トシテ用ユ(中略)．

外用ニハ癌腫，悪性淋巴腫ニ軟膏トシテ應用ス 薬局方ニ於テハ亜砒酸加個 謨液（法列児水）ヲ製スルニ用ユ

JP V 註解[18]では歯科領域への用途を初めて記載した（原文）．

亜砒酸ハ細胞破壊作用アルニヨリ局処ヲ腐蝕スルノデ歯髄神経ノ腐蝕ニ「クレオソート・モルヒネ」ト配伍シテ用フ

JP VI 注解[19]では亜ヒ酸の作用として「少量の持続によって同化機転が亢進して骨発生の促進，脂肪組織の肥厚，皮膚栄養の佳良，赤血球・血色素の新生亢進などの効果を示す」と記載された．

近年，ヒ素化合物は有機性・無機性に拘らず生物の生活過程に干渉する性質があることが分かり，ヒ素製剤に副作用が多いことと，これに代る優れた薬剤が多数開発されたことなどにより，内科用医薬品としての使用は JP IX 以降すべて削除された．一方原形質毒として局所組織の壊死をひきおこす性質を利用した歯髄破壊用の亜ヒ酸パスタだけが唯一のヒ素含有製剤として JP XI に収載されている．

2) 亜ヒ酸カリウム液 Liquor Kalii Arsenitis

名称
- 亜砒酸加個謨液 JP I～II
- 法列児氏水 Liquor Fouleri
- 亜砒酸カリウム液 JP III～VI
- ホーレル水
- 亜ヒ酸カリウム液 JP VII(～2部)～VIII(2部)

本剤の起源は，英国の Dr. Thomas FOUERERI が 1786（天明6）年にキナ皮の代用として間歇熱などに用いたことから始まったので JP II で法列児水と称せられ，1877（明治10年）に BROMWELL は悪性貧血に有効と報告した[20]．

JP III 註釋[21]によれば本剤は変質薬，皮膚病，神経系諸症，頑固な間歇熱に内服剤としてまた皮下注射剤としても用いるとした．本剤は少量用いると赤血球新生の促進，脂肪組織の増生をきたすなどの特長をもつが，一方で副作用として慢性ヒ素中毒をひきおこすことがわかってきたので，JP IX 以降は削除された．

3) 亜ヒ酸解毒剤 Antidotum Arseni

名称
- 砒石解毒剤 JP I～IV
- 亜砒酸解毒剤 JP V，国I

下山は本剤の解毒機構について次のように注解[22]している．

薬局方ハ砒素解毒剤ノミヲ掲ケ他ノ薬物ニ對スル解毒薬ヲ掲ケサルハ砒毒ノ中毒ハ世上最モ多ク発現スルニ由ルモノナランカ（原文中略）

過硫酸鐵＋酸化麻倔涅叟謨＝水酸化鐵＋硫酸麻倔涅叟謨

上式ニテ化生シタ水酸化鐵ヲ服用スルトキハ亜砒酸ト化合シ以テ不溶解性ノ亜砒酸鐵ヲ化生シ亜砒酸ヲシテ無害ノ化合品トナス

本剤は JP V および国Ⅰまで収載され，JP VI 以降削除された．

4) ヨードヒ素 Arseni Iodidum

名称 {沃度化砒素 JP I
{ヨード砒素 JP III

JP Iにおいては，単に性状を規定する条文だけであり，次項に述べるヨードヒ素汞液 (Donovani・ドノウァン液) 製造用の原料として収載された．JP IV 以降は削除された．

5) ヨードヒ素汞液 Liquor Arseni et Hydrargyri Jodati

(ドノウァン液 Solutis Donovani)

名称 {沃度化砒素汞液 JP I
{度納般氏液
{ヨード砒素汞液 JP III

本剤は前項のヨードヒ素と赤色ヨード汞を原料として調製し，梅毒諸症に用いられた[23]．本剤も JP IV 以降は収載されなかった．

6) 亜ヒ酸丸 Pilulae Acidi arsenicosi

名称 {亜砒酸丸 JP IV～VI
{亜ヒ酸丸 JP VII(2部)～VIII(2部)

本剤は亜ヒ酸，カンゾウ細末，ケイヒ細末を用いて調製する．補血，強壮，変質剤あるいは皮膚栄養剤として用いられたが，JP IX 以降削除された．JP 以外で本剤に類似した製剤としては塩酸キニーネを配合した砒規鉄丸 (Pilulae Chinini et Arsenici) が市販された．

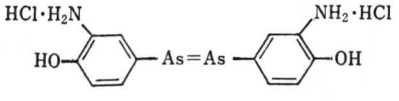
7) アルゼノベンゾール Arsenobenzolum

JP V 国Ⅰ

8) アルゼノベンゾールナトリウム Arsenobenzol Sodicum

JP V～VI

アルゼノベンゾールは1907 (明治40) 年に Paul EHRLICH (1854～1915) および秦佐八郎 (1873～1938) により創製された梅毒治療剤である．試製第606番目の製品であったので別名606号製剤ともよばれ，Salvarsan (Hoechst 社) の商品名で上市された[24]．

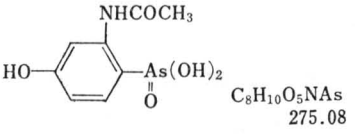


アルゼノベンゾールは梅毒以外に鼠咬症，ワイル病などのスピロヘータ感染症にも有効とされた．

アルゼノベンゾールは塩酸塩の為に刺激性なので，ジナトリウム塩として静脈注射用に改良した．これがアルゼノベンゾールナトリウムである．第2次大戦後，抗生物質の登場によってこれらは使用されなくなり，表2に示すように順次 JP から削除された．

9) アセタルゾール Acetarsolum

JP V～VI



$C_8H_{10}O_5NAs$
275.08

本剤は Paul EHRLICH が駆梅薬の研究中に創製した，アメーバ赤痢，梅毒治療に用いられ，経口投与可能という利点をもっていたが，効力が低く毒性が強い為に JP VII 以降削除された．

10) アセタルゾール膣錠

国Ⅰ

本剤は梅毒，トリコモナス膣炎に使用されたが，国Ⅰに掲げられただけで，JP には収載されなかった．

11) 亜ヒ酸パスタ Pasta Arsenicalis

名称 {亜砒酸パスタ (歯科用) 国Ⅰ
{40%亜砒酸パスタ 国Ⅱ
{亜ヒ酸パスタ JP VII(2部)～XI(2部)

本剤は亜ヒ酸と共に JP XI に収載されている唯一のヒ素含有製剤である．

本剤は使用後，数時間で亜ヒ酸が歯髄に浸透して細胞を破壊し，充血ついで浸出出血を起こさせる．この為に疼痛がおこるが，これを配合剤である塩酸プロカイン，チョウジ油が緩和する．

歯髄知覚の消失は，完全歯で24～48時間，乳歯では4～8時間でおこるが，これより長く放置しておくとヒ素中毒をおこすので注意が肝要である．

12) ヒ鉄丸 Pilulae Ferri et Arseni

名称 {砒鉄丸　国Ⅰ
　　ヒ鉄丸　国Ⅱ

本剤は亜ヒ酸と還元鉄の配合剤で，全身強壮剤として無力体質，神経症などに，また皮膚栄養剤としても用いられた．

国Ⅱでは従来の成分にリンドウ細末，甘草，アラビアゴムが加えられた．本剤は JP には収載されなかった．

13）亜ヒ酸ナトリウム注射液

亜砒酸ナトリウム注射液　国Ⅰ

本剤は亜ヒ酸1％含有皮下注射液で，国Ⅰに収載されただけで，JP には収載されなかった．

V. 考　　察 (Discussion)

ヒ素含有鉱物性生薬の利用がきわめて古い歴史をもつことは内外の諸資料からも周知のところである．

ヒ素含有製剤の主要な用途は変質剤，腐蝕剤および殺菌剤としてであり，その応用は広範囲におよんでいた．わが国では正倉院薬物に雄黄が現存するなど，その生薬学的な研究材料も残り古代医薬品としてのヒ素製剤の重要性を示唆するものともいえよう．

JP Ⅰ から JP XI までに収載されたヒ素含有製剤は，亜ヒ酸を加えて13品目あったが現在 JP XI には2品目が掲げられているに過ぎない．これはヒ素自身がもつ本来の強い毒性が隘路となって，第2次大戦後の医薬学，医薬品の目覚しい進歩に伴ってヒ素含有製剤の臨床応用は次第に衰退するに至ったことによる．梅毒の Salvarsan 療法が抗生物質療法にその位置を譲ったなどはこの例である．

1836年（天保7）に SPOONER は亜ヒ酸を歯科処理の一つである歯髄失活に初めて応用し[25]，その製剤は今日歯科領域の臨床で広く利用されるに至り，JP X 解説書においても亜ヒ酸の本質を「歯髄失活薬」と記載[10]し，現在も JP XI（2部）に収載されている亜ヒ酸パスタが歯科医療に日常的に使用されている．また歯髄失活剤としてのヒ素含有製剤には，JP 以外にもプリンツ氏失活剤，バックレー氏失活剤などもあり，ヒ素製剤以外ではパラホルムアルデヒド含有製剤（JP XI・2部）なども使用されている[26]．

このようにヒ素製剤は歯科医療の分野で重要な薬物の一つとして使用され続けているが，過去に見られたように内科などの各種他疾患への応用はほとんど見られなくなった．毒薬である三酸化ヒ素（亜ヒ酸）を含有するヒ素製剤は，その強力な薬理作用と副作用の危険性から，現在では歯科領域の一部を除いて他の優れた薬物群にその地位をゆずったとも言えよう．なお欧米薬局方に見られたヒ素製剤の変遷については別の機会に報告の予定である．

VI. むすび (Summary)

医薬品としてのヒ素含有製剤の利用に関しての近代史的な変遷を JP をもとに検索した．すなわち JP Ⅰ から JP XI までの収載各製品の概要と，それぞれの消長，背景を展望し，亜ヒ酸が歯髄失活剤として日常的に歯科医療で使用され続けている一方で，一般医療分野で医薬品としての地位を他剤にゆずった変遷について JP を通じて論じた．

参考文献

1）山田光男：薬史学雑誌，**17**，63（1982）．
2）山田光男：薬史学雑誌，**19**，37（1984）．
3）山田光男：薬史学雑誌，**19**，46（1984）．
4）山田光男：薬史学雑誌，**20**，117（1985）．
5）山田光男：薬史学雑誌，**19**，1（1984）．
6）山田光男：医薬品研究，**16**，847（1985）．
7）山田光男：医薬品研究，**16**，1150（1985）．
8）山田光男：医薬品研究，**16**，1424（1985）．
9）大槻真一郎：Dioscorides 薬物誌，エンタープライズ，東京，p. 803（1983）．
10）公定書協会：JP X 解説書，廣川書店，東京 C-809（1981）．
11）浜田善利：薬史学雑誌，**12**，62（1977）．
12）李時珍：本草綱目，商務印書館出版，香港，(3)-65（1967）．
13）赤松金芳：新訂和漢薬，医歯薬出版，東京，992（1970）．
14）小泉栄次郎：和漢薬考，生生舎，東京，下512（1968）．

15) 朝比奈泰彦：正倉院薬物，植物文献刊行会，大阪，p. 322 (1955).
16) 江本龍雄：医薬品研究，**14**，457 (1983).
17) 下山順一郎：JP 注解改正5版，梅渫書院，東京，p. 9 (1905).
18) 朝比奈泰彦：JP V 註解，南江堂，東京，p. 42 (1944).
19) 縮刷版：JP VI 注解，南江堂，東京，p. 780 (1953).
20) 西川義方，西川一郎：内科診療の実際，南山堂，東京，p. 595 (1966).
21) 藤本理：JP III 註釋，参文舎，東京，p. 339 (1907).
22) 下山順一郎：JP 注解改正5版，梅渫書院，東京，p. 90 (1905).
23) 藤本理：JP III 註釋，参文舎，p. 32 (1906).
24) 朝比奈泰彦：JPV 註解，南江堂，東京，p. 223 (1934).
25) 二木昇瑞：歯科学報，**82**(1)，1 (1982).
26) 堤璋二他：歯科薬理学，学建書院，東京，p. 395 (1981).

Summary

Arsenic, which is used in the medical field, was already reported as the name of "Arsenikon" and "Sandrache" in *Materia Medica* written by Dr. Pedanius Dioscorides and also reported in *Shinnōhonzōkyō* (神農本草経) issued in ancient China. In 1886, JP I was published for the first time in Japan and 5 arsenic medicines were included in JP I. At present time, JP XI (1986) includes only 2 arsenic medicines such as arsenic acid and arsenic paste preparation used in dentistry field. I studied the transition of arsenic medicines made during a period of 100 years between JP I and JP XI.

薬史学雑誌投稿規定

(1985年度より施行，1984年4月総会で改正)

1. **投稿者の資格**: 原則として本会々員であること（共著者はこの限りではない）．会員外の原稿は編集委員会の承認を経て掲載することがある．
2. **原稿の種類**: 原稿は医薬の歴史，およびそれに関連のある領域のものとする．ただし他の雑誌（国内国外を問わない）に発表したもの，または投稿中のものは掲載しない．
   (イ) **原報**: 著者が新知見を得たもので和文，英文のいずれでもよい．原則として図版を含む刷り上り8頁以内（英文は6頁以内）とし，刷り上り頁数は偶数であることがのぞましい．
   (ロ) **ノート**: 原報にくらべて簡単なもので，断片的あるいは未定の研究報告でもよい．和文・英文どちらでもよい．図版を含む刷り上り2頁または4頁とする．
   (ハ) **史伝**: 医薬に関係した人，所，事蹟等に関する論考，刷り上り6頁以内とする．
   (ニ) **総説**: 原則として本会から執筆を依頼するが，一般会員各位の寄稿を歓迎する．そのときは予め連絡していただきたい，刷り上り6頁以内とする．
   (ホ) **雑録**: 見学，紀行，内外ニュースなど会員各位の寄稿を歓迎する．刷り上り2頁以内とする．
3. **原稿の体裁**: 日本薬学会投稿論文執筆規定（ファルマシア第19巻1号に掲載されている）に従うこと．和文は楷書で平がな混り横書とし，かなづかいは現代かなづかいを用い，漢字は止むをえない場合のほかはなるべく当用漢字で書くようにつとめること，なお原報およびノートには簡潔な英文要旨を著者において作成添付すること（英文の場合は和文要旨を同様に付すこと）．

   和文原稿は薬学会所定400字詰原稿用紙またはこれに準じたものを用いること（原稿用紙4枚が刷り上り1頁にほぼ相当する）．英文原稿は良質厚手の国際判（21×28 cm）の白地タイプ用紙を用い，黒色で1行おきにタイプ印書すること．
4. **原稿の送り先**: 本原稿1部，コピー1部を「(郵便番号 101) 東京都千代田区神田駿河台 1-8，日本大学理工学部薬学科内，日本薬史学会　滝戸道夫」宛に書留で送ること．封筒の表に「薬史学雑誌原稿」と朱書すること．原稿到着日を受理日付とし，到着と同時に投稿者にその旨通知する．
5. **原稿の採否**: 原稿の採否は編集委員会で決定する．不採用または原稿の一部訂正を必要とするときはその旨通知し，編集技術上必要があるときは原稿の細部の体裁を変更することがある．
6. **投稿料，別刷料および図版料**: 投稿者はその原稿が印刷発行されてから1カ月以内に，原報，ノート，史伝，総説（依頼されたものを除く）は和文刷り上り1頁につき1,000円，英文刷り上り1頁につき1,500円を払込むこと．

   版下料，凸版料，写真製版料，別刷料については別に実費を申し受ける．

   別刷部数を希望するときは，投稿の際にその部数を申込むこと．
7. **正誤訂正**: 著者校正を1回行う．論文出版後著者が誤植を発見したときは，発行1カ月以内に通知されたい．
8. **発行期日**: 原則として毎年 6 月および 12 月の 2 回とし，各 30 日を発行日とし，受理年月日順に掲載する．

日本薬史学会会則

(1985年度より施行)

第1条　本会は日本薬史学会 The Japanese Society of History of Pharmacy と名付ける.

第2条　本会は薬学，薬業に関する歴史の調査研究を行い，薬学の進歩発達に寄与することを目的とする.

第3条　本会の目的を達成するために次の事業を行う.

1. 総会（毎年日本薬学会の年会の時に行う）.
2. 例会（研究発表会，集談会）.
3. 講演会，シンポジウム，ゼミナール，その他.
4. 機関誌「薬史学雑誌」の発行，当分の間年2回とする.
5. 資料の収集，資料目録の作製.
6. 薬史学教育の指導ならびに普及.
7. その他必要と認める事業.

第4条　本会の事業目的に賛成し，その目的の達成に協力しようとする人をもって会員とする.

第5条　本会の会員および年額会費は次の通りとする.

通常会員	4,000円
	(1987年度より5,000円)
学生会員	2,000円
外国会員	5,000円
賛助会員	30,000円（一口）
名誉会員	随　意

第6条　名誉会員は本会の発展に寄与したもので会長の推せんによって選任し，総会の承認を得るものとし，その資格は終身とする.

第7条　本会に次の役員をおく．会長1名，幹事若干名，評議員若干名，役員の任期は2カ年とし重任することを認める.

1. 会長は総会で会員の互選によって選び，本会を代表し会務を総理する.
2. 幹事は総会で会員の互選によって選び，会長を補佐して会務を担当する.
3. 幹事中若干名を常任幹事とし，日常の会務および緊急事項の処理ならびに経理事務を担当する.
4. 評議員は会長の推薦による.

第8条　本会に事務担当者若干名をおく．運営委員会は会長これを委嘱し，常任幹事の指示を受けて日常の事務をとる.

第9条　本会の事業目的を達成するため別に臨時委員を委嘱することができる.

第10条　本会は会長の承認により支部又は部会を設けることができる.

第11条　本会の会則を改正するには総会で出席者の過半数以上の決議によるものとする.

第12条　本会の年度は暦年（1月より12月まで）とする.

第13条　本会の事務所は東京都千代田区神田駿河台日本大学理工学部薬学科内におく.

編集幹事：川瀬　清，山田光男

昭和61年（1986）6月25日　印刷　　昭和61年6月30日　発行

編集兼発行人：東京都千代田区神田駿河台1－8

日本大学理工学部薬学科内　日本薬史学会　滝戸道夫

印刷所：東京都文京区小石川 2—25—12　サンコー印刷株式会社

製作：東京都文京区弥生2—4—16　(財)学会誌刊行センター

Eisai
エーザイ

疲れる、寝起きが悪い…

疲労倦怠感は、肉体疲労だけが原因ではありません。

疲労にもいろいろ。

一口に「疲労」といっても、肉体疲労と神経疲労、二つのタイプがあることは、日頃よく経験することです。

肉体疲労は、スポーツなどでエネルギーを消耗したとき感じますが、過度でなければ、むしろさわやかな疲労感ともいえましょう。

一方、神経疲労は、日常生活をとりまくいろいろなストレスが原因となることが多く、働き盛りのビジネスマン、主婦にも多く見られます。本人はそれと気づかなくても、過剰なストレスが、緊張感、興奮感、いらいら感を起こさせ、それが、からだ全体のリズムを調整している自律神経の働きを乱して、疲労倦怠感や頭重を感じたり、意欲がない、寝起きが悪い、肩が凝るといった症状も起こりやすくさせるのです。

メンテックはこんな薬です。

新発売のメンテックは、主に脳の大脳辺縁系と間脳に働きかけて、ストレスによって起こる緊張感、興奮感、いらいら感をしずめ、それらに伴う疲労倦怠感、頭重をやわらげる生薬製剤です。

成分は、鎮静作用と神経賦活作用がバランスよく働くよう、西洋系生薬のカノコソウ、チャボトケイソウ、ホップと、和漢系生薬のチョウトウ、ニンジン、以上5種類の薬用植物のエキスから成っています。

新発売

緊張感を伴う
疲労倦怠感に
メンテック®

30錠・60錠

〈効能・効果〉緊張感・興奮感・いらいら感の鎮静、上記症状に伴う頭重・疲労倦怠感の緩和